

塔補

古禮。年十九至十六爲長殤。十五至十二爲中殤。十一至八歲爲下殤。長殤中殤降正服一等。下殤降長殤中殤一等。今長中下三殤並降正服一等。其服七日者則降服四日。給假二日。卽三日。至未滿七歲者爲無服之殤。其已冠已笄則服之如成人。凡無服之殤。本服五月。給假五日。三月。服三日。一月。服二日。七日。服一日。若不帶官人。遭此喪者。准假日數。心喪居憂。但文云無服。故不可著服。然旣曰心喪。則宜不飲酒。不食肉。不作樂也。

本朝喪制簡質未備。近世儒學寢振。鮮言禮者。聖人所重。率不措意。慎終之典。莫能舉行。民德之不歸於厚。亦有以焉。如其喪服。旣多不相爲之族。給假又有未浹洽之恩。若曰姑奉時制。而不敢擬議。固無可道。然其有考諸經傳。而不當求諸人心。而未安者。則亦當錄其所見。以俟制作之君子。恐亦未爲過也。遂作此圖。平大星識。

成服の日には、その服あるもの、おの／＼その服を服するに論なし。服なきものも、皆素服すること禮也。されば、今素服するまでに至らずとも、必ず華盛の服を去り

て、哀戚の容あるやうに、こゝろすべきなり。

朝夕奠

服を成して後、靈座に朝夕奠を設くべし。朝奠は日出づる時、夕奠は日に逮ぶとて日入るまでにし、平日朝晡の食の如くにして、加ふるに酒羹茶菓をもてすべし。これより前、始死奠あり。小斂の奠あり。大斂の奠あり。そのほか、食を薦め參らせしも、哀み勝ちて文すること能はず、その時限必しも定まらざりしなり。成服の後始めて、日の出入もて常時とす。故にこれを朝夕奠といふなり。文公家禮には、朝夕奠の外に、別に上食の節あり。重複なるに似たり。必しも従はず。朔望には、おのれ／＼の分に隨ひその饌を厚うすべし。あらたに熟するもの珍らかなるものに遇ふ、必ずそを薦むべき也。凡そ饋奠を奉る時は、その供物を靈座の卓上に置きて、さて香を焚き拜して、心の内に饗け給へと念じて身をおこし、もとの座に復るなり。卑幼もその折々に、靈座の前に出でぬかづくべし。夕奠至らむとする時、朝奠を下げ、朝奠至らむとする時、夕奠を下ぐるなり。いづれも罩子あるべし。罩子は、竹片をたためうすものを張りしもの也。

弔 奠 賻

喪を弔ふもの皆素服すること古禮なり。今の世にても、その心をくみて、必ず華やかなる服を退けて、哀戚の容に叶ふべし。奠には、香茶菓燭の類を用ふるよろし。賻は、貨財もて喪者を助くるを云ふ。親交の厚薄に従ひ、その賻も厚薄あるべし。飲食を贈るも、また賻のたぐひなり。

治葬 穿壙

檀弓に、既殯、旬而布材とあり。布材とは、棹材を日に乾かして、葬の用意する也。こは三月にして葬る禮なればなり。今報く葬るの習はしなれば、治棺につづいて壙を穿たしむべし。葬地は、いかにも幽僻にして、長く城郭とも道路とも溝池ともならざらむ所を、かねて擇み置くべし。今佛寺の境内に葬ることなべての習ひなれども、城市につゞきたる寺地は、多くは泉源淺く、且狹隘にして、のちく發掘の恐れなきにあらず。孝子のその親に厚からむことを求めむには、別に葬地を置くにしかず。その寺院、山林によりて、かつ墓地も廣からば、その先塋に葬らむこと、もとより論なし。

葬は藏なり。深く藏むるを安しとす。壙の深さは、大抵一丈餘にして、泉に及ばざるべし。廣さは、僅に棺を容るゝばかりに穿つ。最もよろし。文公家禮治葬の條に、灰隔を作り、明器を造ることあり。必しも従はず。又朱子に、棺の四圍上下、炭屑もて實すること七八寸なれば、濕氣を避け、水患をまぬかれ、又樹根を截り、入らざらしむるの説あり。甚だうけ難し。いかにとなれば、炭はよく濕氣を引くもの也。貯へ置きたる炭を火に投ずるに、必ず湯氣あるにて知るべし。既によく濕氣を引く。いかでか水患をまぬかるゝことを得む。又、まゝ炭塊にしのお草などを種うるものあり。それを見るに、その根、炭の裂けめに入りてよく繁茂す。かゝれば、樹根を截りて入らざらしむる、全くその理なし。しかあれば、炭屑も用ひずして可なり。たゞ炭は、土氣にも水氣にも、長く變せざるものなれば、後年もし發掘に遇はん時に、或は人に心せしむるの便りともなり。なんとて、下棺の後に炭屑一二石を下し、さて土を掩ふは、猶やむにまさりぬべし。

作 主

古禮にては、初終の時に重を作りて神を寄せ、虞祭するに及びて桑木もて主を作

る。これを虞主といふ。しかる後重を取り去り、練祭するに至りて、又栗木もて主を作り、虞主に易ふ。これを練主と云ふ。宋儒に至り、魂帛祠板をもて、重と虞主とに換へ、小祥に至りて更め、栗主を作る。皆煩はしきに似たり。故に今此の時に於て不易の主を作る、簡省に従ふなり。古より、主を作るに栗材を用ふるは、その質の堅きがためなり。はじめより別に意義あるにあらず。もし栗材なくば、何木にても堅實ならむを用ひてよし。木主尺寸の大小、禮經に明文なき故に、古今さまざまの説あり。獨り伊川程子の式、その義精しとて、文公家禮もその制度を用ひ、有明一代遵用して違ふことなかりき。されどつらく、これを思へば、律度量衡は時王の制をこそ用ふべけれ。さるを周人にあらずして周尺を用ふる、義にかなへりといふべからず。よりて今諸家の説を通じ考ふるに、何休が公羊傳の註に、主狀正方。穿中央。達四方。天子長尺二寸。諸侯長一尺と見え、漢書禮儀志に木主尺二寸と見え、通典に晉武帝大康中制大廟神主。尺一寸と見え、又通典に大唐之制。長尺二寸。趺方一尺。厚三寸と見ゆれば、天子の神主長尺二寸なること明けし。但江都集禮晉安昌公荀氏祠制。神板皆正。長一尺二寸。廣四寸五分。厚五分と載す。神板即ち廟の主にして、天子の神

主と同長なるは、僭越と云ふべし。楊士勛が穀梁傳の疏に、麋信が衛次仲の言を引きたるに云はく、宗廟主皆用栗。右主八寸。左主八寸。毛奇齡云、一作三左廣厚三寸。右主謂父也。左主謂母也。この説何休がいふ所の、諸侯長一尺に殺ぐこと二寸なれば、恐らくは大夫の制なるべし。今荀氏の神板長一尺二寸。廣四寸五分と比例するに、その長八寸。廣厚三寸と云へる、適合して奇零なし。これ必ず受くる所あるなるべし。よりて、更に通典唐制の、趺方一尺。厚三寸を比例して、方六寸六分七釐。厚二寸を得、これをもて士大夫神主の定式となす。杜撰にして考據なきものに優りぬべし。神氣の憑る所、必しも穿孔の有無に係るべからざれば、孔竅は穿たずして可なり。此の時主を作ると雖も、桑主不文といへば、文字を題せず。儒葬ゆりたるもの、外は、假りに寺僧よりしるし贈れる追號の片紙を貼し、靈座に安んじ置くべし。神主を題するは、七々の前日なるべし。題しやうは、前面に先祖考姓名府君神主。先考姓名府君神主。先祖妣某氏孺人神主。先妣某氏孺人神主と書し、後面に諱氏生卒釋號をしるし、旁面に孝孫某奉祀。孝子某奉祀としるすべし。神主の函を室といふ。社ともかくなり。説文に藏主之器とあるこれなり。匱といひ、

積といふ稱もあれど、こは龜筮金玉などを藏むる器に呼ぶ稱なれば、褻に近し。室といふにしかず。室の制、開元禮に見ゆるところ、簡にして盡せり。今その制を用ふ。その制、底は主趺と同じ大さにして、下より上ること二三分、その下は蓋の大さと同じ。蓋は上より下りて底の外面と接合するなり。

遷柩 朝祖

葬の前に及び奠を設くる時、御柩を遷し奉るべしと告げ、さて廣間の上くりに新しき席をしき、まづ木主を捧げて家廟に至り、主を前に設けたる卓上に置き、暇乞の心ありて、夫より廣間に詣り、柩を新席の上に遷し、靈座をその前に設け、主を卓上に安んじ、奠をたてまつるべし。これを祖奠といふ。はなむけの心也。遺奠をも兼ねることなれば、分に随ひその饌を厚くすべし。異朝の古禮にては、祖奠も遺奠も、柩の堂を降りし後に庭上にてすること也。本朝この禮なければ、此の時の奠を祖奠として可なり。

載柩 發引

大舉を廣間へ納れ、さて香を焚き、柩前に拜して、御柩を舉に就け葬に従ひたてまつると告げて、役者をして、柩を遷し舉に載せしめ、太き麻索もて、治棺の條を照して、牢く結びつけ、棺衣を掩ひ、死者と喪主の分に随ひ供立を庭上に揃へ置き、然る後本主の函をさゝげ出で、つゞいて棺を舁き出すべし。喪主は引つゞき徒歩にて従ひ、喪主の母、妻よりはじめて、女ばうは、品に随ひ、乗もの又は徒歩にてそのあとに従ひ、親族は又その跡、他人は又そのあとよりゆくべし。

出棺の時刻は、埋葬の夜に及ばぬ程をはかりて定むべし。夜に入りては、よろづの事苟且になりて然るべからず。かつ虞祭をなすに便あし。

葬には、必ず雨具を用意して持すべし。

晝の出葬にも、地摺高張の提灯を供立に入るゝこと、世の習はしなり。死事は幽陰の義といへることゝなるべし。俗にしたがふも可也。たとひ俗に従はざるも、提灯の用意は、必ずかくべからず。雨具を備ふると同じことゝなるなり。

及 墓

今世の習はし必ず柩を佛寺に舁き入れ、寺僧の誦念ありて、さて墓所に至るなり。まづ墓所に舉臺を設け、柩をかきする、傍に靈座を設け、神主の函を卓上に置き、奠

をそなへ、前に席をしき、喪主以下みな出でて禮拜すべし。  
この儀墓地狭くして爲し難くば、寺院内にて爲すべし。

下棺

まづ杠の下よりかけたる索を解き去り、杠を抜き、もし杠抜くべからずば解きたる索を擧牀の四隅なる環につらぬき、その索を執り、徐に柩を下すべし。柩を下すには、役者の手落せず、力を用ひて傾墜の過なく、動搖の害なきやうに、喪主をはじめこゝに臨むもの心をつくべし。棺、壙底に至る時、索を抽き去り、炭屑を柩の四旁及び上に實し、さて土もて掩ひ、漸くにこれを築き、地面より二三尺の所に至り、誌石を下し、文字の表を仰がせ、平瓦もて掩ひ、また土を實し、堅くこれを築きて墳を成さしむべし。異朝にては、葬於北方北首。三代之達禮也と云ふことあれども、こなたの墓地にては、なべてはこの禮に従ひ難し。展拜するものゝ方に面の向ふやうに柩を下すべし。

反哭

喪主以下神主の函をさゝげて家に歸り、廣間の靈座に執事のものを置く置くべし。すゑまる

らせ、その前に拜して哀を盡すべし。檀弓に、反哭之弔也。哀之至也。反而亡焉。失之矣。於<sup>イテ</sup>是爲<sup>ス</sup>甚<sup>ト</sup>。と見ゆ。異朝にては、この時弔を受くるの禮あり。誠にことわりなり。その身、喪に遇ひぬるもの、おのづからそのことわりを知るべし。問喪の、入門而弗見也。上堂又弗見也。入室又弗見也。亡矣。喪矣。不可復見已矣。心悵焉。愴焉。惚焉。愾焉。心絶志悲而已矣。の言、人情を盡すと云ふべし。

虞祭

虞は安と訓むなり。親の骨肉土に歸して、魂氣はゆかざる所なし。孝子そを安んじ參らせんとて、しばし祭りて誠を致す也。故に虞祭といふ。初虞は葬より反りてすなはち祭るべし。葬の日、日中に祭るをよしとすれども、墓所遠くば晩くとも苦しからず。たゞこの日を出でず祭るべき也。もしその墓さらに遠く、經宿ならでは家に歸りがたき程ならば、初虞はその宿らむ所にて行ふべし。柩すでに壙に入るを見れば、執事者まづ歸りて虞祭の用意をなすべし。その備ふべき品々、

盥手の具 たらひ 水瓶 手巾架 手ぬぐひ  
饌の具 足うちの折敷 小角 大小のかはらけ 箸 箸臺 耳かは

高つき 菓子を盛るべきもの

酒の具 瓶子 同じく口 同臺折敷 三ぐみかはらけ 同臺折敷 したみ

同臺 折敷なし

茶の具 磁鉢 茶碗 同臺

常用の人 祭に臨み、主人の手をたすくものふたりばかりあるべし。いづれもみな謹厚なる生れの人を擇びて用ふべし。もしさる人なくば、たゞ夫婦して祭り、みだりにたすけをもとむべからず。

古禮には、三虞ともに柔日を用ふることなり。甲丙戊庚壬を剛とし、乙丁己辛癸を柔とす。虞に柔日を用ふるは、幽陰安靜に取れるなり。かゝれば、葬も柔日にするはずなり。されども、これらはよろづ禮のゆきたらひたる上のことなり。今に於ては、日の剛柔を擇ぶまでに及ばず。たゞ、親の神魂を安んじまゐらせてむとおもふま心もて、まつるを旨とすべきなり。さてその祭に臨むには、主人以下まづ浴してその身を潔うすべし。もし時刻後れて暇あらずば、盥類するまでにてしかるべし。但喪に居るが故に、髪を櫛らざるを禮とす。執事者、たらひ水瓶手巾おのゝ二つを

靈座の次の間の下の片隅に置く。その上なるは、たらひも足高く、手巾も架にかけであるべし。こは主人と親戚との手あらふところなり。そのたらひの足低く、手巾も片木の上にあるは、執事者の手洗ふところなり。香づくゑは、靈座を距ること大よそ八九尺の所に置き、上に香爐香盒燭臺花瓶を設く。主人以下みな出でて、男女左右にわかれ、靈座より左を男子の位とし、右を女子の位とし、男位はおのれの左を上とし、女位はおのれの右を上とし、おのゝ香づくゑの前に、靈座に向つて座をしめ、服もて別をなすなり。服重きものは前に居り、輕きものは後に居り、尊長は上に坐し、卑幼は下に坐す。その時主人立ちて手を澡ぎ、靈座の前に詣り、宝の蓋を舉げて神主の背に置き、香づくゑの前に退き、香を焚きて禮拜す。その席にあるもの、みな共に拜すべし。主人起ちて自ら初獻をさゝげて几上にそなへ、少しく退き拜して、謹んで虞祭を薦め奉る。乞ひ願はくはうけ給へと、默念すべし。その時執事者手を清め、一人瓶子の臺を捧げ、進みて主人の前の右の方にすゑ退く。主婦足うち折敷を持ち、主人の左に出で跪き、初獻の盤のかはらけ一つを取り、折敷に載せ執事者一人したみの臺を持ちいで、右に居向き、主人の前に置く。主人右手に瓶子をこの土器の載りし臺の左に置く。

取り、左手にてくちを開き、臺におき、その手を添へ酒を土器に斟み、くちを蓋ひ、瓶子を臺に還す。主婦左に居むき、初獻の盤なるかはらけをとり、したみの臺に移し、右に居むき、斟みたる土器の折敷を執り、左に居向き、土器を初獻の盤に奠き、さて折しきを執り、右に向ひ、少しく退く。主人拜す。これを初獻の一度とす。主婦少しく進み、左に居むき、したみの臺なる土器ひとつを折敷にのせ、右に居むき、主人の前におく。主人酒を斟むこと初の如し。主婦左に居むき、盤上の土器を取り、酒をしたみに移し、右に居むき、あらたに斟みたる土器の折敷を執り、左に居むき、土器を盤に奠き、折しきを執り、右に向ひ、少しく退く。主人拜す。これを初獻の二度とす。三度の儀もこれに倣ふべし。三度終る時、主婦前の如く盤上の土器の酒をしたみ、初獻の折しきに置き、初の土器二つをも一つに重ねて、取りて盤上に直す。主人拜して初獻を徹し入る。瓶子も同じく入るべし、たゞしたみのみその所にあり。次に二獻をたてまつり、終つて三獻を薦め參らす。皆この儀に同じ。肴は魚鳥に限るにあらず、雜煮むし麥ちまきやうかんやうのもの皆薦むるなり。たゞ魚鳥の添肴あるべし。三獻の儀終りて、子女をして茶菓を薦めしむるもよろし。さて室の蓋を掩ひ、退

き拜す。その席の諸親皆拜す。これ祭の畢也。この後一日を隔て、再虞し、又一日を隔て、三虞すること、異朝古禮の常にして、その儀みな始虞に同じ。今こゝもどにては、前にもいひし如く、再虞三虞は、必しも日の剛柔を擇ばず。俗間常に用ふる初七二七などに、いとなみて難なかるべし。

今の俗、貴賤高下を問はず、おほむね七々百日もて治喪の節とす。これ佛式に因ると雖も、或はむかし遣唐使の見慣ひ來りし、唐朝の習ひならむも知るべからず。開元禮三日成服の註に、古之制、卒哭、今之百日也。とも見え、又李習之が去佛齋説に、深く佛家七々の説を誣れり。この二説を見れば、唐俗の喪、多く七々百日の祭をなせしこと明なり。さきに、たま／＼趙翼が陔餘叢考に載せし所を見れば、七々の設け唐代に始りしにはあらず。元魏北齊の頃にや起りぬらむ。元魏の時、方にては、道士の教極めて盛なりき。道家の丹を鍊り、北斗を拜する、おほむね七々四十九日をもて界限とす。恐らくは、その法を推して終りを送るに用ひ、つひに七々の制となりしならむといへり。さもあるべし。釋といひ、道といひ、いづれめでたしと覺ゆるにはあらねど、七々の數に至つては、天に七政あり、人に

七情あり、聲に七音あり、色に七色あり、新喪の祭にこの數を用ひむことあながち非とすべからず。まして禮經の虞、卒哭のころにてこれを爲す、さらに不可なかるべし。

檀弓に、是日也、以虞易奠とあり。すでに虞祭する時は朝夕の奠を廢するなり。異朝の禮、初終より葬まで三日の間、朝夕奠を設けし故に、既に葬りては虞祭もてその奠に易へ、ふたゝび奠せざるなり。今報く葬るの習はしにして、虞祭の後たゞちに奠を廢せんは、心に安からずおぼゆ。されば、たとひ虞祭は終るとも、七々までは朝夕奠をば廢せざるべし。司馬溫公云はく、三虞之後、今人或、猶朝夕饋食者、各從其家法と、これ甚だ人情に協へり。

卒哭

卒哭とは、時ならざるの哭を終ふるの義なり。異朝にては、三虞の後、剛日に遇うて卒哭の祭を設くる禮なり。剛日は陽なり。卒哭の祭に陽日を用ふるは、まさに祖に耐せんとするがゆゑに、その靈神發動の意にとれるなり。今こなたにては、虞祭のち必しも剛日を用ひず。假滿の期も通りぬれば、七々をもてこの祭になぞらふ

べし。神主は、前日善書の人に請うて題すべし。服はけふより受服に改むべし。卒哭の祭は成事といひて、これより喪祭をあらためて吉祭とすることなれば、その儀は虞祭の如くにして、やゝ吉禮を用ふべし。其の饌も、虞祭よりやゝ重きをあたれりとす。その日夙に起きて、執事者饌品を用意し、盥手の具を備ふる。虞祭の條に述ぶるが如し。たゞ、初め神主を出し、香を焚き拜するの後、執事者手を淨め、一人手掛をさゝげて靈座の前の几上に置き、傍に退き俯伏す。主人再び香を焚き拜し、謹んで成事をすゝめたてまつる。明朝まさに王父君に耐し奉るべし。乞願はくはうけ給へと默告し、身を興す。執事者同じく身を興し、手掛を下げ退く。つゞいて一人引渡をさゝげて手掛をそなへしところにする。傍に俯伏す。主人香をもらすして拜し、身を興し起ち、次の間に至り、用意せし初獻を取つくる。執事者そを見合せて引渡しを下ぐべし。三獻の次第、室を蓋ふの式、竝に虞祭に同じ。

卒哭は、喪事の一大節なり。三年の喪、君大夫、卒哭してみな王事に服し、期の喪、卒哭して政に従ひ、小功、卒哭して元服の禮を行ひ、妻を娶るべし。

異朝の古禮には、卒哭の祭の後尸を餞するの儀あり。こは明日その主を廟に耐せ



むとするがためなり。今祠堂住居のうちにある。かつ戸を用ひたれば、餞禮は爲すに及ばず。

## 附

附は、卒哭の明日とり行ふ祭の名なり。附の字義は猶屬と云はむが如し。死者の神主を昭穆の次第に従ひ、その王父の廟に屬して王父と共に祭る也。蓋し新死者の魂を、上祖考に同じうして神靈と崇むる也。檀弓に、殷練而附<sup>ハシテ</sup>。周卒哭而附<sup>ハシテ</sup>。孔子善<sup>トセリテ</sup>殷。と云ふとあり。殷人急にその親を死せりとするに忍びず。故に小祥の前遽にこれを引いて先祖に同じうせず。周人ごくその親を神靈と崇めんと欲す。故に卒哭の後遽にこれを引いて先祖に同じうす。二つのもの、各、その孝を伸べ、誠を致すのわざにして、厚薄あるにはあらず。然るに急にその親を死せりとするに忍びざる、深く人情に協へるをもて、孔子殷人をよしとし給へり。孔子のよしとし給へる所なれば、附祭は殷禮によりてこそ行はまほしけれ。後世殷禮の詳なること得て聞くべからず。故に溫公書儀文公家禮も、皆周禮に従ひ卒哭して附すること定められたり。又本朝にては、いにしへより神道を重んずるならばしなれば、周人に

倣ひ、ごくその親を神靈とする、殊に宜しとすべし。その祭禮は、いま廟なければ、祠堂に於てすべし。饌を具ふことは卒哭に同じ。質明とく興きて、主人以下靈座を拜し、祠堂にいたり、先づ中央に卓を設け、その左の方に少しひき下げて別に卓を置く。香案の設は、虞祭の時の如くなるべし。中央の卓を去るこ  
と八九尺なるべし さて、新主を附せむとする祖妣の宝をさゝげて、中央の卓上に置き、靈座に立かへり、新主をさゝげて再び祠堂に至り、左の卓上に置き、男女おのゝ位に就くこと、虞祭の條にいへるが如し。さてまづ祖妣の主を出し奉り、次に新主を出しまゐらせ、主人香案の前に退き、香をもち拜する時、男女みなともに拜すべし。手掛ひきわたし、三獻を進めまゐらすも、祖妣を先にし、新主を後にす。執事者手掛を祖妣前に供へたてまつる時、主人再び香を焚き、今日御孫某を御側に附しまゐらす、因て謹んで酒饌を薦め奉る、こひ願はくはうけ給へと告げ、新主の前に供ふるとき、又香をもち、今日御祖妣の御側に附しまゐらす、因て謹んで酒饌を薦め奉る、こひねがはくは饗け給へと告ぐべし。この後の儀節おほかた卒哭の如し。その終り、まづ祖妣の宝を蓋ひ、次に新主を納めて男女皆ともに拜し、さて祖妣の宝を故の處にをさめ、新主をその

左方に安んじ奉るべし。

萬斯同云はく、古之祭考妣者、獻考則不復獻妣。蓋禮統於尊、猶之燕饗之禮、與席者雖多、而其獻賓止一人而已。此古禮也。亦溫公文公之禮也。豈有既獻祖考、復獻祖妣、既拜於祖考之前、復拜於祖妣之前者乎。この言に據れば、耐祭に三獻九度を侑め參らするは、たゞ祖考の前のみにして、祖妣と新主とは、初獻の三度をたてまつり、あとは獻備の品ばかりにてやむべし。

耐は、新主を廟に入れて主父に屬するの祭なり。儀禮及び禮記、皆一と度耐するの主を奉げてもとの靈座に反るの文なし。溫公書儀文公家禮の耐し已りて後、新主をさゝげて靈座に還るは、鄭康成の説に従へるなり。鄭氏の説、溫文二公の從ふ所なりと雖も、その何の據る處を知らず。且諸家の辨駁する處、その理もまた明なり。陳祥道が將葬而既祖、柩不可反、孰謂將耐而既餞、主可反乎。といへる、呂大臨が禮之耐祭、各以昭穆之班耐於其祖、主人來除喪、主未遷於新廟、故以其主耐藏於祖廟、有祭即而祭、既除喪而後主遷於新廟、といへる、萬斯大が卒哭之明日耐主於祖廟、自此而往不返、故卒哭後更有餞、猶人之遠行而餞之也。先儒謂耐後復反

於寢。然則何庸有餞乎。といへるが如き、みな耐主寢に反るの誤を正すに足れり。されば、今耐祭し畢り、神主を反さず、靈座を徹するを宜しとす。

雜記に、男子耐於王父、則配。女子耐於王母、則不配。とあり。配とは王母を并せ祭るを謂ひ、不配とは王父を祭らざるを謂ふ。これ尊者の祭は卑者に及ぶべく、卑者の祭は尊者を援くべからざるの道理なり。

孫は必ず祖に耐し、孫婦は必ず祖姑に耐することは、いにしへ宗廟の位に昭穆ありて、新主昭なれば、昭廟の主のみ遷して穆廟に事なく、新主穆なれば、穆廟の主のみ遷して昭廟に事なき爲に、この禮あるなり。後漢以後別廟の制なく、同堂異室にして祖考盡く一所にあり。本朝にても、むかしは昭穆の沙汰もありつれども、今はなし。されば、今こなたにて深く昭穆の例に拘るは、變通を知らざるなり。故におのれは、父の喪には、曾祖考妣に耐せずして親しく祖考妣に耐し、母の喪には、父猶世にまさば祖妣に耐し、父うせ給ひての後ならば、たゞちに考に耐する、古禮に戻るといへども、人情に於て近しとおもふなり。開元禮の耐祭は、古禮に泥ます三代を并せ祭れり。これも亦義をもて起すものなり。孝子そのここ

ろの安き所を撰ぶべし。

假 滿

假滿は今の忌明なり。あらいみどけたりとも、服の名ある間は全く服を脱ぐの理なし。王事國事に従ふものは、成服の條に云ひし如く受服を著て勤むべし。慶弔の事俗に従はざることを得ずと雖も、またおのづからその心得あるべし。宴會酒席の如きは、ふつに赴くべからず、あづかるべからず。

受服、本藩の制もていはゞ、肩衣羽織袴みな薄墨に染めて紋はなかるべし。羽織は緒の色もて位階を分つべき也。給人以上はその緒白、給人以下はあさぎ、その下は黒なるべし。

小 祥

小祥は十三ヶ月にして行ふ祭の名なり。初忌日を用ふべし。祥は吉と訓む。虞は喪祭なり。卒哭祔は吉祭なり。小祥はいよゝ吉也。しかれども、大祥にくらぶれば未だ全く吉ならず。ゆゑにこれを小祥といふ。その祭の前日、主人以下みな沐浴し、髪を櫛り、爪をきり、みづから祭所を灑掃し、をなごは主婦よりはじめて、祭器はいふに

や及ぶ、鍋釜に至るまで洗ひ滌ぎ、務めて清潔を盡し、祭饌を具ふべし。事を行ふは卒哭の禮に同じ。たゞ心中に念じて、日月とゞまらず奄に小祥に及びぬ。謹んで酒食を薦め奉るといふべし。これ小祥とはいへども、本朝の制として父母の喪もこの月にして除くことなれば、すべて異朝の大祥の制の如くなるべし。

雜記に、祥主人之除也、於夕爲期。朝服。祥因其故服。といへれば、その前夕より吉服を服し、翌朝の祭にその前夕の服を著るべし。

この祭はてゝ後五世以上の親つきぬる神主あらば、上の間に卓を設け、神主を置き、饌を供ふること、朔日の儀の如くして、心は窮なしと雖も、禮制限あり、これより永く祧し奉るべし、感愴にたへず、謹んで酒果を供へたてまつると告げ、さてその主を匣に約めて祠堂の壁にかけ置くべし。天子諸侯は祧主を太廟の夾室に藏むること禮なり。大夫士祧主の事禮經に明文なし。今士人の家に祧主を置くべき所なければ、墓所に埋むべしといふ説あれども、甚だ戚まじきわざにして、爲すに忍びず。故に匣に納めて祠堂にかくるの説を爲すものなり。

禫

禫は服を除き、常に復る祭の名なり。禫とは澹といふにおなじく、平安のこゝろなりといへり。士虞禮記に、中月而禫といへるは、大祥の月なりともいひ、又大祥より一月を隔つるともいひて、諸家の説まち／＼なり。そのあげつらひは、今しばらく置く。この祭、三年の喪のみならず、期の喪にもあるなり。雜記に、期之喪、十一月而練、十三月而祥、十五月而禫の文あり。練は再度の受服なり。鄭註に、此謂父在爲母也。と見ゆ。これは禮經母のために齊衰三年なるを、父の尊いですが爲、降して期の喪となす也。今本朝の喪制、父母の爲に期なり。古禮、父の尊いですがために、母の喪を降して期の喪となす。聖人の制、父母の喪三年なるべきを、今國制のあるがために俯し、就いて期にしてやむと同じ義なれば、雜記の説に従ひ、小祥の後一月を隔て、十五月めに禫祭を薦め、しかる後に常に復るべし。その祭儀はたゞ喪大記に禫而從御とあり。閒傳に、禫而飲醴酒。始飲酒者先飲醴酒。始食肉者先食乾肉。とあれば、この祭はてざるの前は、服を脱ぐといへども酒のまず、肉食はず、寢を復すべからず。檀弓に、是月禫、徒月樂。といへれば、樂をなすは十六月の朔より始むべし。

忌日

いにしへ、四時の祭の嚴なりし世には、忌日に奠獻の禮なくしてたゞ酒のまず、肉食はず、樂きかず、哀を致して變を示し、のみなり。世下りては、人多く四時の祭を行はず、たゞ忌日のみ祭を設く。その四時の祭を闕くは非禮なりと雖も、忌日に奠を薦むるは人情にかなへり。效はずはあるべからず。但祠堂の内にては、衆尊者の同じく據り給ふ所にして、獨り享け難き心あれば、必ずその主を中堂に出しまゐらせて、さて祭り、その儀は禫を祭るが如くなるべし。此儀祭禮説に詳なり。その祭祀の魚肉は、賓客あらば進めてよし。家のものもとより蔬食するなり。服は常を變じて墨衰なるべし。

眞西山が讀書記に、前世名家嫁女。其篋中有墨衰一稱。以爲忌日慰舅姑之服。可法也。と見ゆ。むかしは婦女といへども猶かくの如し。いま世ます／＼下れりとはいへど、禮を好める君子は、常に墨衰一具を備へて、内には忌日の服として、外には親戚の弔服となすべし。

凡そ祭の禮は、皆吉服して福を飲み、胙を受くることなり。然るに、忌日の祭は、墨衰して吉服せず。蔬食して、福を飲まず、胙を受けず、おほやう喪の祭と同じ。故に

今喪禮の末についてつ。

聞喪 奔喪

他國にありて、父母うせ給ふとつげ來らば、まづうちなきて、さて使にありしやうをたづね問ふべし。歸國することわがまゝならば、身の裝束常をかへ、すこしも花やぎたる物を用ひず、打しをれたるさまにて道をいそぐべし。奔喪古禮に、日に行くこと百里、大凡今の十里にあたる夜をもて行かず、哀戚すといへども害を避くことあれども、今太平の世のかたじけなき、四方の海波靜にして、五畿七道のあひだにいつれの道か夜行くべからざらむ。されば古に泥ます、夜を日にかけていそぎ、路次に滞るべからず。たゞ船路はみだりにいそぐことなかれ。あやふし。家に歸り入りなば、まづ柩前にいたり、拜して哀を盡し、さて家人と相弔ふべし。家に歸りし後四日服を成すといへれど、その服ととのひなば、すなはち著るべし。その歸り至る、葬禮すみての後ならば、まづ墓所にまゐるべし。もし故ありて歸國することならぬ旅ならば、上の座に香燭を供へ、朝夕禮拜して哀を致すなり。もし本國の家に子孫兄弟なくば、旅なりとも、日ごとに朝夕奠を具ふること儀の如くすべし。

返葬

父旅にてうせ給はん、その子もし旁にあらば、初喪の禮、家にある如くつとめて、棺に斂めまゐらせ、柩にしたがひ國に返るべし。もし家にありて父他國にうせ給ふと聞かば、旅よそほひ奔葬の條にいひしが如くとのへて、いそぎその所にいひたり、よくしたゝめて柩にしたがひ歸るべし。返葬の棺は、その造りやう殊に心を盡すべし。ちからあらむ人は、前の造棺の條にいひし如くしたゝめて、その上を、さらに厚さ一二寸の材もて、今一重外棺をつくり、内外をか煉脂もてぬり、その内棺とのあひだは、綿衾もてつめ、外の裝は乗物に擬して作り、昇く杠も一條にして、上をば白布もておほふべし。その所發足せんとする前の日の夕奠に、あすなむ故郷へ御供申すべしとつげ奉り、供ぞろへ式の如くして柩を出し、その身は柩にそひて徒歩にて一里ばかりも行きて、それより馬乗もののにのる、心に任すべし。とまり／＼にて届かむ程に朝夕の奠をそなへ、故郷すでに近づきなば、いつの日いつの時に到着あるべしと、一族のもとへつげやるべし。その日には、一族も家より一二里の間にいで迎へ、そのあたりに寺院などあらば、そを假りて棺を待うけ、しば

しとゞめて、おの／＼香を焚きて禮拜し、それより家にともなひ入れまゐらせ、さて式の如く送葬すべし。今の人、まゝその親を客地に葬らむことをはゞかり、便易をはかりて火にやき、その骨を取り歸り葬るものあり。これ大なるあやまりなり。孝子死につかへまつること、生につかへまつるが如しといはずや。その親のつゝがなくまさむとき、その御身を疵つけ傷らむには、大逆無道の誅のかるべからず。今うせたまひたればとて、人もするぞとて、火を執りその肌體を焚き壞しまゐらせむこと、これを何とやいはむ。たとひ不孝の子ありて、その親のなきがらを野やまにすて、鳥けだものについばみ食はしめむも、猶自ら焚き毀ふものに癒らずや。釋氏火化の説、久しく世に行はれ、習慣して常となり、見るもの曾て怪みを爲さず、たゞ市井の細民これを行ふのみならず、士大夫もまたこれをなすものあり。昔先王孝道に依りて禮を制し給ふ。士大夫を奉じ、身を立て、推して民を化せむとす。これをいかにぞ便易に就いてその禮を棄つるや。たゞ禮を棄つるのみならず、その親を擧げてこれを棄つ。淺ましといふもおろかなり。かの延陵の季子が旅にしてその長子をうしなへる、骨肉は土に復り、魂氣はゆかざる所なしとて、つひ

にその所に葬れりしを、孔子禮に合へりとのたまへり。されば道遠く財乏しく、歸り葬ること能はずば、すなはちその所に葬るべし。猶火に焼くにまさること遠し。

## 居喪雜儀

曲禮に、居喪、未葬、讀喪禮。既葬、讀祭禮。喪畢、復常、讀樂章。とあり。喪禮とは、朝夕奠・朔望奠・小大斂及び殯葬等の禮を云ふ。祭禮とは、虞・祔・卒・哭・祥・禫等の禮なり。死を送るの道、喪禮より大なるはなし。故にその誠信を致して悔ゆることなからむとて、葬の前必ずその禮經を讀むことなり。死につかうまつるの道、祭禮より重きはなし。故に追養にその嚴なることを致さむとて、既に葬るの後、また必ずその禮經を讀む也。復常とは、禫の祭のはてし後を云ふ。喪に居ては樂をいふべからず。こゝに至つて始めて樂書を讀むべし。

檀弓に、大功廢業。或曰、大功誦可也。と見ゆ。業は、身に習ふ所の事をいふ。誦は、口に習ふところの事なり。このこゝろをこなたにていへば、五月以上の喪はしばらく學藝をも廢すべし。三月以下の喪には、讀書は苦しからざる也。

雜記に、三年之喪、言而不語。對而不問。とあり。言はおのれの事をいふなり。語は人の

爲に物がたりする也。父母の喪にはおのれの言はで叶はぬことをいふまでにて、人と物語するに至らず。人の問ふには、その對のみして、これよりもの問ふことあるまじきなり。又喪服四制に、齊衰之喪、對而不言。大功之喪、言而不議。緦、小功之喪、議而不及。樂、齊衰の喪には、人に問はるゝ事あらば、たゞその事をこたへて、餘事に言及ばざるべし。大功の喪には、餘事に言及ぶも人と論議問答すべからず。小功、緦麻の喪には、人と論議問難するも、樂の事に及ばざるべし。

雜記に、疏衰之喪、既葬人請見之、則見不請見。人、とあり。重喪の内といへども、葬の後には、逢ひたきよしを申いるゝ人にあふこと苦しからず。たゞ是よりゆきて、人に逢ふことを請ふまじきなり。

喪服小記に、養有疾者不喪服。養尊者必易服。養卑者否。と云ふことあり。これは身に喪服ありて、親族の疾の看とりする時のこゝろ得なり。病者の爲には、生けらむことを求めて吉を主として凶を惡むが故に、その喪服を常服に易ふる也。されどもおしなべてしかするにはあらず。子弟の服を服して父兄の看とりせざるのみ。父兄の服は、子弟のために易ふべからず。

## 墓碑

墓碑といひ、墓碣といひ、墓表、墓識、墓版などいふ。その稱ことなれども、皆おなじくはかのしるしなり。墓にしるしの石を建て、その生卒、爵里、行實をしるすこと、異朝にては漢代をはじめとす。本朝にては、さらに後の世に起れり。今なべての習となりぬれど、その行實をしるすはまれなり。近き頃に及びて、和漢のまなびあるもの、多くは墓碑のふみ作りて、その功德を褒贊することなり。されど、その人果して賢ならば、もとよりひとの稱頌する所となりてよゝにかくれあるべからず。碑誌のふみを待ちて始めて人にしられなむや。もしその人はたして不賢ならば、たごひ巧言もて強ひてその采飾を極めたりとも、いたづらに譏笑の資とならむのみ。たれかはそをまことしうけむ。されば墓のしるしには、たゞ某姓名君墓表と題し、その夫婦合葬せるには、某姓名君暨配某氏墓表と刻みて、その賢さしからざることは、世人の知るにまかせたらむこそよかるべけれ。元の趙孟頫は、みづからその父母及び祖父母の墓誌をつくれる、僅にその生卒、爵里を敘せしのみにて、その行事に及ばず。見識頗る高しといふべし。墓碑も、異朝にては品秩の高下によりて大

小の掟あり。本朝には、むかしより定れる制度なし。されどおほやう、闊さ一尺、厚さその三分の二、高さは二尺五六寸より三尺までにて、跌は方二尺二三寸、厚さ七八寸なるべし。坐棺ならば、跌もてその棺の上をおほふやうにし、臥棺ならば、跌をその足の方に安んずべし。

## 影 像

體を藏むるものは墓なり、神を棲ましむるものは廟なり。その神を憑らしむるものは主なり。その容を留むるものは像なり。祖考の像を繪いていつきまつること、古禮になしといへども、今の世となりては、祭るに像を用ひざるもの少なし。これまた人情のやむことを得ざるに出づるものなり。たゞ宋の伊川、涑水、横渠、晦菴諸先生、古禮に見えざる所なりとて取らず、木主、魂帛をのみ用ひられき。竊にそのころを察するに、影像の設は、道釋二氏の専ら爲す所なれば、そに同じからざらむやうに、ことさらに情を矯めて取られざりしと覺ゆる也。ためにする所ありて情を矯むるは、その心狭く、二氏の爲すところなりとて、よきことまでを棄つるは、その心おほやけならず。況や圖形の設、その來ること久し。商王の傳説を厥の象に審

にせしめられたる、漢帝の功臣を麒麟閣に畫かしめ給へる、文翁が聖像を講堂に設けたる、經史に見ゆる所誣ふべからず。何ぞ二氏のみ像を設くることを爲さむ。されば影像の設は、もとより二氏の嫌にわたらず。たとひその嫌にわたるも、善きことをまねばぬことわりやはある。親のうせ給ひて再び見るべからざるは、子の心にはいかばかり悲しからまし。ざるを影像の設ありて、歳時の祭祀に一たびそを披けば、としつきの久しきを経ぬるも、儀容さながらこゝにいます。が如く、思慕のこゝろもこれによりて又ます。深かるべし。さらば影像ばかり追孝の助となるべきものは、あらし。心あらむ人は、廟墓神主と同じく、こゝろして設けたき祭の折、神主のうしろに掛くべし。

漢土の畫工は、多くは寫眞の法に拙し。おのれ三十年こなた、古今人の肖像を見る二十品に下らず。おほかた明清の善工に出づるもの也。しかるにその形神多くは缺けて、いける人の面貌に似ず。こゝに知りぬ。程子の、一髭髪あたらざれば、すなはち別人といはれし、あながち嚴しきに過ぎたるにはあらず。その寫す所多くその真に似ざるがためなることを、寫す所果してその人に似ることなくば、いかでか



その人として祭祀の誠をば盡すべきもとより木主を用ふるのまされるにはし  
かず。西洋の人の如きは、むかしより繪の事に巧にして、かつ理學器學に老いたり。  
その寫眞に用ふるの具、すでに闇室明室の兩器あり。その眞を寫さむとするもの  
は、必ずこの兩器に就いてうつすなり。故にその傳ふる處、骨格の起伏、皺紋の隱現、  
ことごとく用筆の間にあらはれて、その形神のいける人に遠からざる。迥に漢人  
の爲す所の上に出づ。近頃創製せる畱影鏡に至つては、人の一筆を煩さずして、寫  
りぬる影のまに、そのかた長くこゝに畱まることなれば、一髭一髪を残さず、  
その神氣を并せて生人と毫釐の異なる所なし。まことに天地造化のたくみを奪  
ふといひつべし。程馬諸公をして今の世に遭はしめば、なごかはこの眞影を取ら  
れざるべき。

## 象山先生詩鈔

門人北澤正誠の編するところ。原本上下二卷、明治十一年の出版にて詩の粹を抜きたるものなり。略ぼ年代によりて排列し、天保十年(玉池時代)より安政元年(木挽町時代)迄を上卷に收め、安政元年(聚遠樓時代)より元治元年(上洛時代)迄を下卷に收む。原稿は編者の需に應じ先生の友人大槻磐溪中村敬字二氏點評を加へたる際、其の意を以て文字を更めたるものあり。これ時として原作と字句の一致せざるものある所以なり。又ままた題下或は上欄の括弧内に詩作の年代を記入せるは、全集編纂の際補ひたるものなり。

象山先生詩鈔目次

象山先生詩鈔卷之上

東遊紀行……………九頁

讀洋書……………三

寶劍歌……………三

無題……………三

玉池寓居……………三

有一鳥下于南庭羽毛淺紫長喙而黃足其  
大如母鷄狀頗似鶉臆前有白圓點背上成  
波文予生北地目未見鷓鴣然按圖經考之  
恐是邪……………二四

古遺愛生以魯公爭坐帖為贈賦答……………二四

象山先生詩鈔卷之上目次

讀醫書……………二四

天城山……………二四

晚過函嶺望西北五峯時凍雨新晴濕雲歸

山色如墨染濃澹疊層神變萬狀駭心動目

得二絕句……………二五

蟠桃湍……………二五

巖管山……………二六

陶朱公……………二六

賴子成……………二六

癸卯首夏歸觀母親常山山寺兄見餽魚筍

喜而賦詩呈之聊申謝悃……………二六

答常山兄二首……………二七

無 題	一八	冬日宿上田客舍八木誠之加藤士成林大	二六
蓮詩隱括愛蓮說	一八	輝等諸子來會談論竟夕詩以紀事	二六
庚戌七月將之浦賀阻風於靈巖洲	一九	琴興十首	二六
初秋感懷	一九	擬 古	二七
雜感六首	一九	癸丑春三月偶感示礮學生	二八
西郊演礮而遇雨作	二〇	癸丑上巳會飲簡堂詩并引	二八
辛亥春三月二十二日將諸子演五十斤石	二〇	癸丑仲夏	二九
衝天砲於松代城西生萱村此邊村落皆杏	二〇	擬 古	二九
林往往有山桃開之開花爛漫彌望如紅雲	二〇	癸丑秋自貽	三〇
而放巨砲於其間真奇景也	二〇	再自貽	三〇
讀宋氏風論喜而作	二〇	送吉田義卿	三〇
諸葛武侯贊	二二	甲寅初春偶作	三〇
讀宋氏宇宙記十首	二二	戲隱括杜詩詠蒸氣船	三一
天姥山	二六	題蒲田茶鋪壁	三一

無 題	三三
次小林炳文畱別韻	三三
獄中寫懷	三三
君 恩	三三
敝笥五章	三四
泄泄八章	三四
礮 卦	三五
故 園	三六
秋 思	三六
秋 風	三七
點 虜	三七
漫 述	三七

象山先生詩鈔卷之下

甲寅九月得罪歸鄉書寓居之壁	三六
讀洋書二首	三六
題那波利翁像	三九
屏 居	四〇
往歲藤岡勉齋見惠盆蘭芳意已悴乃還其	四〇
根今年花復盛開勉齋令人昇來情意極渥	四〇
率然賦小詩爲謝	四〇
乙卯正月杜鵑發聲	四一
天保壬寅冬啓上書先公極陳防海利病謂	四一
一旦欲鑄備邊之礮數千門天下銅材有限	四一
不若聚寺院華鐘佛具以充其用蓋海寇內	四一
侵天下騷擾靈場寶地無獨得保全之理收	四一
是備急事理固宜此其一事也既而先公辭	四一
職言不復行嘉永甲寅啓得罪屏居於故里	四一

而虜勢益熾至於強假土地要開互市有志之士誰不痛憤忽拜去歲十二月二十三日詔書如蟄蟲之聽雷音喜不自禁又思先公之不可復見不覺感涕率然成詩二首……四

招望月白井二子高義園賞櫻以林下敷來全似雪分韻賦詩得下字……四

屏居二首……四

題自畫山水……四

予得罪閑居一二有志之士竊來學礮兵愛予者謂宜謝生徒因賦此以示……四

乙卯十月初二日夜江都地大動公侯第宅市廛民居傾覆過半霎時火發數所死者無算聞而悼之長歌當哭……四

又一首……四

暮春囑目……四

屏居三首……四

丙辰秋有人書問礮道時予猶禁錮因有此作……四

題聚遠樓……四

李廣……四

賈生……四

大瓢歌……四

河中島懷古四首……四

望遠鏡中望月歌和阮雲臺……四

霧淞二首……四

寄常山兄……四

題畫……四

謝澤生送櫻樹……四

題上書稿……五〇

夏日卽事……五〇

屏居二首……五一

同立田子存南樓觀月……五一

聞蕃使入都……五一

病中得江都信……五一

畫山水歌……五一

戊午春初密寄示諸友……五一

聚遠樓晚望有憶江都……五一

戊午春悒悒不樂強作此以排悶百年後當有知予心事者……五三

感懷……五三

寄梁川公圖……五四

無題三首……五五

題楠公像……五五

池無名畫卷……五六

己未新年……五六

屏居二首……五六

樓居……五七

題畫……五七

醉時歌……五七

觀雨……五八

觀大槻士廣畫山水戲題一詩……五八

偶成……五九

無題二首……五九

庚申新年……五九

屏居二首……五九

庚申春詠懷……六〇

思友辭	六〇	壬戌春	六五
聞白井子康浴沂之遊竊有此寄	六〇	恭聞所作櫻賦蒙天覽不勝榮幸慶喜之至	六五
窮巷	六一	爲五絕句	六六
庚申晚秋	六一	再賦長句	六六
古鑑斗引	六二	屏居二首	六六
庚申歲晚	六三	有感	六七
辛酉春書示諸友	六三	無題	六七
春日	六三	余以嘉永甲寅歲獲罪自江都歸松代伏蟄	六七
白櫻花歌	六四	九年以文久壬戌冬蒙宥今茲癸亥與老友	六七
屏居	六四	竹村春沙出遊得小詩數首	六七
題畫	六四	不干	六八
有嘆	六四	登金山	六八
送小林畏堂赴東府	六五	閑居二首	六八
讀洋書二首	六五	余以甲寅秋得嚴譴歸藩託琴於澁谷酒侯	六八

後九年蒙恩宥酒侯四詩代簡郵傳見還意	六九
甚殷卒爾攀和兩篇聊布謝悃	六九
閑居	六九
題伯顏像	七〇
馬上雜詩二首	七〇
偶成	七〇
甲子春初馬上所得	七〇
無題	七〇
三月奉命赴京師途中櫻花盛開	七一

象山先生詩鈔卷之上

門人 信濃 北澤正誠子進編

東遊紀行

磐翁曰子明終身之業  
既決於此行矣。  
以下不署名者盡係  
磐翁評。  
敬字曰起四句可爲吾  
人座右箴。  
有此女丈夫之言子明  
其不以大丈夫自期乎。  
送者百餘人何其多也  
亦足以卜子明平生友  
愛矣。

驥神馳千里。鶴念在九臬。人而無大志。豈不恥羽毛。奮發求至道。促裝興  
翱翔。辛苦期報國。自誓此心牢。子以丁酉秋乞遊學之暇。戊戌冬始得允。今  
茲己亥二月。征裝粗辦。乃以十二日啓行。阿  
孃雖有訓。臨別淚縱橫。晨昏闕定省。菽水衰養榮。雖然期非久。勉強須安  
情。都下卜新居。板輿我將迎。訓曰篤實志道。勤苦進德。雖在千里外。吾之慶猶  
極。養扶攜致。在吾膝下也。如其志行凡陋。與齊俗等夷。雖甘旨  
勞。吾不樂矣。駕言發山麓。送行滿路歧。欲答友誼厚。聊爲陳茲詩。行止雖  
殊道。使尼各有時。此別休惆悵。勵志共心期。故舊子弟百餘人。送予於西郊。禮意甚殷。文師結  
草菴。草菴古城曲。門種一株梅。窗移數竿竹。爲懷渴饑情。今夜此投宿。多  
謝故舊意。談笑屢更燭。文師字鳳山。別號竹菴。鼓琴善華音。隱於上田城南之  
常田村。予嘗學華音於師。最蒙愛遇。是夕投宿其廬。師

敬字曰轉接處每佳。

大喜。手供酒茶。晤譚歡洽。嗟哉我何人。一文興兩英。兩英遠候我。侵晨出春  
 應酬。綢繆不覺。夜漏既闌。城道左不相逢。憾然難為情。明朝應疾邀。與共話平生。  
 田醫官林大輝許。其友加藤子成。傳而讀之。有所奮發。與大輝益研究正學。是日聞  
 子前途。相將俟子於城北二里外。情誼亦至。而道路相左。竟不遭逢。聞之於文師之  
 言。慷慨。晨起。盥漱罷。忽聽登然響。倒屣迎相拜。執手慰怏怏。正學頹敗餘。  
 不堪。何幸得斯黨。自此有輔翼。不復怯魍魎。  
 多與余所見符。世道日衰竭。天理幾泯沒。人人迷徑蹊。動輒致顛蹶。君家  
 傳神方。收功非恍惚。願言為天下。一整萎蕪骨。  
 輝家世傳。整骨之術。昨夜宿依仁。今日遊松園。把酒話所見。符同欲忘言。  
 名譽振於遠近云。故舊夜來至。驚喜更斟罇。歡情未云畢。東窗上晨暎。  
 照人如濯。是夜八木山田二兄來會。有致知格物為飛魚躍之論。笑言達旦。臨去。用  
 壁間之韻賦一詩。畱別子成。詩云。立身豈被世風飄。行道不關人口喧。王霸事略通  
 宵話。義利公私盡日論。注想由來孔孟室。入頭只。主翁字垣甫。經業舊所欽。過  
 有程朱門。臨別慙慙但努力。愧將浮誕在文園。門得晤言。懽然愜素心。卻承次子託。悚惕政爾深。易教雖古道。末學柰不

任。垣甫子成。勵次之所生。嘗受學於林祭酒先生。蓋上人。不我棄。三日伴吾

騎吟詩信口和。行酒殫情醉。非公交友深。詎有情誼備。耿耿何時忘。清宵  
 勞夢寐。專精寺空山上人。為余舊詩友。是行送余至上田。逗畱三日。今朝又送別  
 思。去對芙蓉舊識顏。子和云。欲別躊躇立道間。暗愁。淺獄吐黃煙。宛似爇香鼎。  
 溟濛起雲雨。掩藹遮日景。開關幾千年。開斷無少頃。有本者如此。仰望知  
 所省。轎夢忽覺身已在。追分原地勢較高。無復長林連坡。而東。驅輿下碓冰。感  
 觸發吾志。沃野千里開。杳渺與天際。培塿不遮目。遊屬極清快。度量得似  
 此。豈難容羣類。十六日發。追分道。杳掛經輕井澤。登碓冰嶺。至絕頂。東北平野  
 云。高山大野。激發。開豁。翠煙蒼靄。浩渺無際。神情為之遐沖。恍然似有所覺。古人  
 志氣。信有以也哉。關外一矯看。靈山鬱嶙峋。仙聖時降集。宿昔所緬聞。丹  
 臺畱隱訣。紫府藏祕文。舉手謝世人。從此棲白雲。妙義山。一曰白雲山。距  
 偉拔。為關東奇觀。雜。辭。信。地。寒。忽。驚。梅。花。早。籬。落。風。薰。薰。林。梢。月。皓。皓。柰  
 書載。曾有仙人住。此。纔。辭。信。地。寒。忽。驚。梅。花。早。籬。落。風。薰。薰。林。梢。月。皓。皓。柰  
 何。羈。旅。生。吟。賞。易。草。草。欲。折。附。驛。使。佳。人。在。遠。道。自坂本至松井田。誰料

有此曠世之懷日本武尊獨垂愧於吾嬌夫之言乎。

古樂府餘韻又云以詩論之此首為壓卷。

出碓關。又宿斯驛。雪虛枕簷溜響。寒林風威冽。中夜屢驚夢。起坐空愁絕。迴想象山畔。雪竹幾竿折。是夜宿松井田。夜半雪大下。雨雪失春意。忽怯征衣單。景昏禽語苦。風卷樹聲寒。泥行幾里程。前路尚漫漫。板橋吟坐客。亦知行路難。十七日雪未晴。寒風殊勁。橋裏擁爐。不復窺窗外。入夜至深谷驛。雪歇天霽。月亦昇。得一小詩云。月出橋窗前。眠醒橋窗裏。橋窗似齋窗。但少梅影耳。修塘進小橋。自似遊覽客。左望筑波岑。右眺富士嶽。況又陽春候。紅綠轉繁錯。斯行若奉母。中心更幾樂。十八日。夙發深谷。過熊谷塘。日麗雪泮。風色可喜。亦其歡當如何哉。足忘疇昔之苦艱。因念使阿孃觀此富士筑波之景。此夕宿浦輪驛。芙蓉凌紫霄。嶄巖八萬丈。衆山伏其足。自然不爭長。中間日月旋。麓底風雷響。奇特已如此。孰不致欽仰。今日入江門。坐覺天宇寬。生徒已無恙。僮僕亦喜歡。忽憶簾幃情。又回轎中看。記行附置郵。聊以報平安。十九日。自浦輪過板橋。入江都。

讀洋書(弘化元年)

漢土與歐羅。於我俱殊域。皇國崇神教。取善自補翊。彼美固可參。其瑕何

敬字曰一篇七百六十言。敘景抒懷。曲曲入妙。頗似東坡。寄子由五百言詩。而襟抱之大。更過之。

當時吐此論。唯有子明與余耳。丈夫貴先見。今

日開明。尙有懷大惑者。可歎也。夫。敬字曰。畢竟大惑。今猶不醒也。浩歎。

須匿王道。無偏黨。平平歸有極。咄哉陋儒子。無乃懷大惑。

寶劍歌

大鹵精金棠溪工。化淬功成欲騰空。楚闕崇一固不啓。虎吼時起玉匣中。我友通士解緯象。獨知寶氣徹蒼穹。一朝得之持相示。使人忽然豁襟胸。星文霜華利吹毛。秋水寒凝碧芙蓉。神光照室夜不暗。百邪千妖遠絕蹤。我欲乞去口未言。精神先旺膽氣雄。吁爾平生片心能。贈我直跨東海斬毒龍。

無題(天保十二年)

澆風散古道。人情日譎詭。赫赫天日下。行立半狐鬼。割股廬墓側。未必是孝子。弊車駕羸馬。未必是廉士。所以阮步兵。白眼世人視。

玉池寓居

阿玉池頭避熱塵。略無寵辱到茲身。移花洗柳閑生計。待月迎風舊主人。

是蓋參玉池吟社詩。以其有星巖口氣也。

大孝之子。真廉之士。安在我將求之於無何有之鄉。

是子明本色。然非其至者。



披卷豈無千古友。傾尊自有四時春。世閒利勢何須問。這裏收權殊不貧。

有一鳥下于南庭。羽毛淺紫。長喙而黃足。其大如母鷄。狀頗似鶉。

臆前有白圓點。背上成波文。予生北地。目未見鷓鴣。然按圖經考

之。恐是邪。(天保十三年)

北人始見南禽貌。毛彩不羣。堪品評。背上浪紋雲錦麗。臆前圓點雪花明。  
汨羅廟畔曾開翅。孤竹祠邊定喚名。吾志久知行不得。不須苦作斷腸聲。

古遺愛生以魯公爭坐帖為贈賦答

最愛平原忠義餘。天真爛漫有誰如。野人久已厭拘束。不學嚴家餓隸書。

讀醫書

夙通脈理張橫渠。晚聚經方陸敬輿。我亦中年有所感。時披海外濟生書。

天城山

南、豆、饒、名、勝、最、稱、天、城、山。欲、至、無、羽、翮。引、領、空、朝、昏。此、日、定、何、日。獨、往、解。

襟煩塞。蘿踰。嶺。嶠。躡石度。潺湲。岡巒幾疊層。苔徑欲千盤。峭蒨絕人境。古  
木挂吟猿。豕頂一遊目。紫翠下周環。滄海渺無際。但見白雲屯。丹闕應非  
遠。金城欲及門。靈秀愜幽賞。遐想陋九寰。忽焉欲遁跡。無奈綱常存。搔首  
向前路。振袂下巖岈。

晚過函嶺望西北五峯時凍雨新晴濕雲歸山色如墨染濃澹疊  
層神變萬狀駭心動目得二絕句。(天保十三年)

五峯出沒晚雲閒。潑墨層層勢欲奔。若使虎兒逢此景。當年不必畫姚村。  
淋漓天地好粉本。大米小米學茲奇。妙境平生難數會。嶺頭停轡立多時。

蟠桃湍在松代北轄野山中。方言湍讀如泉。(嘉永元年)

幽溪十二曲。翠壁千尋餘。雲樹絡葛蔓。日影不窺隅。中有驚湍注。白龍爭  
奔趨。飛霧如襲人。草木皆濡濡。我來三伏時。暫與炎氛疎。清風吹鬚髮。爽  
氣滿襟裾。忽見長眉翁。雲端佇軒車。贈我以瑤草。授我以玉書。道緣已非

敬字曰神韻悠遠。

淺。豈爲名跡拘。高揖謝世人。自此遁塵區。

巖菅山 在吾松代治內。信中第一高山。

靈境違天尺。五更見燭龍。拂雲穿壁洞。捫葛度巖松。東海吞夷島。南天揖富峯。何時解塵絆。振策逐仙蹤。

陶朱公

鼓進平吳不逆天。功成身退五湖煙。中心未捨入閒事。也止陶山作富仙。

賴子成

昔日詞場張一軍。雄鷄恰是在雌羣。終生不識南豐面。高與小兒談古文。

癸卯首夏歸覲母親常山山寺兄見餽魚筍喜而賦詩呈之聊申謝

悃。

我久客江門。忽聆北闕疾。即日趣輕裝。兼道馳快駟。昏經碓冰巔。霧冥天若漆。曉過小諸驛。落月沈山靄。犯雨又衝風。不寒心惴慄。五百有餘里。跋

余嘗有一絕以類錄于此。破吳已雪會稽恥。安樂何堪烏喙長。肯使西施蒙不潔。五湖秋水洗殘粧。

未盡山陽不識南豐子。成之幸耳。敬字曰自占地步甚高。所以爲大家。

涉但三日。入門問安否。二豎已遯逸。驚喜拜座前。感泗潛垂膝。意定話平生。彼此各熾悉。母子盡懽娛。融融調寶瑟。懼堂常山別號孩童舊。情交殊稠密。欣我歸覲辰。母恙亦寧謐。玉盤餽鱗鮮。新筍斲露苗。烹飪供晚饌。異香盈陋室。姊甥時來臻。慶喜更洋溢。下筇復進杯。宴嬉何時畢。南山現歡容。蒼翠當戶出。林園帶喜色。花木蒸芬苾。母顏尤融怡。對之笑臍臍。人生得此樂。王公安足匹。

答常山兄二首 (天保七年)

落月隱庭樹。漏聲夜正央。交臂話古今。立論服堂堂。爲撥宣爐灰。手焚一瓣香。澆茗談轉濃。頻惜夜不長。功利黜霸略。學術稱帝王。欲速見小利。國脈多遂傷。可嘆用事者。此義昏茫茫。納約牖未闢。爲之迴中腸。微力諒有限。敢曰爲世倡。相期從此學。永挹聖賢芳。 遡游不可及。宛在水中央。之子天資美。才器稱廟堂。機變通武略。何惟文。

敬字曰先生不妄許可。人而獨於常山翁推。獎如此足見當時交契之深也。

墨香雄偉驚懦俗。鐵劍三尺長。心術歸正學。語言道先王。中心勞國事。且暮懷憂傷。知音又誰在。邦土徒茫茫。一詩忽贈我。披誦見肝腸。忠懇已如是。誰不從其倡。維持須努力。不朽貽其芳。

無題

真箇點也氣象。  
與李長吉同情異趣。

平生狂志愛曾點。世事何須說是非。草堤經雨青如織。墨水春風思詠歸。曉蹋月光來溼陀。炊煙漸颺水邊家。香風吹面馬蹄快。看盡春堤十里花。

蓮詩彙括愛蓮說

草木花甚蕃。噫予獨愛蓮。不染乎淤泥。淨植濯清漣。亭亭宜遠觀。何可褻玩焉。

庚戌七月將之浦賀。阻風於靈巖洲。時應下會禰先生招講新砲學。

成事有功世。羈役非所勞。諸子與我諧。追從意氣豪。暮夜命行裝。啓途情已迢。秋旻盪氛滓。粲然星斗高。如何風未便。卷帆送落潮。坐臥守孤樓。鬱

鬱竟永宵。譬之懷長策。無媒欲獻朝。延領望天際。浩歎首空搔。

初秋感懷 (嘉永三年七月)

人壽七八十。我已失半生。鬢邊雖未霜。漸覺減其莖。秋風不復夏。頽日難再昇。及時不騁志。形骸豈無傾。家聲久不振。名胄空伶仃。吾心固非石。念之深傷情。

雜感六首 余以庚戌冬十二月十八日發江都。二十三日還松代。中途得疾。至今不愈。病閒得詩數首。差後錄之。

海水環回祥氣浮。龍蟠虎踞帝王州。何時憎服西人志。貢獻象駝交馬牛。自非心服難防奸。英吉佛郎原傲頑。苦憶漢家王佐相。當年籌策盡征蠻。東邊拓地三千里。曾效荷蘭設學科。吾邦空說英雄跡。百歲無人似伯多。火輪截浪疾飛鷹。彼土近來多異能。此去浹旬到龍動。古人今起應疑冰。生來曾慕萬夫雄。慷慨時時氣吐虹。吾手非無一尺筆。柰何爲國答羌戎。聖賢有作順風氣。不敢後天存結繩。底事世閒村學究。東方日出尙燃燈。

今日距嘉永二十四年尙有日出燃燈者不齊村學究也爲之慨嘆。

敬字曰磐翁評先獲我心。

讀之亦稱快。敬字曰率直言之而卻琅琅可誦以其氣盛也。

西郊演礮而遇雨作

老樗壁山電光開。操演人士呼快哉。聲勢鬪天雲皆走。四山鳴動驟雨來。辛亥春三月二十二日。將諸子演五十斤石衝天砲於松代城西生萱村。此邊村落皆杏林。往往有山桃開之。開花爛漫。彌望如紅雲。而放巨砲於其間。真奇景也。

演大砲於杏花之下。事既奇詩又佳。可以補杏壇杏林杏花村等數典故。敬字曰絕句上乘。

讀宋氏風論喜而作

吾年十有五。讀易象山麓。玄夜玩辭象。或時至晨旭。冥會一何欣。理妙照心目。父老嗟其精。友朋稱其確。巖巖張夫子。爲學真卓犖。刻苦著正蒙。兩程互相助。顧彼巽風說。義類都未燭。如何在後賢。尊奉攀其躅。執異餘二紀。往來在心曲。一朝獲冥符。吾心頓慰沃。射者雖殊科。所尙在正鵠。誰謂萬里遠。神系固相屬。

張子曰。凡陰氣凝聚。陽在內者不得出。則奮擊而爲雷霆。陽在外者不得入。則周旋不舍而爲風。予謂陽卦主陽。陰卦主陰。易之通例也。坎之爲陷。陽陷於陰也。離之爲麗。陰麗於陽也。可以見矣。今張子說雷風皆以陽爲主。失義類也。而朱子以下。來談象者。多取之予所不解。

諸葛武侯贊

大賢秉大器。行藏存用舍。卓哉諸葛公。躬耕南陽下。一朝得其君。再吹劉家火。宏規本禮樂。細事暨流馬。逸躅邈難攀。飛聲塞區夏。千載拜遺像。欽挹我心寫。

讀宋氏宇宙記

余誦陶處士讀山海經詩。喜其冲澹深粹。迥然有自得之意。然亦憾其所云終宇宙者。止於山海經穆天子傳恍惚怪奇之說也。余嘗病

卷中合作韻脚皆妥當。妙不可言。

余嗜於洋學。恨不能闡其幽而探其蹟。

漢土諸賢談論物理。多出臆度。而其失流於虛誕。竊欲救此弊。以西  
洋實測之言久矣。偶得獨乙人宋墨爾氏所著宇宙記而讀之。天地  
之大。日月之明。暑寒晝夜之運。風雲露雷之變。禽蟲草木之微。無一  
不闡其幽而探其蹟。真可謂綜括宇宙終始古今者。余甚樂焉。乃以  
處士俯仰終宇宙。不樂復何如爲韻。作詩十首。若其思致拙劣命辭  
凡陋。固無足稽。然至其云云者。則竊以庶幾焉。第不識覽者以爲如  
何耳。

其一

宿好在詩易。推論析絲縷。勤苦過立年。物理竟莽鹵。遂取歐羅籙。闕漏聊  
自補。舊暗生新知。深艱披快覩。偶得宋氏書。徧攬造化府。悠悠宇宙閒。正  
爾盡仰俯。

其二

耀靈被光雲。黑子露其壤。魄淵不見水。環山寂游沆。由辣豎其軸。二紀日  
初上。太囂具氣海。朝朝有味爽。鎮輪載河嶽。歲道殊氛塊。辰鐮峻嶺竦。惑  
極雪野廣。星運證地動。彗蝕軌光往。數理推四三。乘星在指掌。發揮本實  
測。敷宣非誣罔。至哉星天學。咨嗟足欽仰。

其三

金屬飽衆酸。漾漾如醅醲。親力促降沈。大塊告成功。澄醕流就下。崧高現  
其峯。草木甫云暢。介鱗漸已充。乳育生高京。靈秀降其終。山谷有天秩。先  
後不可訐。貞石存殘形。通人識來蹤。

其四

伏燬發地底。奮震碎維柱。傾覆易高低。離合變區宇。巨浸自南翻。何山能  
支柱。駭浪注火坑。激噴作猛雨。傾瀉如飛泉。盪滌剝山土。停砂爲丘壠。填  
泥成園圃。今我步林巒。徘徊多所覩。依然山澤閒。終古存其武。

其五

雲漢開素練。函目辨斗宿。斗宿是煨炎。光明彌宇宙。各在天一方。中處不  
游走。塊曜旁旋繞。丸魄亦貳副。但爲相距迴。稠密如積冢。太虛真無涯。其  
際誰能究。

其六

疊疊重兩金。鹹滷濡其渴。倏忽生妙力。神氣坐泱鬱。抵觸盪人臂。烈炎鑠  
金鐵。眇器今如此。大塊豈其不。山陵積沙礪。石炭橫其跋。氣水相浸潤。神  
力亦激發。火山噴紫煙。溫泉流素沫。其變或爲震。原嶽時剖裂。觀物鞠源  
委。患害不難脫。泰西有剡子。爲我啓理窟。

其七

冰山凌空秀。嵯峨如刻削。紅碧映日開。奇光遠相射。凝野接凝海。彌望絕  
林薄。皜黃長不夜。線耀照邱壑。迢迢南州川。寶氣璨的礫。塵金隨清流。人

人可採獲。浮木生何許。迺在窮髮北。海客非資茲。何由得飪淪。逶迤望北  
光。其樞合慈極。指鍼疾感動。首尾或時易。積氣泛金鉛。坤仁全其廓。東水  
卻鑿齒。墨峽失其弱。墜果悟鬼帶。利燈明動則。奔星識太始。地雨辨隕石。  
得窮上下際。賴有畸人籍。恨不起陶令。周覽共此樂。

其八

湯海出泥山。何處見林菽。炭分迷海宇。黑煙但油油。日月黷不見。誰辨昏  
與晝。猛火起其閉。怪鬼時遊走。地成生毛髮。煤炭得所餽。氣氣漸開明。此  
景遂不復。

其九

衆石成水火。水火互相磨。磨盪千萬祀。或化泥與沙。我有照微鏡。精巧使  
人嗟。持此照石理。燦灼似春葩。燥濕異其觀。粒葉發人多。把石相山質。貧  
富誰敢詫。寶藏從擺闔。山靈如予何。

敬字曰讀來讀去只贊  
其妙而竟不能名其所  
以妙也。

其十

春陵說太極。五材誤其圖。婺源對屈問。暗中手相摹。西儒尙實測。早已破虛誣。茫茫覆載閒。萬理轉換乎。我亦同此地。何爲僻一隅。宜會東西言。以作一家書。學弊入骨髓。聞見養空疎。世閒少人傑。誰從余所如。

天姥山

在松代西三里。許俗稱姨捨山。

天姥山頭秋月明。天姥山下秋水清。夜深好執紫簫管。丹桂花陰學鳳聲。

冬日宿上田客舍。八木誠之。加藤士成。林大輝等諸子來會。談論竟

夕詩以紀事。

短晷縮西澗。解裝倚行軒。喜此舊遊地。良友倏來屯。命酌各論志。慷慨道所存。精窮改故步。頃年余知漢土之學有所未備。因欲會集東西之學。以成一家之言。俊策欣新觀。士成見示。近日所著。甚佳。微妙入天理。幽深造化源。吐吞達永夜。不覺清曉寒。

琴興十首 余嘗著

石牀安綠綺。微暗未成聲。且聽流泉響。微吟待月明。  
膝上调清徵。目送山鳥飛。枯桐有餘韻。鳥影竟依稀。  
孤琴清夜月。聲合溪流響。絕調無人知。琅然祇自賞。  
山水失知音。千歲無消息。不遇鍾子期。茲情竟誰識。  
遇此新過雨。青林生暮涼。清英未及濕。音調故輕揚。  
古洞愛幽深。彈琴伴孤鶴。巖花日夕飜。不是從風落。  
雲散松崖碧。月升微亦輝。爲招嵇叔夜。千載尙來歸。  
谷風吹夕嵐。峯頂月來早。朱絃煩手登。白石倚僮掃。  
空齋夜寂寥。雨雪盈窗牖。燈下弄琴心。天涯懷尙友。  
巖上掃青苔。春醪獨自酌。一醉歌南風。琴頭松子落。

擬古 (弘化四年)

有魚在北溟。長大絕其夷。首尾各萬里。世人何得知。煦成天下雨。怒作天

十首深奧精微非固陋如余者所能窺故不敢句亦不能句也敬字曰謙如此所以爲

敬字曰妙在字句外。

敬字曰無乃夫子自道歟。

下遣掀翻揚波浪。列宿爲蔽虧。身大海猶淺。時時見其鱗。長鯨數有限。難以飽吾飢。託生未得所。何許是天池。

癸丑春三月偶感示礮學生

未見礮臺環海潯。南風四月甚關心。但教廟略無遺算。應有蕃船報好音。士庶何爲忘德澤。江山亦自惡妖祲。武昌本是咽喉地。可使犬羊窺領襟。

癸丑上巳會飲簡堂詩并引

王右軍上巳爲蘭亭之會。在晉永和九年癸丑。今歲亦遇癸丑。是日之集。豈非勝事。因憶永和八年殷浩北伐無功。再舉屯泗口。右軍移書諫之曰。區區江左。天下寒心。固已久矣。處內外之任者。未有深謀遠慮。天下將有土崩之勢。任其事者。豈得辭四海之責哉。又與會稽王昱牋曰。不度德量力。不弊不已。此封內所以痛心歎悼者也。願先爲不可勝之基。須根立勢舉。謀之未晚。浩不能從。遂有九年秋七月之敗。頃歲洋夷

余有此和韻曰生在神州東海何俗吏報平無使仁人逢賞晉米利不使開海境英機黎門

披猖。衆願大邦形跡既露。而不可勝之基。尙有未立者。俯仰之際。不能無感慨。因詩中及之。

良辰修故事。禊飲會詞林。乃誦蘭亭敘。深欽賢者心。去年爭北伐。今日在山陰。勝集雖可娛。回思感慨深。鯨鯢久奔盪。長策乏知音。興懷欲嗟悼。情況何古今。

癸丑仲夏

火輪橫恣轉江流。非是君臣惕日秋。忠義要張神國武。功名欲伐虜人謀。東圻起堵曾陳策。南島賒船盡有猷。兵事未聞巧之久。何人速解燕眉憂。

擬古

駕余將遠征。戒心命從者。遠征知何方。夷久慢我。將馳騁大塊。流憩米歐野。瀛海多鯨鯢。風浪常翻簸。願一成吾志。歎無木與火。忠義已許國。何嘗失慵惰。

敬字曰右軍識見超卓所謂不度德量力不弊不已者豈獨爲一時一世言哉浩歎

嘗游浦賀觀此詩揭在楣也蓋彼理始入我之敬字曰胸中久已蓄此志不必待送吉田義卿詩而發于詩也



癸丑秋自貽

白石清泉入夢頻。情懷久負故山春。才疎無補當今事。不若歸田終此身。君恩洪大難爲量。特命催吾向故鄉。逃將世上風波險。管領山中日月長。

再自貽

虛名早已誤侯公。猿約鶴盟還作空。行止非人天意在。肯將利害撓胸中。

送吉田義卿九月十日

之子有靈骨。久厭斃羣。振衣萬里道。心事未語人。雖則未語人。忖度或有因。送行出郭門。孤鶴橫秋旻。環海何茫茫。五洲自成鄰。周流究形勢。一見超百聞。智者貴投機。歸來須及辰。不立非常功。身後誰能賓。

甲寅初春偶作

點虜今應離故國。江門亦已度春風。設施未見回天力。物望誰當命世雄。疇昔戲譚憑呆堞。方今急務在元戎。昔者諸葛武侯。謂連弩爲元戎。今予則以礮爲元戎。微臣別有

敬字曰此失意時作然不作悲憤語知其爲有道者之言也。

是其取禍處俛仰今昔不堪慨嘆。此詩亦有靈骨宜被俗眼白也。

敬字曰愚則欲換賓字作仲字。

伐謀策。安得風船下聖東。

臘尾狂雷已可恟。春頭恆燠又愁儂。誰言人事罔應感。洪範曰。豫。恆燠若。不信天

心有曲從。許國非才難得志。憂時無補欲歸農。春來未有慰懷處。忼慨悲

歌獨撫胸。

幾載鯨鯢橫海天。中州豫備尙依然。孰知兵制隨時變。但說軍裝映日鮮。

運礮未應須我馬。守城卻或要渠船。當今更有無窮事。志士何時高枕眠。

戲槩括杜詩詠蒸氣船

蕩蕩萬斛船。影若搖白虹。起檣不椎牛。職由集衆功。無待風動天。隨意大水中。

題蒲田茶鋪壁

八隻軍船來聖東。江都官吏太倥傯。梅花不識人閒事。依舊清芬啖海風。

無題

敬字曰意象悠遠。

句如爲汽船設者何等奇構。

(嘉永六年二月作)敬字曰憂國心深許國志大洵可敬也勿笑其迂。

敬字曰西洋器藝之精實與道相為表裏以道藝分貼東西恐未確安得起於九原而質之。

七道都城似散碁。控援未足待戎夷。遠謀今日廟堂上。莫悔慢藏招盜兒。

東洋道德西洋藝。匡廓相依完圈模。大地周圍一萬里。還須缺得半隅無。

甲寅三月炳文論國事獲罪歸長岡。

久知天道易推移。家國興衰將問誰。伯紀遠謀人所惜。椒山抗疏世徒悲。一方卻敵未知計。四顧稱雄何有期。不揆又遭今日別。傷心萬事付新詞。

獄中寫懷 以下係獄中作

敬字曰當日連在地牢久後出牢言曰吾氣塞六合不覺地牢之隘塞先生不覺地牢之隘塞謀存國之至計浩氣所發詩句響亮。

久憂邊事歎天遠。忽墜此中悲海深。欲為皇朝存至計。敢因吾利勞知音。鷄鳴不已晦冥夜。鶴韻應通蒼鬱陰。寄語吾門同志士。莫將榮辱負初心。不思城下作盟恥。卻見忠貞抱忌疑。伯眖議疆長崎澳。聖東假地下田湄。異時輕敵已非策。今日伐謀知是誰。幽憤滿曾無所泄。獄中瀝血寫此詩。

君恩

君恩如天地。國恩如江海。外患今非一。奮身思有濟。勉勵十餘年。何問明。

君恩一首忠義節烈字字自肺腑中流出者可

與文文山正氣歌並傳矣如彼皇國正義歌張耳太過未免摸擬之痕

與晦在卑欲為池。在高欲為壘。奈何肉食人。頽然若傀儡。苟安愒歲月。般樂敖且怠。當初恃不來。不知恃有待。復不伐其謀。率然為所詒。假地缺金甌。屈膝甘無禮。反卻知彼計。束縛直自累。咨余何為者。致忠忽遭逮。幽囚在狂獄。甘心待其罪。松柏有本性。歲寒節不改。忠義許君國。百折何曾悔。用閒在得人。全勝在知彼。是非不可磨。公論期千載。

做筍五章 有箋

做筍在海。魚則唯唯。狄人戲謔。笑言有啞。

比也。筍以竹為器。以取魚者也。唯唯出入不制也。啞笑貌。筍當在河。而今在海。況其做壞者。安得能取魚哉。宜乎其魚之唯唯然而出入無忌。憚也。以比禦侮失策。而致狄人之陵蔑也。

曾欲御冬。亟歸旨蓄。莫顧我勞。反比予于毒。比也。御當歸貽旨美蓄聚也。曾蓄聚美菜。以為餽貽不一再者。蓋欲使

以禦冬月之空乏也。以比安不忘危。治不忘亂。方泰寧之時。而深思遠慮。以數數然及邊防戎備之事也。

其霽其霽。瞢瞢有霾。永言念國。不瑕有害。

比也。其者冀其將然之辭。陰而風曰瞢。雨土曰霾。瑕何也。冀其開霽。而卒不開霽。且陰陰冷風。雨土蒙霧。以比衰替之世。欲有奮發改革。而狃習因循。流弊愈深。近患又生也。

幽室陰陰。不日不月。言思君子。如饑如渴。

嗟爾君子。靡知臧否。懷私之故。有似充耳。

竝賦也。靡不也。充耳塞耳也。謂耳聾之人。

泄泄八章

我艦未牢。我壁未轟。將者泄泄。蠻方孔棘。

艦之未牢。猶可治之。壁之未轟。猶可爲之。將者泄泄。云如之何。

積薪如陵。火發于下。載笑載言。晏然以處。

匪風飄揚。匪瀾澎湃。念彼神京。寤歎有愾。

憂思如燬。其誰知之。悲憤如噎。其誰思之。

人不我諒。請勿復敢思。人不我信。請勿復敢悲。

雖欲無思。與君爲體。雖欲無悲。與國爲系。

夏夜之短。耿耿如年。標擗不寐。泣涕漣漣。

礲卦

予嘗演礲卦。礲卦卽睽卦也。爾來竊省予所遭遇。無一非睽者。亦甚奇矣。圖事揆策。而莫用其謀。睽也。竭忠盡力。而反招罪戾。睽也。言辭確寔。而不免疑猜。睽也。貲財橫散。而家道困迫。睽也。雖然物窮則變。變則通。居以正道。固無終睽之理。且天地睽而其事同也。男女睽而其志通也。萬物睽而其事類也。處睽之世。合睽之用。亦

礲卦雖小册子在子明  
著述中兼大奇書自  
非深理此書余嘗代  
安能得此林氏  
子明請開梓恨  
不許至今爲恨

在自強之耳。

少小窮易理。中年研礮火。融會著礮卦。推演訓蒙者。礮卦本是睽。乖戾諧情寡。爾來我所爲。拂亂躓而跛。憂國竭忠精。反自求飛禍。一與卦象應。或天其誠我。志因勞苦堅。行以勇決果。前修皆如茲。猛省砭頑惰。

敬字曰平生得力在此。

故園

拘繫十旬心不平。秋風忽動故園情。牆陰但見狐鳥影。樞隙空望日月明。繞屋林泉何改色。傍門松菊不忘榮。水清石秀曾遊地。野鶴溪猿有舊盟。

秋思

幽室日如年。迴風揚塵埃。時節值秋晏。愁來不可排。名都何鬱鬱。飛閣臨通街。日夕絃歌起。音響隨風來。曲調苦且怨。沈吟激餘哀。理曲知爲誰。無迺蕩子妻。身貞反見棄。歡愛何時諧。盛年不再至。華容日益衰。意合忘情異。感同難自持。掩耳請勿聽。重聽不勝悲。

秋風

秋風淅淅霜眇眇。木葉辭條蘭蕙槁。日景不至廣室冥。虛樞危檐飛塵杳。潛無鱗兮舉無翰。兀兀中處將安還。

點虜

點虜先聲已得志。旌帆來去更縱橫。久歎天下無豪傑。誰道胸中有甲兵。終古禁人偵彼實。連年任敵探吾情。謀猷顛倒今如此。不識何時見掃平。

今日掃平終古不可見。嗚呼天道是耶非耶。

漫述

雨風月如晦。頑犬吠成羣。是亦尋常事。利害何足云。謗者任汝謗。嗤者任汝嗤。天公本知我。不覓他人知。

象山先生詩鈔卷之下

門人 信濃 北澤正誠子進編

甲寅九月得罪歸鄉書寓居之壁

疇昔住江都。得譴旋故宅。故宅久已非。僑寓真琴籍。庭陰悲風起。林景漸將夕。昭昭秋天遠。皓皓微月白。鯨鯢闕神州。東西來相迫。智者一何乏。因循情未索。伊余懷忠憤。計謀好久積。一跌若有誤。真是不可易。壯節失其時。終身在山澤。或乘彼風雲。功名照竹冊。君子何必同。趣捨動異蹟。通塞原在天。懷抱詎所惜。前途未可知。此中養遠翮。

敬字曰讀來不覺觸動當日吾輩情緒。

敬字曰志氣遠大一跌豈其沮乎。

從來發迹胚胎于此。

讀洋書二首 (安政六年)

風露已凄其。荒庭落葉積。哀鴻響遠空。寒蟀鳴高壁。我弟在都門。爲市新洋籍。窮格多精詣。珍愛超珪璧。心爲曠澹悅。理將沈潛釋。日日貪新觀。徂

譴居中得縱讀異書是象山不幸中之幸又云余生洋學之家不能讀洋書有愧象山多矣。

景豈足惜。

秋雨變林光。衰草徧池塘。風物日蕭條。時景似可傷。譴居同巖隱。無客關門牆。恬靜久成性。玄默趣偏長。幽窗繙異書。欲將身世忘。卻恐狂馳子。終歲徒倉皇。

敬字曰枕藉洋書如先生者在今日卻難得也。

題那波利翁像

何國何代無英雄。平生欽慕波利翁。邇來杜門讀遺傳。忽忽不知年歲窮。撫劍仰天空慨憤。世人那得察吾衷。如今邊警日復月。戰船來去海西東。外蕃學藝老且巧。我獨遊戲等孩童。守株未知師他長。矮舟誰能操元戎。嗟君原是一書生。苦學遂能長明聰。一朝照破當時弊。革弊除害民情從。旌旗所向如靡草。威信普加歐羅中。元主西征不足道。豐公北伐何得同。人生得意多失意。大雪翻手朔北風。帝王事業雖未終。收爲我將應有庸。世人心竅小於豆。齷齪寧知英雄胸。自奮能成遠大計。自屈難樹廓清功。

皇朝之併吞五大洲其在魯西亞之前乎抑其乎余茫乎不能決也。

安得起君九原下。同謀戮力駢奸兇。終卷五洲歸皇朝。皇朝永爲五洲宗。

屏居

襟懷可想是象山本領。  
端居無事轉無窮。日攤異書觀會通。宇宙之間歸掌上。不知身在小樓中。  
謝絕塵緣久掩關。飽知人世不如閑。日高睡覺未思起。靜聽幽禽語樹閒。  
門徑蕭條楓葉老。黃花無恙傍松閑。昔日陶令今我是。花前酌酒對南山。  
索居秋氣到。晚景起暮鴉。坐惜孤餅罄。更悲雙鬢華。屈原吟澤畔。賈傅謫  
長沙。千古不平事。醉中獨慨嗟。  
造化錫清閑。幽居尤可愛。不須拒絕嚴。自遠俗子輩。南樓放月入。好風亦  
自在。獨酌發微醺。身世覺殊快。

敬字曰氣象自高詩句  
超凡。

往歲藤岡勉齋。見惠盆蘭。芳意已悴。乃還其根。今年花復盛開。勉

齋令人舁來。情意極渥。率然賦小詩爲謝。

有情有韻此是子明本  
色。

晨露滿秋空。林閒生些涼。蘭兮尋舊盟。忽然至中堂。相顧如含笑。馥馥吐

幽香。三載不我遺。此情一何長。

乙卯正月杜鵑發聲

滿腹慷慨借杜鵑發之  
天津覆轍其可不思哉。

谷口黃鸝未放聲。春城早已子規鳴。人閒萬事無無兆。不是堯夫也。惻情

天保壬寅冬。啓上書先公。極陳防海利病。謂一旦欲鑄備邊之礮  
數千門。天下銅材有限。不若聚寺院華鐘佛具。以充其用。蓋海寇  
內侵。天下騷擾。靈場寶地。無獨得保全之理。收是備急。事理固宜。  
此其一事也。既而先公辭職。言不復行。嘉永甲寅啓得罪屏居於  
故里。而虜勢益熾。至於強假土地。要開互市。有志之士。誰不痛憤。  
忽拜去歲十二月二十三日詔書。如蟄蟲之聽雷音。喜不自禁。又  
思先公之不可復見。不覺感涕。率然成詩二首。

一跌歸休深鎖門。不那憂國寸心存。但欣天詔在今日。有契當年狂妄言。  
朝家預備未嚴森。孤憤空嗟歲月侵。若使先公久其位。不須今日勞宸襟。

敬字曰嘗聞之象山先  
生故開老眞田公夙盡  
心防海演習大小火技  
先生詔書實淵源於公  
拜此詔書烏得不愴然  
懷公而感涕耶。

招望月白井二子高義園賞櫻。以林下敷來全似雪分韻賦詩得下字。

敬字曰偶然興至之言。瀟洒有致。

日日醉春風。廣庭櫻花下。不因罪譴餘。豈得任敖惰。折簡招所私。興懷何瀟洒。對花當盡歡。酒至莫辭舉。春花與人生。偕非永好者。

屏居二首

敬字曰先生有省譽錄。省身字又見于詩。可見平生用力心上。此是有大本領處。

慮國久拮据。省身卻疎頑。今得負罪蟄。豈與世事關。幽獨守孤棲。且欣思念閑。優游理書帙。更及遠西言。汎覽足珍異。心目有真歡。不要學肥遯。拂袖向空山。

子明嘗錄此詩見寄今尚藏之。但文字有小異。同豈後來所改歟。

幽棲似僧居。遠與塵氛絕。景物本蕭條。況逢高秋節。細泉帶雨響。寒華得露發。庭林無人窺。山禽或一越。憑欄招遠風。鉤簾翫素月。几閣貯異書。靜就明窗閱。此事真可欣。足以忘簪笏。富貴如浮雲。聖言非空伐。

題自畫山水

敬字曰何其綽綽然有餘裕也。

罪譴亦渥恩。世事忽已違。起臥一室空。疎放得自怡。委懷親文墨。早晏他無思。偶然及此戲。雲山見幽姿。方將消永晝。何曾學畫師。遣興亦一適。休論妍與媸。

愛者恐姑息之仁。

予得罪閑居。一二有志之士竊來學。礮兵愛予者謂宜謝生徒。因賦此以示。

真是儒者之言。

學本期報國。教亦在拯世。雖潛守窮居。世難情所繫。志士以學來。豈忍挫其銳。啓發隨根器。操演忘氣懈。禍患有定命。塞寶非所濟。斯理少知者。仰

是豈細人之所知也。

欽西山蔡

乙卯十月初二日夜。江都地大動。公侯第宅市廛民居。傾覆過半。霎時火發數所。死者無算。聞而悼之。長歌當哭。

康回憑怒摧鼇脚。混沌欲起張其背。山海震盪暨大都。天地有聲飛霹靂。百萬人家如轉機。顛覆傾塌等電擊。豪華樂土成蠶叢。傑閣崇樓變瓦礫。

須臾擺出千埋火。黑風捲煙騰碧落。紫微黷黷星無光。但見一道河漢赤。  
 萬家頃刻揚劫灰。可憐人身非鐵石。武夫勇虎竟難免。況乃美人容止綽。  
 居民倉皇失東西。號哭奔走如驚雀。出壓不死死猛火。南陌東阡骨狼藉。  
 吾聞人天無相遠。合應之理不可卻。天垂災祥豈徒然。經傳所存太鑿鑿。  
 當今大政無紕繆。不知此畜何由作。問之蒼天天不應。低頭悶悶心則惡。  
 文武名士多都城。都城何辜遭斯虐。所識存亡果何如。得信無因空戚戚。

又一首

君不見塞上老人善道術。喪之不戚得不珍。倚伏從來天所作。去矣弔賀  
 莫復陳。去年忠策成泥羹。逮錄無援籲蒼旻。拘繫半歲獄未決。都城人士  
 憐此身。一朝放還臥故山。身雖小屈意頗伸。古松深竹美風月。相伴雙鶴  
 情尤親。圖書萬卷白日暮。淺酌微吟櫻花春。溪山雨後足雲煙。聚遠樓中  
 望不貧。樓中月色秋殊佳。黃菊丹楓隔世塵。晴窗日暖宜曝背。康濟真與

細繆可想。  
 敬字曰有氣魄有力量  
 非尋常嘲笑風月者所  
 夢見。

不自憐而憐人真情諸  
 如。

太古鄰。今年十月江門災。此身卻憐都城人。

暮春矚目 辰

櫻花三月滿。皇州曉起倚樓凝。遠眸欲撫獨絃歌。一曲白雲散漫四山頭。

屏居三首

敬字曰家居風景宛然  
 在目。

在世苟有酒。何復問其他。酣中存真樂。數酌不厭多。近日貧如洗。無錢送  
 酒家。靦然對虛甕。瓶乎柰汝何。

別墅孤城外。矮樓深樹中。幽蘭抽秋蕤。雜華披晚風。小人志屢達。君子命  
 固窮。窮達兩不問。雅尚託枯桐。

未及龐公隱。寓居近市塵。羣塵起風外。愁思落吟邊。感鳥擇喬木。羨魚潛  
 深淵。世閒少于頓。安得買山錢。

丙辰秋有人書問礮道時予猶禁錮因有此作

三歲屏居在古城。江山千里又秋聲。光陰虛擲真容惜。事勢推移竊爲驚。



一得會期裨國是。片能元愧占時名。同人未諒平生志。遠託書音問礮兵。

題聚遠樓

樓在城南。望月大夫別業也。余得罪歸鄉。乃僑居之。

學竇諳世艱。百憂心如擣欲罷。終不能計畫。碎肝腦。一朝觸時網。放還貧亦好。僑居占勝園。園名高義。內有十二勝。不受世間擾。樓高山色明。樹密月華宵。樓聚遠。西臨小巷。東北樹竹扶疎。絕無城市之氣。四山屏列。遠邇掩映。凭欄瞻眺。嵐光襲人。雖足跡不出門。宛如身在山林。綠沼觀游魚。花林聽啼鳥。歲月如擲梭。時景變遷早。江山秋氣入。栖止人將老。用舍不干我。行藏各有道。祇應親麴蘖。陶然散懷抱。

李廣

七十餘戰功亦多。漢家底事極煩苛。將軍一死不足惜。縱收單于可柰何。

賈生

經世天才不待論。文章餘事亦雄渾。明時無柰灌馮毀。空託湘流弔屈原。

大瓢歌

有人贈大瓢。可容六七斗。長句為報。

宛然柴桑餘韻。此是象山本色。

時遇漢文空有榮才高。不用奈斯生長沙未到。賦先就造託湘流弔屈原。暗合亦奇。

豪放不羈足以籠絡一世。快甚快甚。

誰樹魏王種。灌溉專畝壟。西成告功形亦奇。巨腹恢恢脩頸聳。山翁得之愛其天。盛以鵝黃真座閒。大盈如冲用不窮。宏量無時不恬然。五石未及惠施瓠。風流卻笑蒙叟樽。一夫駕之浮江湖。何若十人醉花前。信山泉香酒亦冽。林下市頭多醉仙。只願座上客常滿。此內春酒永如泉。

河中島懷古四首

分兵謀已泄。亦不發探騎。卒然失爪牙。無柰兒郎易。違衆納仇女。用茲終得君。箕陣報平昔。今日只荒墳。敵情得於人。明鑿託炊煙。不進擊半渡。至今惜武仙。於菟知詳證。甲兵殲河側。秋霧懷當日。徘徊情未極。

望遠鏡中望月歌和阮雲臺

天體翕力自成圓。空中躍水。點點皆圓。地上散汞亦然。是其翕力所自。神氣驅之。相轉旋。輕者拱重本。常理何疑。日月繞日。天之質。重于地。二十五萬五千倍。其體大于地。一百三十

是詩蓋自宋墨爾氏得來者。豈阮元輩所夢觀哉。

萬倍。月之質。輕于地七十分之一。其體小。于地五十分之一。今取繩一條。以其兩端連大小石。拋之於空。則大石在中旋轉。小石循而繞之。由是觀之。月之本輪。以地為心。地及諸曜之本輪。漢人古來不識。月。只道月中有仙闕。釋氏謾說。閻浮樹。月中何得寫外物。阮子所論亦妄耳。暗者非山明。非水。月中無滴水。何況煜煜者。蓋山巔耳。初伏燬為虐。金石爛。但有灰燼。表達裏。明暗異光。非由他月時望之。尤著矣。海涸河竭。知幾日。縱有生物。安得食。月中無水。故亡論人類。耳。雖草木蟲豸。不復生焉。月在造物已無用。惟須為吾添秋色。海客譚天。非鑿空。推算兼資。窺遠筒。環山高低。可指數。山閒時見火光紅。泰西疇人。月輪懸天。雖似小。應隕滄海。成巨島。劫數未盡。三萬年。後死猶看。看夜月皎。兀累堆云。月輪當二萬五千年。若三萬年新荷蘭土。或恐是地。月維星隸。曜靈。我是主星。彼附星。有人在彼。望我地。不怪也。成巨月形。但訝素影一處見。終古不動釘玉片。從月裏望地。地懸一處而不動。中央望之。我在頂。如其四邊。則對面。婆娑旋轉。五大洲。惟恨洋中難認舟。疾風雖快不可御。地月相距。以獨乙里法度之。五萬一千八百三十二里。風之疾者。一秒時間。可行一百尺。若得御此疾風。須一百三十六日。而到月界。

敬字曰結不盡力輕妙之極。

霄顛無力駕氣球。離地三里。大氣已至薄。故氣球之昇。何人得飛入月中。夜夜飽看十倍秋。凡物有徑。有圍。有面。有體。光出于面。當紀面積。雲臺多加。明月三倍于月徑。亦大略耳。如語其實。則月徑獨乙里法。四百六十六里。地徑一千七百一十八里。故地輪之積。大于月輪一十六倍。而不足矣。今言十倍。亦舉其大數也。

凡事物之理。人未必識。而見有說其所以然者。亦率視為固然。而不復疑。如是則無益於學。故使學者先拂于心。而後渙然以冰釋。始為有益矣。遠西窮理家。往往為如兀累堆之言。蓋欲學者有以思。而自悟於其理也。是亦不可不知。

霧淞二首 寒夜地氣如霧。凝於木上。齊人謂之霧淞。見曾子固詩註。

昨夜月寒光似霧。曉來樹上凝成花。園林初日微風動。飄滿南家又北家。霧淞片片帶朝曦。觸竹琰瑤到地遲。清絕風光不相遠。白櫻三月落花時。

寄常山兄 巳丁

獨坐倚小樓。四面盡花木。惠風花閒來。窗櫺皆奇馥。蝶影時上下。禽聲亦

敬字曰宛然陶詩。

可與南豐詩並傳矣。敬字曰詩亦清絕。

斷續春酒滿在尊。卻傷時景淑。非招同臭友。何以慰心曲。

題畫

大家無所不有敬服敬

城中沾醉眼。生花吟步蹣跚。帽子斜。山雨初晴。溪路滑。石橋殘。日未歸家。

謝澤生送櫻樹

閑居拋世事。理園散懷抱。佳人遺珍艷。賞愛過鴻寶。置錫顧泉石。徘徊費心巧。培植終得所。似非人為造。悅玩忘名跡。繚繞無昏曉。芳心與吾宜。將迎殊窈窕。所贈已瓊瑤。友意何以報。孤詠寫真情。聊茲寄永好。

題上書稿

敬字曰一片至誠可對神明

憂國憂時不恤身。狂言信受上官嗔。他年夷吏討遺策。日本未無知計人。

夏日即事

形容妙余亦嘗學洋砲者讀之不堪追懷。結得悠然。有無限感慨。敬字曰中有無。忽感。勿認做雲雷詩。忽憶。但看上下喚應語。意在。隱躍間妙甚。

聞。聞。鞫。雲。雷。忽。憶。演。礮。時。飛。電。目。睛。奪。騰。煙。日。色。迷。蒲。萄。蹴。海。波。石。榼。擘。洲。觜。時。英。在。下。風。執。業。相。陪。隨。今。日。小。樓。上。但。看。飛。雲。追。

屏居二首

偶然睽物累。薄言罷驅馳。歲月隨流水。鬢毛將化絲。文章竟無用。藝事亦何為。欲賣書與劍。就僻結茅茨。

唯有江湖志。宦情久已休。寵榮同潦沫。富貴等雲浮。時序漸催老。山川又著秋。決然振衣袂。何處是滄洲。

同立田子存南樓觀月

敬字曰音調自高妙在筆墨之外。

南樓接高人。暮色忽蒼然。靈飈掃陰晴。素月已高懸。遠嶂含微靄。長林泛薄煙。隔簾弄月光。銀條垂欄前。時景幸如此。吟矚須少延。非與君對榻。佳期將空還。

簾細葭所爲。隔此觀月。月光反射。宛如銀條垂地。是夜余與客始見之。東坡玉塔臥微瀾。千古奇語。遇其境者。知其形容之妙。不識他日遇此境者。亦有賞音於余銀條否。

敬字曰曩時幽憤與今日異今日幽憤亦獨存于識者。

聞蕃使入都丁巳九月  
忽傳蕃使入都城。幽憤無那雙淚生。長策蒿萊久埋沒。異言朝市尚縱橫。小童十歲統戎教。新學三年操海兵。虎狼野心非一日。將迎慎莫示吾情。

病中得江都信丁巳八月

幾年禁錮鬢如絲。病臥傷心非為私。對敵得情須實索。成功出衆在先知。如何每事失機會。不及制權收便宜。愚者亦曾存一得。當將忠悃寄阿誰。先知未用取人計。先知者不可取於鬼神。不可象於事。不可驗於度。必取於人。知敵之情者也。虜使話言何得詳。勢力敵均盟可保。聲威偏重和難常。當年宋國從邦彥。今日朝廷憶李綱。非有蒼天蚤悔禍。爭由婉畫靖跳梁。

畫山水歌丁巳八月

門局深鎖如囹圄。一幅江山來何處。狂呼促童掛東廡。對之飄然欲沖舉。羣山岷岵紫翠重。樓居往往蔭長松。江流秀色可攬結。逕路屈曲足遊蹤。

敬字曰偶然題山水亦道及時事先生之所以為先生在此。

鄙夫平生好籌海。謀忠承譴未須悔。時勢推移不可回。隱憂百端無由解。畫中老人野鶴姿。莫是仙侶相追隨。我亦願作畫中客。漠然永與世相遺。

戊午春初密寄示諸友

負譴久杜門。雅非為守素。坐臥愧素餐。聊自勵志趣。且畫注洪範。竊擬萬言疏。近所著有洪範今解。專以託諷時事。獨夜繙軍書。坐使青燈曙。夷患將以膚。國步須深慮。諸友公爪牙。何視儔衆庶。壯圖非一旦。不貽在所預。協志期報國。不逮相偕助。執業如良驥。奮發思軒翥。勿復忤日月。優游鈍騁步。

聚遠樓晚望有憶江都

樓頭東望暮雲重。憶得江都春意濃。玉水晴波分市井。金城佳氣接芙蓉。滿朝文武美冠帶。列國公侯嚴服從。聞說亞人頻跋扈。誰能大義折其鋒。

戊午春悒悒不樂。強作此以排悶。百年後當有知予心事者。

山靜雲常深。地靈寺更淨。春流帶煙碧。密樹含嵐暝。花外入雲塔。林間汲

忠憤之氣溢於紙表不貽在茲其貽亦在茲。

谷徑。身世兩俱忘。長此散情性。

感懷

是蓋杜雲仙代彼理來時之作。

東府懋文治。懷柔渥恩施。虜使覩其陰。游說轉橫恣。恐嚇假暗威。溫言雜嘲戲。詞理太矛盾。釁隙不自闕。冠帶皆仁者。輕信無他意。將許其所請。永貽民國累。修繕雖已晚。今日猶可暨。焉得智辨士。正辭挫邪志。便裝躉船煤。徑指聖東地。虜庭論曲直。誓誓明大義。伐謀揉禍患。權略庶可試。帝闈遠似天。此衷何緣致。

寄梁川公圖

戊午二月慨時事迫切破禁有此寄。

敬字曰心事如青天白日千歲之下人得而見之。  
愚忠見機晚。逮繫煩理官。寬典免斧鑕。舊閭得放還。五歲守斗室。伏蟄屏娛歡。有酒不敢飲。有琴不敢彈。山河又改歲。草樹漸滋蕃。幽居節物遲。春華未回暄。妖氛日以暗。殆將半乾坤。逼此隱憂辰。賴承同志援。遂構出位思。復發踰分言。感激甘罪譴。切欲通天闈。我本一丈夫。豈忘喪其元。聖明

苟有裨。九死非所難。

無題三首

海外得吾師。國中足財資。只道舶不給。那知城全非。往事誰能諫。良謀貴投機。惟願中天日。大明照九圻。已逼安危際。誰能培國脈。和親計非失。屢怯機屢錯。固國自有道。馭戎自有略。折衝存其人。豈在祿與爵。永晝無所事。散步愛園林。新篁傳玉色。淺瀨帶琴音。功名不及立。經晝無補今。壯心未全灰。時學梁父吟。

題楠公像

楠公本帝賚。何必說傳說。眇軀唱大義。皇運開日月。惜無高宗賢。歲早未醫渴。和羹失鹽梅。舟楫亦摧裂。雖知大事去。所許終不折。臨死畱其子。遺戒衛帝闕。三朝扞蛇豕。正統繫一髮。終始為朝家。濺盡闔門血。生為萬夫

傑作無毫髮遺恨是楠公小傳矣。

敬字曰古今題公像者多矣此詩為壓卷。

雄死爲千古烈。至今金剛山。行人仰嵒嶮。

池無名畫卷 (萬延元年)

山容蜿蜒谷盤紆。雲水飛動目欲瞿。巖古松秀不知歲。樓臺縹緲開靈區。  
 憶昔倦遊歸信中。中路回頭望雲衢。雲橫煙度山聯綿。飯顆大門勢奔趨。  
 春晚將雨天氣暖。疊層紫翠易模糊。乍從雲際認峯巒。飄忽出有復入無。  
 有無變幻不可究。恍若海上隔霞望蓬壺。今披此圖酷相似。心匠能與造物俱。  
 此老天機不易到。信知名士無虛譽。當年若使髯蘇見此卷。未必獨題王郎煙江疊嶂圖。

寫真山水形畫山水益見池無名之妙。

不必使髯蘇見此詩便是坡仙口吻矣。

敬字曰池大雅畫得先生題詩可稱雙絕。

己未新年

雪雷尼巖嶺。春到海津城。畫船卜吉夢。短管學鶯聲。屠蘇朝共醉。鼓笛夜同鳴。寧識五畿外。海隅觸駭鯨。

屏居二首

邱園久不除。有如古樵路。幽花鎮餘春。深樹早成暮。智巧固不足。退省齊老圃。雖非潘安仁。欲作閑居賦。

敬字曰道學者之言。

人厭幽居陋。吾愛閑中味。客稀犬鎮眠。林靜鳥常至。新詩陶性靈。晚酌養和氣。世理自有限。過足非所貴。

樓居

樓居避卑喧。邈然脫世裝。對山愛晨旭。看雲屬殘陽。微雨從風過。櫻葉送古香。歡焉命小酌。舉杯酒亦芳。我有東西書。堆積滿篋牀。歐羅窮實際。赤縣美文章。隨意時抽讀。汎覽殊未忙。惟此未忙際。深味竟難忘。

敬字曰愚亦有東西書堆積滿架而奔走風塵不能抽讀汎覽何日得似先生樓居之興乎。

題畫

山雲簇簇水潺潺。溪樹秋深紅欲然。獨往拾芝人未返。夕陽已在石橋邊。

金元人佳境真是題畫詩。

醉時歌

人欲加害己有取。少少害患心太苦。吾無有取橫羅冤。竄謫刀鋸衷亦安。

敬字曰杜陵醉時歌不免貧富比較把杯自遣。

之意此卻胸裡容乾坤  
杯中吞江海氣象大是  
不侔。

陽明山人明快士。瘴毒魍魎一齊看。曾作書報毛憲副。言辭侃侃不可干。  
屏居二月梅初發。對花斟酒興不竭。醉把玉文讀一過。白日曠曠天地闊。

觀雨

雷雨動西山。亂雲趁風翻。閑坐望天澤。須臾滿郊園。始微如浥塵。漸進似  
傾盆。白煙翳林薄。密霧迷山根。空濛竟無際。忽驚眼界寬。涼氣集葛帔。灑  
然解襟煩。憶在江門日。海樓坐黃昏。

觀大槻士廣畫山水戲題一詩

讀至此詩殆不堪今昔  
之感。

幽寂溪邊亭。蒼翠亭側樹。雨歇瀑初明。壁寒雲猶附。弄水塵累遠。聽禽清  
景暮。誰意都城人。解此林壑趣。

余罪大責輕。念咎之餘。又復何言。然其爲況也如此。視之於士廣。雖能  
解林壑之趣。而占居城市。未免奔走乎紅塵青瑩之中。孰輸孰贏。世當  
有辨之者。

偶成

坡公翻案螿龍蓋夫子  
自道也。

造化推移春復秋。此心常與古人遊。前身應是華陽老。萬卷詩書不下樓。  
殷殷闔闔在遠空。密雲不雨日沈紅。雷公有意蘇天下。只向山中起螿龍。

無題二首 (文久中の作)

敬字曰借問權謀雜何  
如信義隆十字當路者  
宜書諸紳萬國交際之  
法之要旨此二句盡之  
矣。

神州皇極崇。民德古今同。借問權謀雜。何如信義隆。深修辭命待。莫恤梯  
航通。切願明王道。遠傳蕩蕩風。

度德未量力。大勳何所成。同謀及卜筮。夫履戒堅貞。請用名言正。莫令變  
亂生。不過汎收長。俾物乃兵經。

庚申新年 正月十二日幕府  
使節始航米利堅。

二首蓋反言以寄感慨  
耳。敬字曰閑卻者豈獨船  
乎哉不堪慨歎。

四海無波久太平。遠蕃土物賀新正。後人應紀今時盛。漢武周宣未足名。  
講武修文世有賢。王猷無外見今年。洋帆能載使人去。閑卻前頭日本船。

屏居二首 (無事樂清虛は安政五年作)

無事樂清虛。陋居亦不惡。藥酒四五盞。異書二三策。窗隙香煙流。座間松  
露滴。終日對翠屏。不羨巖棲客。  
藏晦應吾道。放散即天意。須飲一壺酒。以盡千日醉。長卷古人文。大筆快  
意字。有時成獨笑。澹然忘世事。

庚申春詠懷

自從駭鯨觸海涯。天下騷然思驅馳。我亦慷慨忘寢食。一時忠孝合清規。  
國恩未報虛得罪。斂翮故林棲一枝。六年辜負江都春。風景如今知何其。  
吾齡今歲甫五十。天命尙苦未及知。擬稱虞夏商周典。且拯戰國七雄危。  
大邦民物自庶富。前聖謀謨無偏私。幾時長策得施行。首出雄視臨四夷。  
思友辭友謂小林畏堂也。畏堂浴田中溫泉。健羨之餘寄志。  
水淺淺而微波。樹蒼蒼以始綠。思童冠之詠歸。獨悵然而遐矚。

聞白井子康浴沂之遊竊有此寄

敬字曰神韻悠遠。

三村神仙窟。靈液處處瀉。三村。佐野。轄野。田中皆有溫泉。淳瀦輒成泓。盥濯蠲百痾。佳人  
思風詠。良辰領休暇。擁懷空悵然。不得方遊駕。  
江城已夏色。山郭猶春衣。聞君浴沂興。健羨神空馳。若破岩菅雲。岩菅。信東接上野。爲我少遲遲。致問山中客。玉芝長幾枝。子往年以公事入轄野深山。拾  
佐野名勝境。積翠環清流。五峯羅雲際。戶隱飯繩。明顯氣與神。謀往日愛其地。有意營菟裘。子遊佐野而樂溪山之勝。既而得民棄地。乃欲實一矮樓名  
逼遂廢。然其風聲水韻未。以煙嵐勝處。時時遊往。以爲風月主人。及稍鳩工。適爲事所嘗一日不往。來于懷也。今我樊籠鳥。因君見夢遊。

窮巷

敬字曰似老杜。

窮巷守吾靜。小園思澹然。晚風穿竹細。晨露上荷圓。鯨鱈橫舟路。煙塵暗  
日邊。老夫衰無力。何以正坤乾。

庚申晚秋

年歲恩恩徂不返。又看秋景屬蕭散。帝闈已遠侯門深。服藥閑眠任老懶。



古鏹斗引

我。生。今。世。有。古。癖。愛。好。古。玩。忘。饑。劬。惟。憾。力。微。獲。不。易。每。遭。奇。珍。輒。嗟。吁。  
 歲。在。庚。申。月。之。涂。有。貨。鏹。斗。到。吾。廬。體。質。渾。厚。神。睨。睨。總。帶。雲。雷。相。縈。紆。  
 土。華。黯。沁。古。色。深。未。詳。世。代。迷。規。模。三。足。有。枋。流。在。右。此。制。瑰。奇。書。傳。無。  
 鄭。氏。絕。學。注。周。官。鬱。人。裸。事。彝。舟。儲。鏹。中。煮。鬱。百。廿。貫。停。諸。祭。前。供。時。需。  
 或。云。鏹。斗。盛。羹。滂。古。人。行。食。常。相。須。今。考。二。說。無。甚。遠。此。器。制。作。其。庶。乎。  
 漢。軍。刁。斗。亦。曰。鏹。晝。炊。飯。食。夜。擊。途。是。則。名。同。而。實。異。徐。戴。一。之。無。乃。誣。  
 流。俗。但。識。世。所。用。睥。睨。古。器。嗤。其。迂。此。器。買。低。久。不。售。我。聞。之。直。典。衣。沽。  
 赤。縣。神。州。數。喪。亂。所。在。人。肉。如。爛。魚。寶。鼎。玉。彝。捐。道。路。不。異。折。戟。委。沙。塗。  
 此。鏹。流。落。在。何。歲。渡。海。何。處。免。碎。剝。轉。傳。不。知。替。幾。主。此。日。此。時。始。遇。予。  
 一。朝。相。得。喜。不。禁。真。之。几。案。比。璠。璣。高。齋。淪。茗。坐。清。晝。獨。覺。古。光。照。眉。鬚。

庚申歲晚

生今世有古癖余亦同  
 情抑余所藏如漢武三  
 神鏡光明皇后真蹟天  
 平百萬塔及龜井六郎  
 起象山於九原共評之

敬字曰此古鏹斗余嘗  
 一極觀驚以爲奇珍此  
 詩極力撰寫咏歌歎慨  
 七古之能事畢矣

不知銑術不通夷情所  
 以有此嘆。

辛酉春書示諸友

孤忠不報承嚴譴歸臥家山已七年。世事渾如北流水。朝昏流下不曾旋。  
 邊海荐開港。中原未改途。兵謀渾忽略。賢路轉崎嶇。深念國財乏。更憂城  
 勢孤。外蕃情不測。何得近天都。

春日 (安政五年)

二日三日香若煙樓前花木紅映天。同棲雙鶴善行酒不用佳人舞繡筵。

白櫻花歌 (文久三年春)

春風幾日競繁華。繞屋白櫻尤堪誇。誰將三越千堆雪。翦作吾家滿眼花。  
 主人盡日看不足。移席把酒待嫦娥。座中終乏豪翰客。亦能引杯自爲歌。  
 一朝海天風氣惡。海面黯慘卷白波。蛟鼉出沒神龍怒。盪激聲勢及山阿。  
 曲突徙薪屢盡言。舍而不錄自古多。平生雖亦不我臧。同仇何敢忘修戈。  
 櫻花無情似有情。向我慘慘如含嗟。時危未知稅駕處。今我不飲柰花何。

雙鶴字屢見子明鍾情  
 可想。敬字曰詩亦清亮如聞  
 鶴唳。

屏居

狂迂不欲受人憐。擬託滄州送暮年。懶習本從文賦逸。余多不置。詩文稿。浮生何  
索姓名傳。花前得伴朝開酒。竹裏無人夜撫絃。世念消磨今已久。只愁未  
辨買山錢。

題畫 (文久三年夏盤谷の畫に題す)

清樾垂蔭幽澗激。流懷彼呦鹿。邀此良儔。溪雲靄靄松風颼。山中無暑。  
盛夏如秋。有琴橫牀。有酒盈卣。一觴一詠。其他奚求。

有歎

不可諫者昨日之事。害已成。不可測者今日之勢。心更驚。陸有豺狼。水有  
鱷。檣槍熒惑。照天赤。陵犯成風。多驕恣。天下名言。倒且錯。肉食失計。但竊  
位。藿食寧不腦塗地。大厦將傾。非所支。明者祇應尙其志。我既不能學。伍  
子胥。抉眼懸城門。又不欲從。藤房卿髡髮。改作陶朱。藤房卿髡髮改作陶朱。公泛湖。引支那典。故皆支那人。合引和漢。未免失體。若自以爲是。則余所不能知。

肥遯高隱。世上榮枯盛衰。永不聞。

送小林畏堂赴東府

山城雖有雨。秋熱殊未平。在家猶煩鬱。況子東都行。此行豈得辭。藩邸少  
經生。祇恨官依舊。又愁囊不盈。所願戒詭遇。範我振清聲。古人難晚節。送  
君一片情。

僕負罪屏居。禁絕外交。荒廢筆研。非由老兄告別。豈敢作詩。此詩只可  
令酒侯一閱。慎勿視餘人也。

讀洋書二首

五洲彼是有吾師。擇善從之何復疑。偏見未除窮措大。自求其穴比螻蟻。  
鉤深須是工夫實。務博莫如懷抱虛。宋代若能通海舶。張朱不棄遠西書。

壬戌春

不須門外去看花。日日樓頭醉絳霞。應與蝶蜂緣不淺。春光深處是吾家。

敬字曰流麗可誦。不耳而當。時抱此識。見前。誰知其陰有功于今日。

恭聞所作櫻賦蒙天覽不勝榮幸慶喜之至爲五絕句

居然山澤一腐儒。廢錮九年形迹孤。多謝三春白櫻樹。微言因汝達天都。  
一篇賦就入天墀。想見君王帶笑披。曾用顏家田舍樣。禿毫縱意寫纖詞。  
細賦櫻花日易消。多年蟄屈太無聊。天顏應笑非壯士。篆刻蟲學六朝。  
櫻花頌上紫雲霄。榮幸何人能得超。皇國他年有蕭統。選中亦自不寒寥。  
親舊相傳亦喜欣。前來向我慇懃云。陪臣詞筆膺天覽。昌俊後塵今有君。

敬字曰匹夫著作蒙天  
覽者前有佐川田國歌  
後有先生此賦三百年  
開唯二人可謂無上之  
榮

自嘲自慰妙。

再賦長句

相如絕藝莫能追。希逸惠連庶可爲。嘗學六朝作櫻賦。孰知託興在湘纍。  
湘纍當年頌橘樹。自喻志節不容移。文章爛煥類有道。紛緼修姱足可師。  
我致忠悃遇嚴譴。幽囚廢錮九年茲。憂憤空效長沙哭。感觸終懷郢路悲。  
我賦一旦生翼飛。微志因之辱天知。絕似櫻花在窮谷。天光漏處照春熙。

屏居二首

幾年掩重門。蹉跎守側陋。松柏日成趣。蘭菊亦挺秀。不友古人心。終與誰  
同臭。賴有滿架書。披閱永昏晝。  
閑居白日悠。周覽足圖籍。況茲長夏時。薰風吹幽籟。獨坐興方澹。默玩理  
弗隔。陶然酌一杯。更應山景夕。

有感

慨然發憤冒艱險。擬爲皇州紓大患。豈料數奇不酬志。九年寂莫臥家山。

無題

仙駕久不至。白日出復沈。百年能何幾。雙鬢二毛侵。感時發咨嗟。詠言撫  
孤琴。清音和天籟。遺響滿空林。纏牽非可慕。人生貴快心。劉伶甘麴蘖。向  
秀探道深。顯達又何爲。吾志在雲岑。

余以嘉永甲寅歲獲罪。自江都歸松代。伏蟄九年。以文久壬戌冬  
蒙宥。今茲癸亥。與老友竹村春沙出遊。得小詩數首。

敬字曰一氣呵成絕不  
費力是爲真詩。

家山又復伴春沙。鞍上看春日欲斜。記起墨堤殘月曙。雙雙竝馬入櫻花。  
老夫漫學少年場。鞭袖偏能惹興長。駿馬還須行慢慢。路傍花木正飛香。  
整整斜斜皆有態。寒林忽變萬花叢。煙消巧吐山前雪。日出未隨溪上風。

不干

不干譽命不避毀。窮達兩忘唯得已。布衣業辱天子知。何論羣蟲在禪裏。  
玉壺美酒琥珀光。傾之意氣更蹶張。儘從委棄填溝壑。高歌直欲排天閭。

登金山

金山在松代城北。山麓大鉢寺。潘祖大銘公嘗營菟裘處。

北郊試遊步。道傍正新樹。陂陀繞寒潭。攀陟循樵路。奇石蹲狡狴。怪松欲  
軒翥。路盡望川原。萬景在指顧。云是太公時。憩歇結舍處。懷古欽英風。徘徊不能去。

閑居二首

吾家老柳樹。亭亭車蓋如。不問出宰相。只欣宜隱居。青眼向日開。絲髮受

風梳。尤愛盛夏夕。翠映讀殘書。

庭樹帶涼飈。虛窗深且閑。故人在天涯。異書惜獨看。萬化呈其竅。六合掛  
睫端。欲沈無影響。援翰寄所歎。

余以甲寅秋得嚴譴歸藩。託琴於澁谷酒侯。後九年蒙恩宥。酒侯

四詩代簡。郵傳見還。意甚殷。卒爾攀和兩篇。聊布謝悃。

託庇九年。情有餘。愛藏保護。一同余。還來絃軫皆無恙。更喜瓊瑤轉粲如。  
與琴相別九霜經。不揆今秋逢有情。轉軫掃徽頻上膝。琅琅可愛舊時聲。

閑居

不知時事擾。唯愛吾廬幽。況此新秋夕。河漢澄欲流。林靜涼侵席。夜深月  
近樓。晚飲酒未醒。高吟獨自酬。

疎雨散幽居。庭陰坐爽颯。方沼生圓文。靜林見動葉。車馬無還往。柴門晝  
空闔。方耽冲澹趣。豈許塵慮雜。

敬字曰方。圓靜動用得妙。

善斷善謀子明即其人  
也惜限命於奇禍不能  
卒其雄略可勝慨嘆哉。

亦可以見文武之才矣。  
敬字曰先生騎馬狀態  
紙上躍躍乎用。

題伯顏像

癸亥秋應召赴京師  
忽忙中觀此圖輒題

善斷善謀無失計。萬千將士仰如神。即今天下遭多難。苦憶當年雄略人。

馬上雜詩二首

終日馳驅城北原。秋風嫋嫋吹垂鞭。外觀應有畫圖趣。駐馬夕陽黃葉村。  
騰騰快馬洋裝輕。信馬離城不計程。背日林閒革轡軟。逐風堤上鐵蹄鳴。

偶成

閑中今古感興衰。能變危機誰所期。十載閉門讀書味。世閒唯有夜燈知。

甲子春初馬上所得

(閑來の詩は癸亥春の作)

閑來跨馬出看花。遲日猶嫌晷易過。不是廬陵歐太守。果然鞍上得詩多。  
只愛驪駒白玉珂。自揜人棄暇常多。朝朝日上揮鞭出。城市塵埃柰我何。

無題

身是華陽陶。通明日日樓上聽松聲。夢中常有遊仙興。鸞背吹笙向玉京。

敬字曰取其襟懷。  
屏居情況可想可憐。

敬字曰是集以赴東都  
詩為始以赴京師詩為  
終人生出處自有照應  
而詩亦從之似非偶然  
者。何子明不能遂此志  
丘子明不能遂此志更  
慨歎二句寫盡岐嶽路。

三月奉命赴京師途中櫻花盛開

此行好時節。似踐觀花約。晴馬既可人。雨轎亦不惡。不探沿道勝。素志竟  
難酬。何日了公幹。歸路耽壑丘。已無棧道險。誰謂岐岨難。馬背吟眸遠。轎  
窗靠睡安。一川束萬水。孤道繞千巒。林壑多奇勝。只恨日易殘。

# 詩

# 稿

詩鈔に漏れたる詩を、本會にて蒐輯したるものなり。同題の詩にて字句の異りたるものは、其の一方を小字にて旁記し覽者の取捨に任せたり。尤も其の句の成れる時の前後の判明せるものは、前のものを捨てて載せず、單に後年のものを取りたり。

象山先生詩稿目次

○を以て題に代へたるものは其の詩の首句  
數字を括弧内に示して區別あらしめたり。

甲午元旦讀易謾言因一齋先生韻增以二

頁

采芝歌并引

頁

題山水圖

頁

白井子康見寄庭榭所生黃蘗食之有仙

味率易賦詩聊表謝憶

頁

賀墨坂大夫丸山君六十三初度

頁

別高田仁兄

頁

○(江廣夜色靜)

頁

書狂雲集答山寺懼堂

頁

丁巳歲暮

頁

○(風光雜畫)

頁

馬上雜興

頁

專精上人見示梅花詩二十首併近作十首

頁

丙申初夏竹庵師許始見林君大輝大輝延  
余致其堂誼如舊知及夜八木上野高瀨絲  
我諸君相尋而來其樂不可言乃賦詩記事

頁

贊文晁富士畫

頁

○(龜叟嗜茶)

頁

杏野村溫泉謝佛巖禪師見惠蕎麥

頁

擬古

頁

花發多風雨

頁

哭林大輝

頁

且惠一絕輒不自揣題評以遠又次韻見寄  
之什以爲酬……………三〇

○(堂堂豪傑士)……………三〇

亡友今井子冽病閒嘗手寫陶淵明集至初  
卷功成之時謂予曰頃來疾重而懶于揮毫

請吾子全之未幾而沒今因前約謄寫補之

乃得全本追思往事真如一夢感懷之餘涕

淚滿襟慨然賦一絕錄卷末云……………三〇

拜子冽墓……………三二

○(晚景蒼然)……………三二

○(靈溪斂夕嵐)……………三二

琴興……………三二

蓮詩二首蓮括愛與柏屋藤助……………三三

擬古……………三三

○(踏險從來)……………三三

謝藤岡勉齋送盆蘭……………三三

雜感……………三三

詠柳眼……………三四

蘭……………三四

無題……………三四

自畫山水贊……………三四

中秋更級觀月明朝歸途逢雨二首……………三四

逸題……………三五

天保十二年六月十三日大朝以吾公補政

今夏久不雨民以爲憂是日適大雨農商歡

呼似亦有不偶然者喜而成詩……………三五

屏居……………三五

釋氏……………三五

郊行……………三六

○(頭上山洩雲)……………三六

富士山……………三七

文政己丑夏五月二十日與宮下氏同遊石

川山以采石花往復詩有四首……………三七

○(趙高靈呂秦)……………三七

訪鳳山帥途中……………三六

馬上雜興……………三六

雜感……………三六

偶成……………三六

題梅畫……………三六

次韻山寺君述懷之作以送其祇役于江都

三首……………三六

七月既望同山寺常山寺內松濤二兄恩田

君東園觀月次常山兄韻其一……………三九

其二……………三九

送世子傳不息山寺君……………三九

屏居……………三九

閑居雜詠……………三九

馬上雜興……………三九

雜感……………三九

屏居……………三九

放歌行……………三九

○(山麓幽清)……………三九

○(身作男兒)……………三九

題畫山水……………三九

春水滿四澤……………三九

夏雲多奇峯……………三九



秋月揚明暉……………三  
 冬嶺秀孤松……………三  
 ○(青衣紺鞵)……………三  
 題自畫……………三  
 東山觀桃花次宮下兄韻……………三  
 ○(陋巷寒溪側)……………三  
 天保癸卯夏日錄供君毅仁兄祭正……………三  
 移 梅……………三  
 卜居五吟……………三  
 屏 居……………三  
 沛 雨……………三  
 賀大川大人之八十八……………三  
 ○(千枝萬朵)……………三  
 屏 居……………三

路傍花木正飛香……………四  
 屏 居……………四  
 賦得松閒明月……………四  
 戊申新年作……………四  
 幽 居……………四  
 屏 居……………四  
 失 題……………四  
 題 畫……………四  
 逢春沙話舊……………四  
 馬上雜興……………四  
 題山水畫……………四  
 石坂真龍宅宴……………四  
 ○(四月清明)……………四  
 題 畫……………四

○(物去無追著)

讀洋書……………元  
 踐約棲鸞堂看花此日有雨……………元  
 ○(雨祠祠畔)……………元  
 閒 居……………元  
 題 畫……………元  
 梅……………元  
 次春沙兄寄題之韻……………元  
 馬上雜興……………元  
 白馬歌……………元  
 ○(曉風吹曲沼)……………元  
 挽金子生……………元  
 示諸生……………元  
 寒 夜……………元

夏日偶成

屏 居……………元  
 雷別靜山龍田君……………元  
 ○(見月眞言)……………元  
 石龜歌奉賀赤澤先生八十之誕辰……………元  
 ○(楓葉秋高)……………元  
 ○(禪林終日)……………元  
 夾竹桃……………元  
 富 嶽……………元  
 般若寺逢長崎僧末山……………元  
 再訪末山用元韻二首……………元  
 讀宋氏宇宙記……………元  
 冬日馬上雜興二首……………元  
 ○(君家舊餅)……………元

文 菅相公……………五

武 楠公……………五

○(雨後春園)……………五

偶 成……………五

戊 申試筆……………五

竹 夫 人……………五

夏 日 山 居……………五

○(膽形瓶子)……………五

贈 平 野 生……………五

曉 發……………五

○(簾幕春暄)……………五

○(幽沈世味遠)……………五

讀 洋 書……………五

題 山 水 圖……………五

○(蟲歌山畔)……………五

偶 成……………五

癸亥春日與友人出遊小憩中途旗亭……………五

經 確 冰 嶺……………五

梅……………五

蘭……………五

菊……………五

○(移席久危坐)……………五

無 題……………五

偃 松 歌……………五

讀 管 子……………五

屏 居……………五

冬 日 喜 江 都 酒 至……………五

馬 上 雜 興……………五

讀 禪 書……………五

無 題……………五

屏 居……………五

夾 竹 桃……………五

謝 立 田 靜 山 見 贈 水 葵……………五

閑 居……………五

感 懷……………五

○(危言苟見納)……………五

○(幽人無所爭)……………五

淫 雨……………五

○(人馬皆肥)……………五

雪……………五

壬子歲旦……………五

奉 弔 桐 山 老 先 生 失 令 孫……………五

○(莎草塞門徑)……………五

有人惠竹筍燒食甚美率然賦答……………五

和杏村見示之作……………五

○(花木弄晴)……………五

○(誰將巧妙筆)……………五

題 畫……………五

屏 居……………五

禪 福 寺 觀 牡 丹……………五

無 題……………五

賞 菊……………五

松……………五

屏 居……………五

墨 堤……………五

題 畫……………五

偶 作……………六

謝人送雪葦……………六

次小林生東台之韻……………六

○(幾年不掃)……………六

塵 尾……………六

古 墨……………六

雜 感……………六

閑 居……………六

秋 夜……………六

○(積雪覆煙)……………六

寒 梅……………六

與同志讀五經……………六

觀 楓……………六

霧 淞……………六

偶 感……………六

偶 感……………六

手刻壽山石印文曰碧棲得一詩……………六

○(蝟蟻躍盆水)……………六

○(一奮鷗鷺翼)……………六

○(萬里江山)……………六

○(人生累狹見)……………六

○(一春未快)……………六

○(斷道生涯)……………六

○(此地何知)……………六

老 僕……………六

竹庵竹……………六

題 畫……………六

謝梁公圖先生見贈巨卮……………六

秋夜會龍田元伯宅席上得魚韻……………六

席上探寒韻賦得秋晚高樓……………六

探蒸韻賦得觀楓……………六

○(小閣臨清流)……………六

題畫山水……………六

○(雨灑江聲)……………六

偶 成……………六

雜 詩……………六

怪松歌……………六

馬上雜興……………六

讀宋氏宇宙記……………六

哭友人……………六

讀 易……………六

無 題……………六

蓮……………六

富 嶽……………六

雁來紅……………六

謝岩下某借茶具……………六

夜 飲……………六

春日喜望月白井二子至……………六

馬上雜興……………六

謝龍田靜山見惠梅花……………六

讀 書……………六

栽蕉竹三首……………六

○(怪石何巖巖)……………六

五柳精舍書懷……………六

畫 竹……………六

阿柯亭賞櫻……………六

絳英齋席上贈林大輝	七
無題	七
叢菜	七
春日謝某人餽酒饌	七
不二岳	七
古詩	七
謝子康惠水仙	七
哭山崎童子	七
有感	七
謝小宮山某惠江都新蔬五種	七
送小林畏堂遊別所溫泉	七
雜詩	七
題畫	七
秋夜	七
有人舉長國覺巖獨體贊曰吉祥復吉祥安樂壽無量明月與清風夜夜訪健康予甚不以爲是乃援筆隸括如左	七
和竹村杏村見寄之作	七
苦竹	七
題石叟藏石	七
苦寒	七
念佛僧	七
梅	七
謝望月君見惠竹筍	七
越後有大島村在信川之西繞村六七里皆桃花林每春花時彌望如晨霞余久聞其勝未能遊往常以爲憾癸亥秋從市川壽獲張嵐溪所圖此卷更增神飛得二詩	七

逸題	七
屏居	七
○(廟算誰能)	七
偶成	七
諸葛武侯	七
日蓮僧	七
東筑水	七
謝真樂道者送雪菌	七
應節堂觀樂舞	七
馬上雜興	七
凡馬之步狹不及廣然本邦馭馬舊法從其稟質而閑習之不改步之廣狹漢韓亦然近日泰西有一法能令馬步狹者廣其法深沼田畝騎而涉之反復數十回余試之極有效	七

驗其始試戲賦小詩	八〇
恭奉壽老君侯臺下五十初度應教	八〇
賀大谷津君七十之壽辰	八〇
題白鼠畫	八〇
菊	八〇
同龍田高山諸君靜修齋論周易	八一
望不崩隄追慕先考	八一
○(江城五月)	八一
題畫	八二
客中感秋五首	八二
新年作	八三
○(朱樞天仙)	八三
○(論無緣自誣)	八四
九日聞桐山先生有登高之遊追之不及	八四

○(朝來微雨).....八四

夜登皆神山.....八四

○(暮夜輕陰).....八五

夜歸.....八五

奉酢桐山先生用元韻.....八五

○(託心論性).....八五

次韻.....八六

庚子新正謾吟.....八六

都下有人惠今春所刷印記都下諸名家字

號與二三子閱之賤名亦收在其中戲題三

詩.....八六

題壁.....八六

○(一水號玉池).....八七

題鐵如意.....八七

謝梁川公圖惠山水.....八七

○(盆頭仙子).....八七

紅雨盦.....八七

詠龜.....八七

高義園十二詠

常關.....八八

聚遠樓.....八八

清夏軒.....八八

瓊林.....八八

箇徑.....八八

古木公.....八九

范公松.....八九

希范亭.....八九

寒泓.....八九

紅雨盦.....八九

長春菱.....八九

高義園.....九〇

鼎鍊異味

答常山兄之寄用元韻二首.....九一

啓之與常山唱和也鎌原先生次其韻以祝

於是再用原韻以答之.....九二

三押原韻奉酬鎌原先生.....九三

四押前韻奉酬鎌原先生.....九四

答常山兄贈鎌原先生兼見示之作因

又呈先生乞政疊韻.....九五

復倒前韻呈桐山先生因寄常山兄.....九六

北遊亂稿

道上走筆別送行諸友.....九七

道中謾吟二首.....九七

宿澁湯村.....九八

大瀧村.....九八

反村逢雨.....九八

遊夙夜堂懷洲尾.....九八

新瀉初逢儒生鍾山席上贈此.....九八

同致遠子反子進三子懷徯海畔分北風有

力負山走爲韻得山字.....九九

此日邂逅新瀉司市小林誠齋蒙惠佳什卒

爾次韻爲酬.....九九

客夜即時.....九九

來越吟爲逆旅主人.....九九

新瀉橋山堂置酒觀壁間所挂侃齋老人畫

米法山水心爲之動乘醉乞去翌朝以此爲

謝.....	100	齋米賈乃購歸蓋畸人也.....	101
小林誠齋席上見示佳作次韻爲謝.....	100	謝三浦榮亭指示睡菜.....	101
閏四月小盡雨.....	101	雨中放舟.....	101
謝高田致遠見惠蝦夷製草籠.....	101	望濱泛舟觀彌彥神雌雄臨竈.....	101
新瀉買舟至龜田二首.....	101	海瀕晚眺.....	101
漁歌子.....	101	山田驛泛舟至柏崎.....	101
自水原往柄目木觀氣火又循草徑入谷觀.....	101	海山口號.....	101
油井之沸騰作.....	101	自柏崎至今町船中.....	101
過村松濱訪渡邊善庵咄嗟之際煮菽煎茶.....	101	中山道中.....	101
情誼甚殷羈旅寒生無以爲報臨別書數字.....	101	南歸吟.....	101
聊致謝意云.....	101		
自村松濱至乙寺道傍盡松林得三絕句.....	101		
新發田安田蕉鹿稱唐十郎有唐山癖座右.....	101		
玩好悉皆彼土器物至遊于長崎見西商所.....	101		

天保五年元旦

甲午元旦。讀易謾言。因一齋先生韻。增以二齋先生韻。躋六十有三。

繙易迎升日。養蒙估畢呻。天心隨浩浩。生意漸津津。閉蟄方成解。句萌初出屯。  
 肥穀儻小畜。芳醪速同人。風物看咸朗。雲容望益新。歡聲羣鼎沸。朝市兆豐春。  
 一齋先生原韻曰。東軒朝讀易。讀罷一唸呻。雪砌冰初渙。煙庭草發屯。齡今丁既濟。歡舊對家人。腔子須頤養。乾元不老春。

天保七年四月

丙申初夏。竹庵師許始見林君大輝。大輝延余致其堂。誼如舊知。及夜八木上野高瀨。絲我諸君相尋而來。其樂不可言。乃賦詩記事。

竹庵訪老釋。偶然見仙官。清詩和超俊。芳茗偕甘寒。慙慙速我意。唉指碧雲端。  
 相將欲理策。急雨瀉平原。駐策暫佇立。延頸空長歎。雲霧升金堂。清涼異人寰。  
 玉壺湛綠酒。鮮鱗盈器盤。何我藜藿腸。受此珍怪餐。矧又賓友集。道誼如金蘭。  
 高談洩胸奇。大啖留餘歡。天色夜來淨。月光正團團。庭樹露未晞。明珠麗葉閒。  
 更深景倍奇。豪興豈易闌。所恨世絆緊。明朝拂歸鞍。

天保八年三月

贊文晁富士畫

詩稿

弘化の初年

便駭單身在碧穹。繚青縈白望成空。金城丹闕知何處。揮袖將乘萬里風。  
天保丁酉春季。爲關子恆。象山平啓題。

龜叟嗜茶知水脈。手穿巖井向人誇。何時去坐六藏窟。共吹爐煙啜乳華。子時久寓于江戸玉池

御使者屋時

沓野村溫泉。謝佛巖禪師見惠蕎麪。

弘化四年十一月

擬古

我昔在名山。學仙巖穴閒。精修絕鍊貞魄靜息諸緣華念。冥寂味幽玄。偶逢方瞳叟。長跪授靈編。  
恍惚與之去。躡虛朝帝先。青童奏笙樂。雲旗導吾前。鸞鶴隨上下。玉佩鳴珊珊。  
俯首睨下方。九區小似拳。俗於子營名利。其中事周旋。顧之付乃一咲。高厲摩黔天。  
何意一失足。忽墮世網艱。樊籠殊牢固。羈絆又拘牽。志願久不申。五內徒熬煎。

白日出復沒。在苒苒顏紅顏時。顧鏡裏影深羞。山中仙松柏非桃李。歲寒節愈堅。  
終當鍊羽形。高舉入紫煙。

花發多風雨

誰言花發多風雨。風雨多時花正開。風雨中閒花更好。好花風雨起予來。

安政四年

哭林大輝

沈痛欲慟哭。雙淚澗難斂。借問胡爲然。悼人在思念。相識三十年。交情素雅澹。  
歲時相經過。要約亦不汎。夏樓平生談理妙。永訣何攸占。不意所然諾。竟爲延陵劍。  
至誠無幽明。弱翰今苟蘸。逝者若有知。此情庶无忝。

采芝歌并引

嘉永元年

嘉永元年夏。巡行轄野深山。山閒得一草。長七寸許。一莖六枝。枝開一華。宛  
然幽蘭。惟無葉爲異耳。枝莖淺紅。華色淡紫。皆玲瓏如玉。香氣清絕。不可名  
狀。遠聞于數步外。問其名無能識者。予按字書芝古字也。以象其形。則其一

莖數枝之狀可見矣。傳云芝蘭之室。以與蘭竝稱。則其爲香草明矣。又記陸子靜書其玉芝歌後云。成花如蘭。今皆相符。則爲眞芝草無疑也。作采芝歌。山高兮谷盤。憺余忘兮反旋。蔭松柏兮偃蹇。嗽石泉兮潺湲。觀神草兮品側。心浩蕩兮愉懌。瑤華兮冰蘂。玉穉兮瓊枝。女何爲兮山阿。芳郁郁兮襲台。蹇夫英兮爲佩。將以遺兮所思。路險艱兮悠悠。聊被服兮翺遊。

題山水圖

江澄山亦淨。可以澹冲襟。泉源通絕谷。石徑入寒林。應有塵外客。攜手共幽尋。白井子康。見寄庭榭所生黃蕈。食之有仙味。率易賦詩。聊表謝憶。

氣和擢紫莖。玉色照階庭。道人采以贈。殊愜物外情。潔性與吾宜。幽獎啜香羹。未論換凡骨。且覺襟懷靈。詩律生神韻。酒味更冽清。笑他世上人。貪饜逐穢腥。賀墨坂大夫丸山君六十三初度。

忽聞□際紫芝香。復見雲閒白鶴翔。高閣笙歌奏仙樂。滿堂賀客薦霞觴。蓬萊

天保十年か

闕下無春盡。函谷關中覺日長。從是先生積壽子。洋洋海上認塵揚。

別高田仁兄

此別何須嗟。我行亦不遠。溼堤花盛期。同遊盡醉返。

江廣夜色靜。月明柳陰涼。扁舟行不住。棹影搖空蒼。

書狂雲集答山寺懼堂

多才狡黠愚羣氓。爭柰通人眼若星。狗子由來無佛性。鸚哥空誦淨名經。

丁巳歲暮

屏居省譴此遲留。多病衰容易白頭。歲暮徒思天下事。夜深漫添眼前愁。虛名久竊世無補。遠略未抒時已遒。祇合飽傾滿觴酒。酩酊日日偃空樓。

天保元年か

風光難畫種苗天。游目菅公祠廟邊。斜日已昏君去後。箋頭但寫兩三篇。



文久三年

馬上雜興

霜蹄踏破澗蹊青。山寺逢僧不記名。憩馬閑談忘坐久。寒林處處著鴉聲。

天保初年

專精上人。見示梅花詩二十首。併近作十首。且惠一絕。輒不自揣。題評以還。又次韻見寄之什。以爲酬。

庸愚不度進評語。誰在班門堪弄斧。歎服筆端如造化。光風霽月何時腐。

滄浪啓

天保七年二月

○

堂堂豪傑士。手有回天方。乘時施其技。生民解痍創。功策驚天地。又入名山藏。柳韓是何人。終世事辭章。

天保丙申二月晦。書於專精寶刹。佐久閒啓。時酒數行醉書。

亡友今井子冽。病閒嘗手寫陶淵明集。至初卷功成之時。謂予曰。頃來疾重。而懶于揮毫。請吾子全之。未幾而沒。今因前約。謄寫補之。乃得全。

今井子冽は天保五年夏死去す。

本。追思往事。真如一夢。感懷之餘。涕淚滿襟。慨然賦一絕。錄卷末云。

歲寒心事若爲通。金石交情一夢中。前約已成君識否。游魂何處邈無窮。

拜子冽墓

憶昨與君來此場。相攜相語歎無常。如今君去我猶在。休笑丈夫霜短裳。

○

晚景蒼然煙霞籠。仙禽求宿小園中。落花和雨翩翩下。廡北廡南不是風。

○

靈溪斂夕嵐。層岑出皓月。歸樵降澗梯。栖翼匝林樾。此有朱沙泉。涓涓瀉不竭。月光忽來臨。空潭倍清徹。浴之心自廣。浩然長歌發。乘涼步巖傍。松風灑散髮。

琴興十五首之內十五首之

乾坤生物意。草木日滋榮。一曲三彈罷。南薰吹太清。林下鳴琴坐。風聲但自然。梢頭月方午。滴露濕吾絃。

十五首中の一首は詩中に出づ。

天保七八年頃

王公如召我。爲爾理桐絲。窘促又何態。平生咲戴逵。  
霜明朝氣爽。紅日照書幌。起坐試秋風。庭林墜葉響。  
我琴雖然拙。亦協太古情。至人反真意。不在指閒聲。

蓮詩二首 鑿括愛蓮說 與柏屋藤助

草木花甚蕃。噫予獨愛蓮。不染乎淤泥。淨植濯清漣。亭亭宜遠觀。何可褻玩焉。  
不妖不枝蔓。濯濯清淵中。來人愛而翫。有聞遠香通。華之君子者。衆草不可同。  
庚申中元。給柏屋藤助主管紬價。近日金貨狃貴。每字號不同其賈。余以正  
字金。誤爲常金而支交。終不自省。主管亦似不知也。明日藤助故來還其贏  
餘。嗚呼。世道澆漓。非一朝夕。錙銖之利。毫末之贏。詐以相欺。譎以相爭。僥倖  
奔趨得之。而后已。天下滔滔。是皆也。今藤助身業商賈。而立心廉潔。不以得  
非義之利爲悅。必以還其贏餘而爲快。是非惟可以爲天下商賈之儀表。抑  
亦可以勵天下士大夫之心志。故余書此詩而遺之。蓋深嘉獎之也。象山平

子明。

擬古

細颺憾羅帷。皓月照我牀。肅肅莎鷄振。嗷嗷哀雁翔。佳人在遠道。翹思使人傷。  
沈吟託古桐。調苦不能揚。歡會歎時促。離居怨夜長。漏闌不能寐。攬衣下高堂。

○

蹈險從來獨不違。積年愈信道心微。丈夫知己只天地。萬古寰中相識稀。

謝藤岡勉齋送盆蘭

幽芳楚客佩。靈姿異凡卉。碧稜抽光葉。紫莖綴玉蘂。非君分九畹。寒齋詎置此。  
素馨流戶牖。座閒徹香几。豫恐秋風敗。惜愛不暫弛。清晨承露華。風日避塵滓。  
願言全幽貞。晚節共不毀。

雜感

使節往來無絕信。生徒畱學有期年。卻嚴約束廣東地。不納羅斯貿易船。

文久三年

詠柳眼

信國霜雪早。柳眼時見新。澤澤黃金色。學來還似銀。世人貪祿利。自道致其身。一朝臨大事。飄散隨飛塵。豈若汝弱質。歲寒能知春。

蘭

斯花有性氣。愧與凡葩羣。未成君子佩。幽谷守奇芬。

無題

靜卷遺編喚酒卮。且憑曲檻撚吟髭。東山秋色美如錦。恰是西溪落照時。

自畫山水贊

年逾知命志尤堅。獨向青山更絕編。天下有山山有水。養蒙肥遯正翛然。

中秋更級觀月。明朝歸途逢雨。二首

昨夜山樓弄月光。今朝猶染桂華香。中途試望勝遊處。滿壑秋雲雨渺茫。倦策歸來路未央。古村風雨暗林塘。通宵飽看名山月。此景今朝渾不妨。

文久年中

天保八年八月

安政五年九月

逸題

秋雲易雨雁橫空。坐閱年華憶海東。演礮歸來品川路。暫時駐馬看丹楓。

天保十二年六月十三日。大朝以吾公補政。今夏久不雨。民以為憂。是

日適大雨。農商歡呼。似亦有不偶然者。喜而成詩。

嘉澤淫浸。浹四隅。旱禾秀發。民亦蘇。正是吾公登閣日。先看祥兆滿寰區。

屏居

身非真隱愧王公。卻用壯圖付世雄。霜雪貿然年紀逝。老夫祇合臥齋東。

釋氏

釋氏習寂靜。動定境自異。性靈妙明覺。通照無罣礙。可以鍊身體。可以生神智。

可以為高人。可以為循吏。可以為名臣。可以守廉介。以上數句。阮元性命古訓中。

約耳。而與孔孟傳。判然殊其致。雖則殊其致。所利不可棄。王道歸皇極。敷錫

詎偏陂。

釋氏之言。往往與列子合。而列子之書。又有與泰西窮理之說相符者。蓋其得於心者。有所同然。不可誣矣。夫身毒與漢土。相距之遠。非如我之於泰西也。然其書。文字音讀。必累數譯。而後始通。而其原書亡傳。後世不能復有所考驗。故儒者有以其言近似。而遂疑竊取莊列之說。以爲之者。至于泰西之書。則今時吾輩皆知其讀法。誦說解釋。與漢籍無差異。其言之有符。歷歷可證。則儒者之疑。已無所容。而心得之有同然。無分於地與時。不亦滋明白乎。因錄此詩。遂及之。

天保十一年

郊行

散步愛秋晴。平郊窮遐曠。稻田已垂黃。楓塢猶雜綠。征雁聯時分。閒雲斷復續。觸目理妙存。相羊悟悅足。

天保九年頃

頭上山洩雲。脚下雲迷樹。不知春淺深。但見雲來去。是子年二十八九時書也。子生三十七年。始學顏平原筆。

蹟。由此以前疎放自許。未及畱心手學。故年垂三十。其書無法度如此。可以爲後世之戒。德成而上。藝成而下。書之美惡。固不足以輕重人。然筆札下劣。甚刺人眼。而不自省覺。亦可羞也。子弟戒之。安政戊午中冬啓又云。

富士山

芙蓉三萬六千丈。突兀上向青霄開。膚寸合雲雨。天下不道山龍施。行澤來。

文政十二年

文政己丑夏五月二十日。與宮下氏同遊石川山。以采石花。往復詩有

四首。

試步半陰半霽日。田園麥色已漸黃。村童橋下追魚走。婦女桑中採葉忙。途中穿石清流滾滾來。遂超虎脊踏龍顛。白巖削作芙蓉狀。萬古千秋天外開。石川陟彼西山采石花。溫光映日轉婆娑。幽溪深鎖隔人世。欲遇仙翁學踏霞。同前會村村落夕陽微。揮袂涼風吟咏回。東北山遙如帶處。忽然雨足連天來。歸路

一齋塾時代

趙高蠹呂秦。元是報讎志。所以梁闈人。終生謀宋利。

天保七年四月

訪鳳山師途中

山遠煙村縹緲。堤平風樹離披。半晴半雨良日。非暑非寒好時。

文久三年

馬上雜興

過堤忽被香風吹。薰染人衣與馬衣。頓轡回瞻還悅目。路傍開滿野薔薇。

嘉永三年冬

雜感

永樂雖多殘俊彥。東陲卻有將材存。康寧一擊火光滅。不見鯨鯢入海門。  
刀槍銳利本無雙。人士英靈冠萬邦。更舍私心收衆長。何方醜虜不歸降。  
礮隊騎軍談握機。堅城巨艦策相依。不虛生世丈夫志。海外欲張吾國威。

偶成

琴瑟未調誰會鼓。盆瓶豎嘖不堪盛。紛紛世事何時定。且可沈酣畢此生。  
箇中至樂自難陳。人道即天天即人。唉殺寒巖究禪客。脫離身世枉觀真。

嘉永三年

題梅畫

天保八年四月

冰雪堆中獨放香。窮陰無賴又何傷。野梅自有性奇僻。風標別羞與凡花爭俗妝。葩

次韻山寺君述懷之作。以送其祇役于江都三首。

聞昔昭王當位年。能聽買骨務招賢。如今聰睿踐其跡。豈在成功獨不然。  
古來卓識世閒稀。惟在高明能察微。蒞事當任宜盡分。何於得喪與譽誹。  
俊傑拔羣謀事時。小人常態多驚疑。請君去日休憂念。內積精誠誰不移。

天保七年か

七月既望。同山寺常山寺內松濤二兄。恩田君東園觀月。次常山兄韻。

其一

園闊秋夜靜。石樹疏數工。水光倏閃爍。月昇斗牛東。蔬卉明露華。樹陰唯秋風。  
緬想赤壁興。喟然歎蘇公。世人無真識。動輒侮豪雄。有賢不知尊。無乃是盲聾。  
我儕學道者。宜不此輩同。慷慨劇談久。天際月既中。

其二

名園誰經營。自然類化工。小丘分溪水。清流遶西東。涉流踏明月。踞石嘯清風。

既有茲風月。況見吾二公。胸襟頗明快。談笑亦俊雄。洗杯相酬酢。高歌駭頑聾。因歎無盡藏。千載受用同。酣樂非荒宴。道真在斯中。

天保八年四月

送世子傳。不息山寺君。

往我作直卦。勸君建本根。微忠全在此。此外更何言。

屏居

演礮花開彼一時。新花歷亂碎瓊蕤。如今閑臥幽林下。獨對殘紅愁細颺。

閑居雜詠

碧水澄吾神。青林澹吾慮。養拙三五年。滋覺世事遽。時風悅軟熟。物情重琛賂。辱寵復奚思。塊然守樸素。

馬上雜興

文久三年春

夾路櫻花發。近人趁晴駛。馬驕嘶春奔。馳偶與飄風會。撲面飛紅興更新。

雜感  
壬子晚春

女戎一怒不徒已。萬足破波東海東。愧殺書生無氣骨。優游猶自學雕蟲。

屏居

秋樓獨酌臉潮紅。醉倚欄干明月中。夜氣侵人儘能耐。不須更服玉屏風。

放歌行

嘉永六年七月

嗚呼先公不可見。良忠大夫逐飛電。救時長策誰能聽。恨殺萬里浮雲徧。國賊不恤國賊否。小兒但覓粟與糲。我憑屋柱歌此曲。閭門爲之顏色憂。

少年時代か

山麓幽清宜養真。柴門不鎖沒塵侵。方池一片長松下。澗碧空明見此心。

身作男兒著盛服。何堪陰險欺幽獨。從他世上奸屠家。每挂羊頭鬻狗肉。

題畫山水

山容如太古。水態世情非。疎林映脩竹。細草覆荒磯。孤亭長不鎖。苔徑人蹤稀。

珍重倪高士。千載尙未歸。

春水滿四澤

澤國好時節。春水日夜生。近渚纔餘草。中洲渾欲平。懶雲岸際宿。遊艇柳陰行。更愛汀煙外。碧波涵花城。

夏雲多奇峯

白雲結奇態。一一似芙蓉。突兀輕風外。峻嶒落照餘。涼氛乍散漫。秀氣坐蕭疏。儻作今宵雨。從茲遍太虛。

秋月揚明暉

暮天綠煙盡。秋水白波生。圓影當中空。物象皆露呈。山河屢改變。人世幾枯榮。對景終遙夕。悠悠萬古情。

冬嶺秀孤松

老幹倚崇嶺。勢如翠鳳翔。晴陰自葳蕤。風韻復蕭騷。地位元不卑。雪中氣更豪。

非歷苦寒境。詎知勁節高。

○

青衣紺幘翦裁新。巧扮羣猴做美人。可惡申韓斯鞅術。暮三朝四狙天民。

題自畫

濃淡雲煙山腹橫。疑風雨至一溪聲。禿毫寫得董家法。胸裏峯巒未必名。

東山觀桃花次宮下兄韻

東山處處桃流芳。遠近紅霞遮日長。此日初來探勝客。徘徊猶自欲忘鄉。

○

陋巷寒溪側。雙松窮士家。門荒埋薜荔。階古長蒼葭。利勢非所願。才能何足誇。好傾一瓢酒。恣意聽鳴蛙。

天保癸卯夏日錄供君毅仁兄粲正

美哉鄧林樹。蒼翠若濯淨。非云無枯枝。只是不足病。

天保十四年夏

同上

移梅

仙人修法鍊丹砂。飛著枝頭爲風凝。一根移去書房邊。欲假清香助雅興。

天保十年六月

卜居五吟

辭里來江都。卜棲玉池沚。池水宜鑿形。嘉木堪可倚。昔人居洛邑。擬觀天下士。方今襲前躅。良朋肯枉趾。

幽居有五柳。酷似陶令貧。詩聊宣浩志。酒屢發情真。陋劣儒生業。飄蕭客子身。所思猶在世。未稱葛天民。

南苑一遊涉。愛茲高柳陰。迴風舞藻荇。蕭颯似秋深。放懷隨所適。發興命弧琴。鍾子知何許。山水有清音。

晨起嗽寒井。高齋理遺經。爲由冲襟爽。轉覺外務輕。陋矣溺訓詁。鄙哉託利名。吾道極于天。近小非所寧。

倦來拋書帙。物理靜此窮。游魚自潑刺。啼鳥亦冲融。欄角嘯梧月。庭陰吟柳風。

世無邵夫子。茲懷誰與同。

屏居

偶然罷驅馳。幾年廢歸臥守側陋。松柏日成趣。蘭菊亦挺秀。非友古人心。終與誰同臭。賴有萬架書。滿披閱永昏晝。

沛雨

黑雲壓奪遠山黛。颯颯震來風雨漑。綠荷搖動似驚波。萬顆明珠一時碎。

賀大川大人之八十八

有松在南嶺。千年翠露濃。持以爲翁壽。願翁如此松。

○

千枝萬朶花如綴。遠映彩霞曉露重時尤艷絕。芳意將闌風入林。青天白日漲紅雪。飛

屏居

不取容當世。情思少所親。彭澤去已久。安得素心人。把杯聊自適。陶然永宵晨。



路傍花木正飛香

墨堤春色難徒過。江月驪駒今若何。遙想鐵蹄高響處。花閒鞭影落晴波。

屏居

消遣閑愁存底物。杏村新釀兩三卮。春朝雨過江山麗。還把離騷獨自披。

賦得松閒明月

老松蟠屈躍蛇龍。半夜葉閒光忽瞳。一曲玉鐮新下礪。直尋好朶賁簾櫳。

戊申新年作 客歲辭免郡監

罷休不受當時責。嘯月眠花得便宜。況復太平開歲首。金樽倒盡在茲時。

幽居

楮杉松柏綠重重。更有流泉鳴屋東。世上熱官偵不得。幽栖六月已秋風。

屏居

屏居自無事。涉園西復東。遊禽狎不驚。花草時改容。倚林送落照。坐石待流風。

鳴泉響深竹。歸雲在古松。不願人來顧。幽寂獨自供。

無事白日悠。周覽足圖籍。況茲長夏時。薰風吹幽籟。獨坐興方澹。默玩理弗隔。陶然酌一杯。更忘山景夕。

失題

日高時鳥語。睡足始開扇。雲布魚鱗白。山連鴈齒青。獨尋芳草路。暫憩野人亭。吟策既幽夕。歸來月滿庭。

題畫

青壁掛飛泉。樹深風自冷。精舍素無塵。書帙亦齊整。凭檻誦道言。不覺夏晝永。

逢春沙話舊

多年空恨舊遊睽。逢話舊遊心不迷。墨堤連轡櫻花底。得意春風吹馬蹄。

馬上雜興

曉揚鞭策到溪東。霧淞滿林花樣工。不是集英深殿舞。馬鬚也插玉籠鬆。

文久三年

文久三年か

題山水畫

兩株煙柳拂彎橋。一幔風樓倚翠翹。如帶青山長十里。依稀刷入尺餘綃。

石坂眞龍宅宴

廣宅膏腴地。主人鄉曲豪。招邀忘路遠。歡待愛情高。短匙排文玉。豐餽等太牢。老饒貪俊味。更喜飫兒曹。

○ 四月清明小雨過。山頭水色薄於羅。也是一年佳氣候。卻勝花時寒意多。

題畫

獨往討幽寂。風露淒將寒。古道一亭靜。亂山千樹殷。勝踐興未盡。雲歸夕陽殘。滄海翻波起伏龍。飛騰倏忽過芙蓉。沛然下雨物皆息。雨霽雲收無跡蹤。

○ 物去無追著。體舒心自閑。嘯風風洒洒。吟月月團團。坐臥齋房裡。逍遙天地間。

何須求大藥。辛苦入仙山。

讀洋書

壯年貴苦學。博涉宜無常。旁執西洋書。日日課數章。太易本無體。至神豈有方。新舊互相發。斯理生輝光。心解真河決。決河沛然誰禦防。惜無宋明賢。共與入此室堂。學場

踐約棲鸞堂看花。此日有雨。

不辭泥濘沒遊屐。來倚故家南面楹。賞花不必在晴日。雨雨風風也有情。

○

雨祠祠畔雨廉纖。暫立溪頭側帽檐。記得勝遊時一笑。杏花村裡舊青帘。起昔

閒居

築室窮巷曲。環堵別四鄰。石湍激庭除。青山當承塵。花木棲啼鳥。荒砌苔敷茵。對之酌春醕。衍衍樂志神。我觀驟風雨。莫能終日辰。彼蒼猶如是。況乎此生民。榮利非可恃。至道貴安身。取轍彭與老。恬淡養吾真。

弘化元年六月

文久三年か

御使者屋時代

題畫

欲託守微痾。永釋塵累紛。幽獨水閣闕林扃。靜披玉笈文。山中新雨足。林外夕陽曛。多謝同道友。趺然破溪雲。

梅

吐花瘦骨見精神。磅礴清香尤絕倫。應爲孤標能耐冷。不儔桃李杏獨先春。

次春沙兄寄題之韻

屏居寂寂世緣輕。過客蹤稀忘近城。只愛環樓松籟外。通池曲水有琴聲。

馬上雜興

青驄尾醮碧溪水。石瀨磷磷淺且長。飽飲中流徐上岸。柳陰又得幾時涼。

白馬歌

有馬有馬名曰開。卓然獨在南山隈。世閒駑馬何齊足。追風越景勝方才。金鞍玉珂雖不飾。雄氣猛志能可邁。平生守節不涓泥。美質瑩瑩如玉色。思致修名

文久三年

文政十一年

千里身。伯樂未知慵仰鳴。一朝所擇從奴隸。滿懷快氣紛相生。直士忠臣不見用。諂諛愚戇多受俸。古往今來人所知。時乎命乎道何壅。英雄和漢幾百千。能天能人纔以傳。今時侘傺堪酸鼻。良馬俊駒亦復然。退之爲說義真是。豐藻卓論皆緣此。茫茫天下無馬耶。總在伯樂不知只。日日低耳著鹽車。自掩才力徒嘆嗟。竊恐羣馬相嫉妬。荃亦信讒而有他。伯樂一相若使進。蹴裂堅冰超巖峻。更得王良造父操。山河千里唯一瞬。

○

曉風吹曲沼。秋水起微波。芙蓉非難折。零露柰多何。

挽金子生

金子重輔。澁木松太郎之本名也。

金生忠義志。飜遭盛世棄。我亦斯人徒。命乎可安義。脫繫各東西。心期勵初志。利器修且藏。螻屈待時至。如何不秀苗。中路零其翠。歔歔豈獨今。百世足悲淚。

安政二年

嘉永元年

示諸生

南金逾鍊色逾鮮。人亦如之敢不研。搬水拆薪皆實學。工夫不必在陳編。

寒夜

宿鳥如驚夜數鳴。黃綢衾薄睡難成。林居將曉凌兢甚。屋外時聞樹裂聲。

嘉永二年か

夏日偶成

涼飆吹高柳。策策入疎簾。幽人覺午夢。起坐理牙籤。氣冲眼自明。形忘神亦恬。大道未<sub>雖未庶</sub>庶幾。利聲久已厭。時景愜茲情。衆理足沈潛。悠悠此中意。俗子未易覘。

屏居

庭陰風露交。砌竹忽鳴秋。杯酒陶今夕。明朝非所憂。琅然夏寒玉。逸想不可留。

留別靜山龍田君

風晨月夕共吟哦。行樂不論年歲差。他日欲忘忘叵得。東山溪畔賞桃華。

○

見月真言言不空。圓明何處不圓通。塵根心法都無物。妙用方知與物同。

觀水道人

天保十年正月

石龜歌奉賀赤澤先生八十之誕辰

赤澤先生名は安輝通稱助之進晩に醉翁と稱す。

清江使者身半丈。三百甲蟲推獨長。七十二鑽無遺策。剗腸留骨不足獎。赤澤先生學無爲。冥契獨獲石腸兒。背上丘山無斧痕。天成列宿法象垂。惠迪得吉惠逆凶。爇燠何強問安危。不解張口吞空氣。無爲恬靜長不飢。先生法之工夫細。行年八十貌類稗。煉形往應如此石。久視千歲亦容易。

天保十年己亥正月象山平啓

聚遠樓時代

○

楓葉秋高愁客情。吳江楚岸不留青。幽人卻愛晴霜曉。林下無風紅滿庭。

○

禪林終日雨蕭蕭。何事落花如雪飄。新樹林閒老鶯語。蛙聲相和似吹笙。

夾竹桃

時雨生涼秋意饒。庭階風樹日蕭騷。蕙花已謝木犀晚。夾竹桃香韻獨高。

萬延元年三月

富嶽

幡幢高抽萬丈凸。下方羣巒都爲垤。鎮壓皇畿冠蓬萊。銜朝紫微不班列。磊磊懷襟何所容。動物蟠栖變化龍。駕雲起雨晴也晦。誠見風伯驅奇峯。顯然現出真仙妃。莫賦嬋妍兼艷丰。縱有山神稱仙女。凌霄元爲清潔宗。若有蕪詞記漫浪。山神不許此一場。

天保九年三月

般若寺逢長崎僧末山

次韻

宿病新愈心特激。醉餘吟興晚堪乘。溪邊偶此過蕭寺。松裏不圖逢異僧。春夜殊憐花影重。巖房最好月明昇。此情方外能無厭。他日攜琴更一登。

同前

再訪末山用元韻二首

境幽溪澗與神激。顧眄徘徊興自乘。長嘯已驚巢上鶴。朗吟復起定中僧。雲階

蘭臭隨風遠。石竇茶煙隔竹昇。半日清閑吾事足。曹溪勝地未思登。

暮春天氣亦清激。行樂悠悠風耐乘。素手浴蠶溪畔女。龐眉語客石橋僧。數峯晴日潭光動。一道花林香霧昇。忽憶山門曾結約。松閒拖杖更重登。

嘉永五年か

讀宋氏宇宙記

夏林昨夜雨。餘滋在園蔬。日出猶未曛。露華湛平鋪。錯落如列星。明圓似編珠。蟻此形誰使然。能力非外驅。窺彼天體圓。始原將無殊。理妙無小大。不達竟焉如。

文久三年

冬日馬上雜興二首

不須僵臥學高賢。豪興難留坐瀾鞵。蒼虬直入玉城去。恍覺仙門在眼前。蟻吟鞍極目白漫漫。平野連雲千里寬。飲來已有十分酒。拂面瓊塵不甚寒。

○君家蕎麥聞來久。瑩白映盤看欲消。誰得仙人餐玉法。寶刀斫下水精條。訣

文公相

詩稿

忠貞許國不顧稿身沒卻逢若生前忠蓋至忘軀。薨後浪遭姦禿誣。想道君靈儻有識。千年廟食不如無。

武楠公

帝賚無慚舟楫才。用之不果亦堪哀。天王寺裡一時策。猶爲當今指未來。

○

雨後春園遍有苔。睡餘書室轉無埃。午窗起坐喚新茗。林下泉聲靜自來。

偶成

一齋熟時代

殊塗一致何勞神。暑往寒來唯屈信。除讖雷霆兼日月。世閒盡是盲聾人。

戊申試筆

我有靈刀不可試。試時解斫奸邪頭。匣中重襲不會出。紫氣猶能衝斗牛。

竹夫人

虛心守節不牽衣。暮暮朝朝露玉肌。酒席迎風涼更好。詩筵對月趣尤奇。牀頭

夏到陪君子。牆角秋來將寄誰。消長盛衰今古爾。漢宮何必一班姬。

夏日山居

麥熟山田色半黃。門前老樹鬱蒼蒼。茅茨幽僻不知暑。甕牖清閑常送涼。日日  
喜看煙景好。時時笑見世人忙。此□其外聞何物。又有松風似奏簧。

○

膽形瓶子護仙妝。愛玩牀頭夢亦香。薄暮雪明窗外白。吟魂和月落滄浪。

贈平野生

本根培養豈傷枝。志氣輕浮難變基。休作紛紛閒說話。聖賢所貴在真知。

曉發

天保八年

林閒滴露滿入衣。澗道雲深曉更微。謝得山靈護持意。高懸明月送吾歸。

○

簾幕春暄晝漏長。香絨刺出兩鴛鴦。心機元在指尖上。度與金針卻不妨。

甲寅春日錄舊稿

幽沈世味遠。泮渙道意寬。身坐小室裏。心游大虛閒。已多理可玩。更有物堪觀。水飲全天樂。亦非吾所難。

讀洋書

珍木何亭亭。迺在至人園。墜果感玄識。鬼帶始可究。茫茫天壤閒。長夜開清晝。功績真無窮。足以蓋宇宙。颶風仆蠹幹。後死恨何輜。作椅存尸祝。千載不忘舊。

題山水圖

芳春麗雲物。時禽語暄風。花林秀嶺下。晝閣衆香中。閣上盡日坐。暮色愁聞鐘。

○

蟲歌山畔雪皚皚。一隊生徒演礮來。病懶怯寒無意出。臥聽轟擊走晴雷。

偶成

久雨初收風又狂。羣鴉亂噪下橫塘。寒林蕭索無人倚。獨嗅梅花立夕陽。

文久三年

癸亥春日與友人出遊小憩中途旗亭

樓前繫馬酌東風。何惜囊錢隨手空。不道十年復相伴。瓊杯春灑夕陽中。

經碓冰嶺

丁酉辭江都。己亥度碓嶺。嶺上望都門。目盡風煙冷。行程纔三日。相去不甚迥。怪彼勝遊處。縹緲無所領。人軀本自藐。官能多不逞。知識罹二妙。視力略相等。好理不卽實。所見意昏冥。滔滔簡陋徒。終古追風影。念茲且躊躇。惕然心自警。借問經過客。何人同此省。

梅

天下第一品。含章未見珍。誰知冰雪際。已兆後年春。

蘭

雖爲衆草伍。愧與衆草友。其內美竟難。韜清芬流谷口。

菊

萬延元年九月

秋色滿天地。蘭殘荷葉衰。愛茲霜下傑。晚節共心期。

○ 移席久危坐。衣襟露氣濡。隱憂宵共永。幽憤月同孤。蝥賊非無類。姦邪繁有徒。寄言孫寶子。鷹擊致霜誅。

無題

人壽固有終。不出百年中。伊余雖未衰。百年半已空。宜省前途促。委運任疎慵。矯矯陶元亮。清節衆所崇。恥折腰小兒。解綬善處窮。果哉歸去來。千歲欽高風。

偃松歌

盤拏拔地不甚高。夭矯已五十餘步。疑是古昔老龍之所化。至今有時欲軒翥。多節備何礪。何多節磨銅石。秀葉葱蒨籠煙霧。海風日夕濤聲起。盛陰六月滴寒露。貞容不缺古貌深。隆冬神王凝體素。青羊黃犬誰遇之。已有靈珀似伏兔。神物由來無常形。樊籬隄防不可鋼。我恐雷雨晦冥夜。再作真龍沖空去。

天保元年正月十四日

讀管子

二百年來遭太平。人情浮薄少忠貞。堪嗟衣食有餘者。過半不知榮辱名。

屏居

春秋冬夏林泉好。雪月花風散懷抱。率意題詩聊自娛。儘從人見笑枯槁。晚起怡無務。閑吟憑艸軒。水澄魚鯉露。林靜蜻蜒翻。老懶非真隱。拙才只憚煩。淵明解吏職。千古當同論。

冬日喜江都酒至

久不得意臥蒿萊。況遭嚴冬風雪摧。友朋咫尺絕來往。遙望江雲動遠懷。青州從事忽然至。直達齊郡何快哉。一醉春<sub>須</sub>意<sub>與</sub>生<sub>陽</sub>四體。信任高寒凍園梅。

馬上雜興

秋霜雖未上鬚眉。漸覺豐肥非昔時。醉後何須拓金戟。第應馬背弄鞭絲。

讀禪書

文久三年



旁書の詩に  
は亦愜靜に  
情の次に  
ほ雨餘夕に  
度露葉弄新  
晴の二句あ

詩稿

形跡雖似踟。塵累幸無嬰。林居宜隱淪。高樹與雲平。夏晝北窗臥。醒來非夢驚。  
坐閱釋氏書。亦愜寂靜情。端合息諸緣。超然了無生。

無題

綠樹青苔晝掩扃。利名場上嘆無能。吟窗只愛焚香坐。自笑前身或是僧。

屏居

園林風雪響鏗鏘。晏起悠悠意頗長。窮巷柴門無客叩。明窗小字試硬黃。

夾竹桃

黛葉嫵娟輕竹翠。紅花綽約笑桃春。日中驤影挺挺潔。風裡奇香細細新。

謝立田靜山見贈水葵

佳人忽有贈。葦絲何處采。嫩芽滑不羣。柔簪清無比。生噉醃已宜。澹煮鹽亦美。

足跡不向門。安坐快頰齒。笑他張季鷹。命駕歸千里。

閑居

五二

天保十四年  
冬

此の詩甲辰  
新春謔言と  
題せるもの  
もあり。

叢叢金澗樹。靄靄碧峯雲。月下人孤坐。風前泉遠聞。弱年好丹藥。幾歲厭塵氛。  
雖非食薇客。似隨麋鹿羣。

感懷

經濟本夙尚。自惜不肯輕。感時謀報國。奮衣出茅衡。拯弊豈無術。及物只有誠。  
蕃山是何人。斯走稱其名。

危言苟見納。敢辭暫苦辛。虛己用衆智。一方不足均。義和暨四境。教養普斯民。  
當早乞骸骨。長與風月鄰。

幽人無所爭。散步愛園林。新篁傳玉色。淺瀨帶琴音。功名不及立。經畫無補今。  
壯心未全死。時學梁父吟。

淫雨

詩稿

五三

安政五年夏

淫雨連數旬。將晴復如仍舊。陸地幾生魚。蛇龍思欲棲囿。誰鍊五色石。仰補上天漏。白日不可見。漚然欲霑袖。

○

人馬皆肥家亦肥。更無一語及軍機。大西洋外君期否。百萬妖鯨蹴浪飛。

雪

大鵬理翮徙南溟。何物鷹兒相搏掣。扶搖九萬垂天雲。碎作越山千丈雪。

壬子歲旦

嘉永五年

硝磺驅邪太的端。庭前爆竹覺枯寒。吾家兼有老樗法。不用梁皇卻鬼丸。

壬子歲旦戲書象山平大星

奉弔桐山老先生失令孫

天保九年十一月

夙坐桐陰聞鳳鳴。賀令孫初誕詩。嘗以鳳雛比之。孫枝底事忽凋零。哀極強要知物化。爲讀南

華一卷經。

○

莎草塞門徑。無復過客跡。夏晚忽新雨。庭林溜寒液。忘世心久閑。對景情更暢更適。誰能聽婦言。不命日暮酌。

有人惠竹筍。燒食甚美。率然賦答

邦人不燒筍。煮食唯一途。我思玉版美。命婦理火爐。候視加謹慎。持操存其腴。素肌脫紫紉。馨香滿屠蘇。清絕真無比。肉味覺難俱。酒後飯亦妙。老饕進幾盃。

和杏村見示之作

樓居陶弘景。久絕往來蹤。故人適相訪。尊酒話心胸。看劍氣同壯。論詩情亦濃。興闌無絲竹。相與聽風松。

○

花木弄晴風不寒。東山秀色亦堪餐。窗閒更有滿缸酒。懷抱何勞強自寬。

○

誰將巧妙筆。描此神仙窟。巖壑轟雲車。光風吹石髮。巢鶴竟無聲。嶺松常有月。石上朱衣人。千年鍊金骨。

題畫

江賞  
青山夙所愛。看畫亦除煩。斷續雲中嶺。依微雨外村。寒流分竹塢。古木傍柴門。酷似舊棲地。臥遊寄夢魂。

屏居

屏居無事愜疎慵。靜見雲煙變碧峯。更有適情人未識。每朝眠起日高春。

禪福寺觀牡丹

知道名花是象翁。尋春此處醉薰風。南泉化去今千歲。依舊時人似夢中。

無題

邈然不與世閒事。只日抽毫貪著書。借問前人誰得比。茂陵閑臥病相如。

賞菊

文久三年三月

萬延元年八月

浦町時代

傍階當座見娟嬾。映帶斜陽晚更鮮。滿室香風醉情好。陶詞一闋撫無絃。

松

攢柯翻空靈鶴舞。孤根鬪石怒猊蟠。從教屈撓加入作。勁節依然傲歲寒。

屏居

若將世相失。春到亦忘情。夜夜坐呼酒。朝朝臥聽鶯。林花不須掃。庭草任其生。無意學周子。疎慵性久成。

墨堤

風雪霏霏灑笠蓑。獨乘清興且行歌。孤村暮色迷牛渚。一帶寒流辨墨河。水上白鷗馴自近。沙邊翠竹望逾多。不知何處尋安道。時看輕舟鼓柁過。

題畫

林外鳥聲曙。溪頭望轉遙。斷霞飛野逕。春樹擁江橋。瀏亮牧童笛。啞啞漁客橈。茲晨足勝事。何更問明朝。

偶作

一片方池涵碧天。鏡光風靜不生漣。閒齋日永無人到。讀盡堯夫觀物篇。

謝人送雪蕈

信山所在春二三月出白蕈。土人呼曰雪蕈。食之甚美。

雪消春日正熙熙。何處瓊田挺玉芝。山客應思塵境侶。和雲寄與到茅茨。

次小林生東台之韻

東台一望鬼神驚。三十六坊嚴若城。胡廣當年死章句。道衍千古有名聲。

○

幾年不掃大倉雲。遐想空馳麋鹿羣。好是春宵拾芝夢。蟠桃湍畔弄奇芬。大倉

與蟠桃湍并在轄野山中。蓋余舊遊所。

塵尾 梁公圖遺物

蔚蔚白塵尾。秀格制非今。京洛御名士。幾年伴妙吟。披風風散雪。揮月月篩金。午眠拂蠅蚋。寒隼驚暮禽。名士仙遊去。忽託信山陰。我亦好吟咏。揮玩同賞心。

古墨 梁公圖遺物

烏玉貴於金。古香滃撲鼻。百年梁伯藏。千里孟光寄。懷人及其物。愛惜異標識。但思磨人誠。時時出寶笥。深紫漬寒泉。硬黃寫細字。何須學涪翁。閉門作墨戲。

雜感

十二首之內 庚戌初夏書示上野老友

洋舶那知無賊計。突來倏去不勝煩。邦人未念黔驢戒。高築礮臺護海門。

庸儒齷齪畫西東。媚美嫉能徒自窮。不省周公定典禮。蠻夷執器守王宮。

閑居

杜門不復出。靜觀時景移。古松高勁節。細草發幽姿。石淺泉常響。林深苔不晞。曳筇後園裡。可以療我饑。

高臥樂無厭。牀頭書幾籤。山閒酒不惡。林下筍尤甜。老畜犧須避。畫蛇足詎添。應全疎懶性。且學王符潛。

秋夜

月落園林風露淒。嫩杉疎竹影迷離。孤螢開闔度高閣。正是吟人覓句時。

積雪攬煙三嶂白。淡雲罩日半天紅。祇林撞出華鐘響。數點寒鴉亂晚風。

寒梅

紅梅爛漫開高樹。特立風霜不怯寒。未認清芬滿天地。癡人猶作杏花看。

少年時代

與同志讀五經

同志團欒讀尙書。春秋大易禮兼詩。三年遠穀仲尼賞。何管人知與不知。

觀楓

霜楓斂返照。火赤添餘輝。夕嵐簸揚厲。滿天墜葉飛。

文久三年か

霧淞

異花忽發水西東。旭日映時殊不同。五色燦然難比況。集英前殿玉籠鬆。

嘉永五年か

偶感

帝用蚩尤兵。終克蚩尤兵。聖人百世師。何無學夫明。刀槍我所長。礮艦彼所精。多少萬古算。長令英雄驚。

嘉永六年十月

偶感

戎霧蠻雲暗海天。書生微力曷能宣。堅城巨艦策空委。短髮蒼顏徒自憐。植木橫江誰起堵。硝苗在野未開田。伐謀元係廟廊事。祇把礮兵聊著鞭。

手刻壽山石印。文曰碧棲得一詩。

岩嶢周青峯。盤紆錯翠壑。幽人愛林居。林深不見客。森森竹萬竿。鬱鬱松千尺。楮杉更幽翳。薜蘿亦籠絡。自愜避喧情。披襟暫槃礴。服玩暨器用。照見皆成碧。適意豈在多。優游永晨夕。乃刻碧棲印。聊以助真樂。

天保十四年夏

○  
蛸爾雅釋魚註井中小赤蟲也一名蛸一名蛸一名蛸一名子子 躍盆水。意氣亦縱橫。寧知盆水外。滄海有鯤鯨。

癸卯夏日

浦町時代

一奮鵬鷲翼。萬里恣廻翔。始知宇宙大。無礙吾徜徉。

○ 萬里江山月在天。夜深風露更娟娟。胸中無物真明快。闊步高吟啖羽仙。

○ 人生累狹見。局信徒自苦。小蟲生盤肉。安知此中腐。會之一浩歎。稱身凌天午。扶搖吹我足。飄飄兩袖舉。海中五大洲。歷歷俯可數。

○ 一春未快聽啼鶯。且暮日日勿忙憊送迎。苦憶山中忘世侶。溪頭鎮日拾黃精。

○ 斷道生涯一隻船。收竿長嘯鬱藍天。篷閒醉夢未全覺。十二灘頭孤月圓。

○ 此地何知百事化。香煙裊裊道心長。午前種竹當三伏。午後翻書在一牀。

老僕

皺面蓬頭齒又疎。形軀未至倩人扶。休訝終日凝然坐。在也是吾家佛頂珠。輟耕錄云。凡奴婢初來時。曰掃盤珠。言不撥自動。稍久曰算盤珠。言撥之則動。既久曰佛頂珠。言終日凝然。雖撥亦不動。

竹庵竹

滄浪啓

天保初年か  
庵前栽疎竹。竹庵名實全。纖纖抽樊籬。纔能帚屋椽。介葉翠露滴。縹節紛霜爨。輕颿旋玉立。每不出其閒。嵇琴對之拂。清韻入冰絃。

題畫

江空秋月明。夜久寒露滴。扁舟何處歸。吟嘯永佳夕。

謝梁公圖先生見贈巨卮

除夕 象山啓再拜

玉池時代  
霏霏集長空。萬里薄窮陰。志士懷慷慨。落日徒長吟。孤琴亦蕭騷。悲風座閒起。雖際熾昌運。杞憂遂未止。長策委蓬蒿。稽淹違良時。天外求同志。比鄰得心知。梁君絕羣資。沈鬱富才識。揚眉論當世。揮翰驚異域。積水尙可測。閭奧終窈渺。

是時對孟光。清宴極嬉笑。甘節守中通。不復歌五噫。欲緩我慨嘆。贈我以巨卮。巨卮畫槿花。雜之栩栩蝶。蝶以視物化。槿以比世曄。得之方一笑。喚童沽臘醅。臘醅琥珀色。爲君傾金盞。興來忽成醉。愁眉開新歡。曠然生遐想。翹身向瀛寰。

浦町時代か

秋夜會龍田元伯宅席上得魚韻

秋夜相逢思邈廬。爐邊嘯咏與與如。謔言將子千金術。莫使吟腸作滯澀。

同

席上探寒韻賦得秋晚高樓

越山雪後北風寒。日落長天雁影單。壯士樓頭多感慨。此時此景不勝看。

同

探蒸韻賦得觀楓

秋暮滿林霜露凝。如然如燒復如蒸。試將春卉品評去。和靖梅花不敢競。

○

小閣臨清流。援琴興亦幽。中心有自樂。不問魚聽不。

題畫山水 辛酉夏月

文久元年

秧田青已遠。柳堤綠更深。小亭帖野岸。清漪宜俯臨。萋萋出水草。穩穩眠沙禽。自愜幽靜情。何復思華簪。疎雨灑前樹。浮煙分遠岑。窗戶含秋氣。水容殊深沈。須臾雨傾河。颯雷動山陰。野水湊渾渾。濤沫下淋淋。川谷元沖虛。清濁又何心。達人齊榮辱。對之披素襟。寄語滄浪客。鳴榔時來尋。

○

雨灑江聲風又吹。扁舟正與睡相宜。無端戍鼓催前去。別卻青山向曉時。

偶成

丈夫胸臆非無願。巉巖懸絕妾婦選。一舉廻天降時雨。格非責難解民困。張華博洽三十乘。金樓聚書八萬卷。一斗百篇李白才。洛陽紙貴左思鍊。惜乎彼雖非夷人。未通經國奚足論。當今俊乂各在官。謀謨無闕不須繕。尸祿養親恩已隆。安安任命無所羨。浩歌長嘯事自適。撫琴舞劍甘狂狷。與衆異致孰能親。唯有水鏡知吾面。

雜詩

一身雖繫世<sub>在</sub>心與俗事空<sub>萬</sub>。高樓常見山吟座。更對松開尊。迎皎月散髮納涼風。即事多真樂何必脫樊籠。

怪松歌

古松有怪形。盤盤傍古宅。幽人撫霜皮。衣巾翠光滴。偃蓋之下白日長。飽聽靈籟響。笙簧留得紅顏茯苓在。看看他日雙瞳方。

馬上雜興

暖日垂鞭出市闌。取行緊慢向江津。傍人不識爲調馬。只道先生趁小春。小春天氣似清明。風暖驪駒得得行。但恨江濱無碧草。不逢紅彩綠衣迎。

讀宋氏宇宙記

天神造下土。敘秩無舛差。平成最先者。犀象逮獅駝。其次生馬牛。後者龜與蛇。微蟲縱橫飛。擾擾如雲霞。皇國蚤開闢。不尙竟云何。君看薩南端。纍纍象骨多。

嘉永五年  
讀宋氏宇宙  
記其九の別  
稿なり。

文久三年十  
月

哭友人

頻年喪吾黨。唯子慰羸單。逸氣欣將展。英圖希有觀。明星方曉沒。嘉卉向春殘。同調又誰在。鳴琴欲罷彈。

讀易

讀易須從本義讀。晦翁此述極精神。果知明白簡當處。不是尋行數墨人。

無題

香餌細綸微者事。鮒鱖滿箔等毫毛。不如開大襟懷去。滄海排船釣六鰲。

蓮

明明君子花。何人可褻玩。外直出淤泥。中通不枝蔓。淨植濯清漣。隱香來亭觀。水陸草木蕃。之蓮愛獨遠。

富嶽

崇名已播九寰間。不啻扶桑第一山。八面玲瓏無向背。浮雲起滅不曾關。

詩稿

天保九年



雁來紅

昨夜霜飛月似弓。幾多雁陣落西風。猩猩鮮血三千石。染出荒園一面紅。

謝岩下某借茶具

單居守陋巷。孤樓唯四壁。凝陰促冬景。況逢寒雨滴。岩生歲月舊。相思素莫逆。欲慰余襟懷。假借及寶鬲。敲石得鮮火。淪雪收甘液。雲腴性所喜。嗽啜永晨夕。時網阻外好。何日得相覲。高情不能酬。悃勤託翰跡。

夜飲

夜飲又何事。紆寒以爲期。案頭讀亦倦。獨酌兩三卮。淺淺三五卮。妙力亦足託。忽然生陽春。不省是霜夜。微醺睡意足。興長就枕時。不知半夜後。風雪掃松枝。

春日喜望月白井二子至

幽閒足容膝。何必是吾廬。況有一層樓。敞爽宜讀書。庭闈亦知春。草木漸榮敷。

陂塘來啼鳥。池沼見遊魚。山郭遠風外。平林新雨餘。良儔偶然至。情款本非疎。汲井煮翠茗。煖酒吹竹爐。相顧無俗緣。高談心所娛。君僕未及更。掃鞍須徐徐。春半夜猶長。早歸欲焉如。

馬上雜興

插路櫻花發。近人趁晴馱。馬驕嘶春。奔馳偶與飄。風會灑面飛。紅興更新。

謝龍田靜山見惠梅花

貞樹占春信。綠條綴素蕤。啣霜伴夜月。和雪飛輕颺。故人屬歡眄。專价寄雙枝。況併風雅惠。妙翰揮娟辭。閑齋坐香風。高唱對淑姿。孤潔契襟素。歲寒相與期。

讀書

畫前心易粗。開通好假洋。言驗化功。不怪伯陽魏道士。嘗從丹鼎著參同。

栽蕉竹三首

人世如羈旅。歲時空代序。若爲飄塵中。營營徒自苦。勢利互相爭。名聲互相詡。

蛭蜨智亦昏。轉丸甘臭腐。寧知曠士懷。所慕非簪組。移竹來清風。栽蕉待疎雨。  
 明窗味道言。幽默得樂所。朝夕對二友。形神共容與。  
 叢蕉障日景。影嫩綠透窗紙。蔡扇不須揮。騷屑入心髓。一夜涼雨至。通夕鳴不止。  
 聊向東軒臥。耳根絕塵滓。  
 手栽牆閒竹。寒翠日蕭穆。老竿風戛戛。新葉雨淋淋。夏晚晚際寂無人。對此撫孤琴。  
 梢頭忽吐月。清影照吾襟。散

天保八年

○

怪石何巖巖。芭蕉何澤澤。倚坐石弄芭蕉。衣袂乍成碧。興到書葉上。黃庭一二策。  
 快脫信毫端。淋漓墨光滴。一夜風雨多。朝來不知迹。見清虛道人平啓書

天保十二年

五柳精舍書懷

柳陰蒼翠覆書堂。兀坐閑中晝自長。信是境幽無鬧熱。更欣理妙入商量。進修  
 人士列牀席。娛玩簡編連。平屋梁絕勝當年彭澤令。北窗一枕譏羲皇。

畫竹

數枝出短牆。蕭索高標自無塵。淒淒復冷冷。月來君試看。應有節金影。凄冷

晒柯亭賞櫻

一樹名花滿座春。嬌紅妖艷照觀人。沈香亭畔無茲種。枉把牡丹當太真。

絳英齋席上贈林大輝

壯年常病氣殊銳。淺學亦憂心枉勞。珍重鄰藩秀才子。雍容閑雅素風高。

無題

舶礮每晨轟海城。居民安寢未曾醒。西來東去大江水。獨自洶然鳴不平。

蕺菜

得意乘春生道周。穢腥難復藥籠收。唯有山南江左客。終年充饍不知瘡。

春日謝某人餽酒饌

君家良宴會。春城屈時英。殺核羅妙珍。咳唾綴瓊瑩。罪夫臥牀下。翹首憶平生。

嘉永六年

記存餽盛饌。慙歎見厚情。華觴雖不屬。似與芳尊盟。終念唱和興。臨風我心傾。

不二岳

雄鎮勢無比。蓮八朶開天外。四時凝積雪。白日飛寒靄。大麓一縷雲。衆山皆所蔽。萬里霈然雨天下。羣生仰普濟。茲山移在彼。宗柴誰容喙。咄哉秦漢主。劣封蒙陰岱。

古詩

共工與祝融。酣戰終不勝。借去聲義怒觸不周山。地維缺以傾。斯語雖似誕。惡知無所承。皇事存若亡。惟理意可徵。潛火在地內。伏發如雷霆。非時迸成震。水力不能膺。海翻碎山岳。河盪襄丘陵。古昔號平土。倏忽作絕陁。是謂地天缺。維柱元無形。前史記此變。工融存寓名。

謝子康惠水仙

懷哉水仙子。翠袖白玉膚。江城一辭別。路遠莫能輸。雙本忽至前。此情豈可虛。寒家梅未發。無奈芳魂孤。

哭山崎童子

童心與知我。親信情相依。同服暮春服。欲風舞雪歸。嘉苗竟不秀。肉骨計全非。接見復何日。淚多不能揮。

有感

四歲揜幽局。未知悔前失。愁時向東南。非關望月出。

謝小宮山某惠江都新蔬五種

陋居寒猶苦。庭園雪未融。春菜領佳貺。都會入夢中。縹枝野蜀葵。紅芽毫防風。囊荷擢玉筍。薑錡分雲叢。薇蕨亦珍異。不知採何峯。盤中璨似錦。寒廚乍覺豐。飪淪進杯酒。齋窗暖如烘。

送小林畏堂遊別所溫泉

山水本不惡。夏景明且媚。靈泉更勝絕。古寺亦幽邃。廉士厭俗紛。良辰發奇思。將託盥濯興。暫展煙霞志。童冠攜琴鶴。籃輿入新翠。殘花猶在林。啼鳥求其類。

繫我臥孤樓。單棲少適意。詠歸知何日。埃有錦囊寄。

雜詩

揮袂謝幽側。騰身集崔嵬。心胎太極氣。手揚斗閒魁。荒荆忽成桂。蟄鱗冬有雷。君看九州寶。自入朱門來。

皇皇謁荆人。佻佻遵陽虎。及覺一禮已。翩然遂逮魯。全身有遜接。直道無苟處。故稱聖如龍。屈伸茲可覩。

題畫

二月江村春可憐。微風暖日水生煙。遊人應是探花返。柳岸斜陽立喚船。

秋夜

秋霧茫茫月影沈。氣寒零露響疎林。書窗寂寞諸緣息。一穗青燈照夜深。

有人舉長國覺巖鬪饑贊。曰吉祥復吉祥。安樂壽無量。明月與清風。夜夜訪健康。予甚不以爲是。乃援筆槩括如左。

長國覺巖寺是松巖和尙五世國覺

非迷復非覺。千載長無事。風月故多情。時時勞存記。

和竹村杏村見寄之作

謹阻歲時曠。塊然意獨悠。破眠資綠乳。排悶有青州。新樹滿幽垆。殘花照小樓。瓊瑤忽見送。撫景不能酬。

苦竹

如厭俗人看。偏欣牆壁遮。虛心誰愛賞。苦節自矜誇。竿高宜棲鳥。叢卑可出花。歲寒後凋落。松柏又何加。

題石叟藏石

石叟愛奇石。奇石不可數。山亭舊構成。蓮房新摘取。靈龜不染頤。靜養存萬古。他日得少暇。欲著爲石譜。

苦寒

日行向東陸。斗柄指震方。寒色久慘慘。無乃陰先陽。愛日不可親。山陰堆雪霜。

安得鄒陽律。草木被暖光。

念佛僧

木魚聲裡不知夜。專念那驚報曉鐘。但恐老僧求入聖。凡魚遂不化真龍。

梅

雪擁寒林鳥不翔。故人無復到茅堂。山城歲暮劇蕭索。依舊梅花獨自香。

謝望月君見惠竹筍

新刷竹芽繡錦紫。故人情好寄將來。封侯肉食非吾事。驚喜烹燒揮晚杯。

文久三年

越後有大島村。在信川之西。繞村六七里。皆桃花林。每春花時。彌望如晨霞。余久聞其勝。未能遊往。常以爲憾。癸亥秋。從市川壽獲張嵐溪所

圖此卷更增神飛得二詩

桃林竝水遠。芬蔓照深春。應有修清士。移居避世塵。落花歸艇重。漁嘯泛鷗馴。我亦厭紛濁。滅踪向此津。

嵐溪揮妙筆。異境忽移斯。遠近紅霞落。紆餘錦浪隨。望山思隱者。對水羨漁師。脫履知何日。振衣欲不遲。

逸題

奇懷挈杖趁良辰。到處人爭爲主人。本與淵明期後進。寧知康節是前身。

屏居

棲止幽僻宜守拙。身閑心靜塵囂絕。樓頭盡日坐蒲團。笑看山雲自起滅。世網如今日加密。死難便瘞此身生。雖然剩水殘山好。未可劉伶荷鍤行。櫻花爛漫壓枝開。一片飛紅亦妙哉。似答乃公爲賦意。清風忽入杯中來。閑人行樂興如何。浴後輕風拂面過。卻恐淹畱勞夜夢。溪山深樹杜鵑多。我有數壺酒。暢飲與山鄰。世閒閒是非。何以繫此身。嘯傲忘形跡。任真獨自珍。碧山深處雲常溫。茅屋數間臨水葦。安得舉身投此中。冥然忘世理茶笈。杉篁葉上響鏗鏘。覺得高齋有異光。且喜朝來無一事。憑窗小字試硬黃。

不知差處非吾累。前卻商量勞私智。恰似窺天未密初。疇人日日正時器。  
 孤城雨漸歇。四山雲未開。水從溝澮盈。風自草閒來。白日在西天。垂虹飲曲隈。  
 欲取千朝醉。把杯日幾回。  
 無事理園逕。優游心自閒。移松思掛月。洗柳欲看山。菖茂水逾活。苔深石不頑。  
 幽靜自有味。不願人扣關。

萬延元年

○  
 廟算誰能別。少多至今畢竟不知他。蚤教當道聽吾計。舊貨新銀也不訛。  
 偶成

端居觀物理。深探造化曠。所屈者不亡。所伸者无息。

諸葛武侯

龍臥南陽前。誰知吞萬軍。一朝元□舌。三顧起風雲。

日蓮僧

弘安民物號充豐。獨奈胡元闕。此中滿朝文武稠。於草識破時機不若公。

東筑水

山郭久無雨。虐炎暨竹戶。非因槃礴興。詎解釜甑苦。巖壑快胸襟。風泉清肺腑。  
 周旋莫憚煩。妙卷思蚤撫。

謝真樂道者送雪菌黃山谷宜州家乘所云雪菌亦恐是此物

二月江城春意濃。晴窗曝背暖如烘。寄來雪菌白盈箬。卻憶宜州山谷公。宜州家乘  
二月廿五日晴。不可挾纒。蔣侃送金鈴子雪菌。皆一箬。

應節堂觀樂舞

今日盛宴會。樂舞導正心。賓主咸懽洽。跂行化德愷。容存箕子舊。器傳虞夏音。  
 陽達春流谷。陰收秋滿林。先公千載人。嘗善水龍吟。緬想跨鶴背。歸下庭松陰。

馬上雜興

驪駒稍稍當人意。粗似溪堂刷字來。天色明朝晴可卜。一鞭逆約探花魁。

文久三年

同前

凡馬之步。狹不及廣。然本邦馭馬舊法。從其稟質而閑習之。不改步之廣狹。漢韓亦然。近日泰西有一法。能令馬步狹者廣。其法深沼田畝。騎而涉之。反復數十回。余試之。極有效驗。其始試。戲賦小詩。

欲工馬步涉畦畝。反復旋回工未成。絕似後生惡文字。棘艱艱脆欠安平。

文政七年二月

恭奉壽老君侯臺下五十初度。應教

邸第琅玕知幾年。清陰翳鬱玉堂前。今春五十長生始。貞節此君何羨仙。

佐久閒國忠誠恐頓首拜上

賀大谷津君七十之壽辰

瑞霞靄靄壽筵新。賀客團欒飽酒鱗。想得廬江左元放。自施斟酌醉羣臣。

題白鼠畫

我讀相鼠詩。早曉禮法大。汝能慎爾身。福祿其來會。

菊

天保四年  
靜修齋山  
號常山齋

花開酒客加量。花落騷人換鋪。彭澤先生死後。再逢知己乎無。

同龍田高山諸君。靜修齋論周易

高齋論易坐三更。四壁蟲聲接語清。相顧中庭露如玉。月華爛散滿南楹。

討論性命夜方闌。主客垂簾成定觀。默識神通無一語。窗閒唯有月團圓。

癸巳秋爲荒井良作書

佐久閒啓子迪

望不崩隄。追慕先考

天保四年か

親勤衰力勸烝徒。沐雨櫛風忘老軀。一旦仙遊功在此。徘徊欲去又躊躇。嚴霜凝地三冬節。烈日飛空九夏天。能服其勞動壯少。商量辛苦有誰先。庶民築隄城西邊。洪水時來應涵天。名士徽猷賢主德。不崩不缺度千年。續紛執事子來氓。不日告成歡樂長。皇考功勳吁大矣。能教厥辟周文王。先考曾遊此顧瞻。從容自得撚蒼髯。追懷思慕今亡此。紅淚漣漣滿袖沾。

○

庶民の詩は  
文政十年即  
ち崩堤の落  
成時の作ら  
れし傳へら  
如くも此の  
題によりて  
其の然らざ  
るを知る。○  
天保五年か

江城五月雨蕭蕭。睡起焚香坐小寮。卻憶山齋午鐘後。忽聽簷滴看芭蕉。

題畫

四月盡日期遊此。悠然來賞風景美。黃梅熟節漾青波。燕子開時漲紫水。鳧鷖幾隊戲前池。杜鵑一聲過後陂。覆亭老松隲鬢影。當簾楊柳扶疎枝。村醪幾瓢傾欲盡。蕎麥盛來似挑糸。吟中何厭歸路遠。貪愛幽趣題新詩。

此日與信山畏堂高野生。同遊廣尾聽泉亭。題此詩。使文筌畫所觀。

觀水啓子迪錄北窗下

一齋塾時代

客中感秋五首

一自雲遊入武城。幾回搖落客心驚。階前絡緯金風冷。戶外芙蓉玉露清。苦憶青山支遁隱。肯知彩筆惠休名。卽今姨嶽秋應好。早晚相攜問月明。  
江天白露度哀鴻。幽獨蕭然感不窮。麻谷煙雲含暮雨。芝山楓樹自秋風。僑居日月波瀾色。浮世聲名睥睨中。懶性由來甘澹泊。何堪久已客關東。

寂莫衡門赤水潯。閑窗隱几對秋陰。浮雲不隔蕭條色。落日殊令感慨深。僑居西風供伏枕。放園明月阻披襟。近來親友多離別。獨奈天涯孤客心。  
嫋嫋西風下翠微。感時徒憶侍庭幃。百年天地多留滯。一世交遊半是非。舊里黃花誰滿把。東江落木獨關扉。可堪窈窕寒階月。深映淒涼旅客衣。  
千古深知宋玉才。至今秋色實悲哉。西山白雪衝天落。東海寒濤搖地來。客夢十年唯撫枕。鄉心萬里更登臺。回頭蕭瑟淒風晚。迢遞關河片月開。

新年作

自歎天涯遊學身。東風再負故園春。元知馬鄭非通士。爭奈由求亦具臣。經國志存從蚤歲。益民術就念何辰。不才如舊年空長。深愧窗梅秀色新。

○

朱禔天仙戴鐵冠。傳吾不死九還丹。金爐玉鼎非恍惚。火候藥材尤的端。白鹿山中雲脚絕。紫陽洞裏月華團。卽今始信修持妙。卻喚從前術未完。

詩稿

天保六年



天保七年暮春

滄浪漁夫啓題

○  
 論無緣自誣。滯有由自障。道器元非分。分之乃茫茫。大人窺精微。巨細豈足量。  
 高嶽即蟻垤。一滴是大洋。太虛無罅隙。金石盡蜂房。枯木存生氣。死灰函眞陽。  
 不悟畫前易。焉知命性情。君莫問妄誕。萬古有羲皇。天保七年暮春。書於專  
 精精舍。象山外史。

天保七年九月

○ 九日聞桐山先生有登高之遊。追之不及。

四林霜葉接流霞。徙倚迷尋君子車。自笑龍山楚狂客。獨踞石上嗅黃花。

浦町時代

朝來微雨亦新晴。晚起焚香獨倚楹。庭際無風華歷亂。一泓春水湛虛明。

同前

○ 夜登皆神山

石徑穿林月色沈。寒蟲唧唧助吾吟。風外追涼多興味。草閒不厭露華深。

浦町時代

山路險且難。斜月黑松成列。夜深少行人。行人寥寥百蟲絕。獨彈鐵如意。擊清歌時一闋。  
 其聲甚悲壯。山石可破裂。  
 近日使刀工鍛鐵如意。頗適于意。是夜攜之。彈而節歌。亦一時之快事也。

○ 象山平啓

暮夜輕陰秋黯然。鴈羣彷彿落城邊。長風夜半雲飛盡。萬里江山月在天。

○ 夜歸

北風衝面歸來遠。天際時聞鴈渡聲。白虎門前夜將半。一彎斜月人鳴箏。

浦町時代か

○ 奉醉桐山先生用元韻

遙雲筍輿度。悵然暮色催。神飛碧樹嶺。思騁金仙臺。忽拜今朝賜。頓償昨日歡。  
 吟過覺心爽。先盡掌中杯。

浦町時代か

○

象山

託心論性對燈殘。別後如何孤影寒。若證惓惓憶君切。四更蘿月落欄干。

浦町時代か

次韻

萬花梢上日將春。更見煙霞際淡濃。芳春行樂未闌也。何事禪林動暮鐘。

天保十一年正月

庚子新正謾吟

邵子詩云。文武之道皆吾家事。

向來未作機權計。覺得心胸儘快明。實踐方知男子志。多言徒負丈夫名。非才雖少契夔學。昌運幸爲堯舜氓。家事聊治對邦國。此生自誓不虛生。

天保十一年

都下有入。惠今春所刷印。記都下諸名家字號。與二三子閱之。賤名亦收在其中。戲題三詩。

天保十一年十一月

題壁

惡影卻趨徒自苦。竊鈴掩耳更堪悲。多方裝飾爲何事。識破金鑰已幾時。

玉池時代

○

一水號玉池。澄清凝寒碧。側有息機人。高柳繞其宅。對水意自閑。聽禽心更寂。出門望城市。世人何役役。

玉池時代

題鐵如意

支頤非所誇。抓背空朝暮。不及麾風雲。詎知神妙處。

玉池時代

謝梁川公圖惠山水

雨餘嵐翠望冥濛。老樹如雲帶晚風。一幅真圖丘壑足。遁踪何必向山中。

○

盆頭仙子試明妝。便覺春風滿室芳。卻笑君遭他化了。起居香裡不知香。

聚遠樓時代

紅雨盃

紅雨紛紛下。忽遭曾颺臻。橫斜灑滿面。清絕倚欄人。

聚遠樓時代

詠龜

固分生無智。寧甘骨有神。漆園見至理。曳尾發吾真。

高義園十二詠

常關園之西門面于小巷其名雖取於陶徵士之詞而別有新意

常關嚴鎖鑰。題署免疑猜。非有恆心客。終年不敢開。

聚遠樓在園之西南結構完潔四面軒牖瓌瓌瞻眺極佳

虛檐出林表。雲霞圍四鄰。山光將水色。亦拱座中人。

清夏軒樓下即清夏軒北窻惹涼三伏不知有暑

疎松拂宇青。深竹透簾翠。九夏足清風。不容熱官伺。

瓊林自樓正東延及東北皆紅白櫻樹數不下二三百花亦數十種故開落相承每春約有二十日

春雨入春樹。瓊瑤次第開。大夫多政暇。日日看花回。

筓徑筓籊之叢與瓊林相接青葱鬱然中通一徑自清夏軒往紅雨庵希范亭皆由此

老幹已瀟灑。新梢更闕清。過客須徐步。莫令棲鳥驚。

古木公古松一樹在園東面霜皮鱗鱗天矯擎空真數百年物可為園中羣木之冠故名

仰望誰敢狎。鬣鬣具鱗甲。既已凌青霄。不妨霜雪厭。

范公松在古木公西北數步蜿蜒然蹙縮然龍攀虎踞怪形奇狀世所希睹昔者范文正數言事以動朝廷當權者不喜每目為怪人及後用為西帥

上疏請城京都以備虜曰吾又將怪矣乃書陸龜蒙怪松圖贊以遺當權者曰朝廷方太平不喜生事某獨於縉紳中為妖言既齟齬不得伸辭因乖戾得無如龜蒙之松乎此松之名蓋本于此

古怪駭流俗。歲寒真性腴。范公會見比。千載德不孤。

希范亭傍范公松結一茅亭清雅可愛

雖由松得名。欲以名求實。期待太深長。省觀警遺失。

寒泓亭南有活泉清激寒洌淳澗為泓可鑑毛髮

寒泓蔭二松。不識何人鑿。應緣照古操。終古不曾濁。

紅雨盃在泓之西南六角亭子宜月宜雪清賞不止花時也

盃後花成帳。盃前花作茵。斜風紅雨漲。清絕倚欄人。

長春菱 當盒之正北。不設戶壁。徒十二柱。曲折如磬形。寘竹榻五六。以待賓客。縱觀園中之勝。是爲最。

東畔素蕤發。西邊紅萼披。那須安四壁。自在看春移。

高義園 予得罪禁錮故里。舊廬荒廢。不可以庇琴書。於是假望月大夫別業。所云清夏軒者。居焉。而園中之花木泉石。使予專之。以廢錮之余。而悅玩

自適。殊不落寞。是大夫之高義也。不可使後之人無聞。因高義名其園。詩以詠之。

有馬能假人。有園能容客。千載之絕調。足敦世道薄。

天保七年四月

○鼎鍊異味又名品詩一韻

寄象山兄

源 久道

鼎鍊異味は友人山寺常山(諱久道)及び舊師鎌原桐山(諱貫忠)と交々和韻せるものなり。常山桐山の詩をも參考の爲併せ掲ぐ。

昨日赤門會。經綸談未央。歸途乘清夜。相攜上高堂。玉鼎烹菟茗。金爐焚降香。四鄰人已定。幽寂興轉長。細論生兼死。明辨霸與王。四顧同氣少。洪歎神偏傷。五更辭謝去。還家意茫茫。就寢不能寐。憂煎一斷腸。又思維持策。實在我輩倡。請勵蹇驢力。俱要名節芳。

答常山兄之寄用元韻二首

平 啓

落月隱庭樹。漏聲夜正央。交臂話今古。立論服堂堂。爲撥宣爐灰。手斲一瓣香。澆茗談轉濃。只惜夜不長。功力黜霸略。學術稱帝王。欲速見小利。國脈多遂傷。可歎用事者。此義昏混茫。納約牖未闢。爲之回中腸。微力諒有限。敢曰爲世倡。相期從此學。永挹聖賢芳。

遡游不可及。宛在水中央。之子天資美。才器稱廟堂。機變通武略。何惟文墨香。雄偉驚懦俗。鐵劍三尺長。心術本正學。語言道先王。中心勞國事。且暮懷憂傷。知音又誰在。邦土徒茫茫。一詩忽贈我。披誦見肝腸。忠懇已如是。何者不隨倡。維持須努力。不朽貽其芳。

覽山寺常山佐久間象山二賢契唱和詩有感。卒次其韻。卻寄 滋野貫忠

東山有兩傑。青年未及央。學術淵源遠。文武齊上堂。膺蘊義烈氣。口吐忠厚香。滔滔天下是。相顧慨歎長。安石偏曰利。魏徵每說王。天運常循環。興衰庸何傷。士氣今萎薺。相率走